

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語基本語辞典-初級500語-(試行版)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 独立行政法人国立国語研究所日本語教育基盤情報センター 公開日: 2024-10-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島村, 直己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000336

日本語基本語辞典

—初級 500 語—

(試行版)

平成 21 年 9 月

独立行政法人国立国語研究所

日本語教育基盤情報センター

刊行にあたって

現在、日本人児童生徒用の国語辞典は多数あります。しかし、国内で刊行された外国人のための日本語教育用の学習辞典は、『外国人のための基本語用例辞典』(文化庁)、日本語能力試験出題基準3・4級に取り上げられている語彙を記述した『基礎日本語学習辞典』(国際交流基金)、『外国人のためのローマ字日本語辞典』(東京堂出版)などをはじめいくつかありますが、日本人児童生徒用に比べ、種類や記述語彙数はまだまだ少ないとえます。

辞書の利用状況の調査研究は、1984年の言語生活編集部の「『アンケート』辞書の利用状況」(『言語生活第388号』筑摩書房)、1995年の佐藤洋の「英和辞典をめぐる調査—英和辞典はどう役立っているか」『学苑663号』昭和大学)、1996年の湯浅茂雄の「辞書と言語文化—国語辞典の利用に関するアンケート調査から」(『国文学解釈と教材の研究41(11)』学灯社)、2000年の西村公正・須藤廣・鷹屋秀史の「学習英和辞典はどのように利用されているか?」『関西学国語大学研究論集71号』関西外国語大学)、2001年の畠山豪の「辞書指導の必要性と重要性—大学生の学習英和辞典の利用に関する調査からー」(『盛岡大学英語英米文学会会報(12)』盛岡大学英語英米文学会)、2004年の井上祐子・多良静也の「英和辞書指導に関する教員の意識調査と現状」『高知大学教育学部研究報告(64)』(高知大学教育学部)など、日本語母語話者を対象としたものは多数あります。

日本語学習者を対象としたものには、2005年の金庭久美子、川村よし子、前田ジョイスの「日本語学習者のための電子辞書編纂の基礎調査」などがありますが、日本語母語話者対象のものに比して非常に少ないという状況です。

日本語教育基盤情報センターでは、第二期中期計画の目標である日本語教育の基盤情報を整備する一つとして、教育基本語彙とその意味記述の研究を進めております。この成果をもとに、学習辞典における意味記述の課題などを探り、今後の外国人日本語学習者のための学習辞典の枠組み作りを目指すために、本書を作成することになりました。

本書は、国立国語研究所日本語教育センター第二研究室で選定した「初級500語」に、佐藤亮一(国立国語研究所名誉所員)、正保勇(東京外国语大学名誉教授)、鶴岡昭夫(山口大学名誉教授)、飛田良文(国立国語研究所名誉所員)の4氏の御協力のもと、編纂担当者である島村直己主任研究員が語釈と用例を付けたものです。

本書の作成に当たり、学習用の辞典として説明表現を平易にすること、意味記述を詳しくすること、用例を豊富にすることを基本方針としました。これらが十分に実現できたかについては、読者の御判断、御意見に委ねることになります。

経済交流、人物交流が盛んになる世界情勢において、今後、ますます日本語学習者の層は拡大すると思われます。その際、特に辞書の重要性は一層増していきます。本書が、今後の充実した辞書開発、辞書作成の一助となれば幸いです。

最後に、御協力くださった4氏をはじめ、多くの関係者の方々に感謝申し上げます。

平成21年7月31日

独立行政法人国立国語研究所日本語教育基盤情報センター
センター長 柳澤 好昭

本書の編纂にあたって

『日本語基本語辞典－初級 500 語－』(以下、「初級 500 語」とする。)は、国立国語研究所日本語教育センター第二研究室『日本語教育語彙資料(2)－低学年初級 500 語－(五十音順)』(1979 年)に意味記述を施したものです。ただし、『教育基本語彙の基本的研究－増補改訂版－』(明治書院、2008 年)に収録した日本語教育基本語彙データベースを元版としています。

「初級 500 語」には、以下の特徴があります。

1. 見出し語それぞれに仮名表記、表記、品詞、意味記述を示したこと
例) 名詞は「名」、代名詞は「代」、形容詞は「形」、形容動詞は「形動」と省略表示
2. 見出し語の配列は、フリーソフト sortf のパラグラフソートの機能を用いて、語彙項目ごとに五十音ソートで行ったこと
例) 「あちら」→「あつい」→「あっち」
3. 外来語は、言語名(英語は言語名を省略)と原綴を示したこと
4. 動詞は、活用の種類と自動詞、他動詞の別を示したこと
例) 「五自」(五段活用の自動詞)、「五他」(五段活用の他動詞)、「下一自」(下一段活用の自動詞)、「ス自」(スルを伴う自動詞)など
5. 意味記述は、下位区分ごとに数字で区別したこと
例) ①, ②, ③
6. 語釈と用例は改行で区別したこと

「初級 500 語」を作成するあたり、次の日本語研究者の御尽力、御協力を得て意味記述等の執筆を行いました。執筆分担は、以下のとおりです。

(敬称省略)

あお (青)	～ おんなのこ (女の子)	靉岡昭夫 (山口大学名誉教授)
<p.1>	<p.24>	
か (火)	～ こんど (今度)	佐藤亮一(国立国語研究所名誉所員)
<p.24>	<p.44>	
こんにちは (今日は)	～ ちょっと (一寸)	飛田良文(国立国語研究所名誉所員)
<p.44>	<p.67>	
ついたち (一日)		島村直己 (国立国語研究所)
<p.67>		
つかう (使う)		飛田良文
<p.68>		
つき (月)	～ ふん (分)	島村直己
<p.68>	<p.90>	
ページ (page)	～ わるい (悪い)	正保 勇(東京外国語大学名誉教授)
<p.90>	<p.108>	

本書における意味記述とその試みについて

意味記述で留意したこと

「初級 500 語」の意味記述に際して、学習用辞典ということから次の点に留意しました。

1. 説明表現をできるだけやさしくするように心掛けたこと
2. 意味記述を詳しくしたこと
3. ひとつの語法につき複数の用例を付けること
4. 日本社会で標準的に使われる表記で示すこと（1見出し1表記の原則）
5. 国語辞典だけではなく、英和辞典なども参考にすること

この留意点については以下に述べます。ivページの囲みを参照しながらお読みください。

説明表現に関するこ

すべての留意点を配慮し、1年間で「初級 500 語」の意味記述を完了することは、思った以上に難しいことでした。「初級 500 語」にある語彙は、小学校低学年用の語彙です。

しかし、ある程度満足のいく意味記述をするためには、中学生以上の語彙力を持った読者を想定しないことには、意味記述ができませんでした。したがって、上記 1 の「説明表現をやさしくするように心掛けた」ということになり、やさしい説明表現は限定的にならざるを得ませんでした。この辞典は、入門期以外の成人日本語学習者が、ある単語を意味的に使いきる、使いわける、使いこなすために活用できるものと言えます。

意味記述に関するこ (次ページ参照)

意味記述についても限定的と言えます。網羅的、詳細な意味記述のためには、コーパス（大量の言語データの集成）が必要です。多くの方々から期待されている国立国語研究所の日本語の書き言葉コーパスは、現在開発中です。国立国語研究所の日本語コーパスのモニター版の使用も検討しましたが、利用上の技術的な問題、1年間という制約から利用を断念しました。会話等の話し言葉については大量のデータの集成はありません。

そこで、「初級 500 語」では、小学生や中学生用の新聞のデータ、インターネット電子図書館の青空文庫 (<http://www.sumomo.sakura.ne.jp/>) のテキストの活用、市販の国語辞典の意味記述の参照により、意味記述を行いました。その咀嚼の仕方は、執筆担当者との月 1 回の会合で検討しつつ進めましたが、日本語データの基盤がないことで、意味記述、説明表現の選択において、主観的判断の完全な排除は難しく、執筆担当者全員の意見が一致することは難しいことでした。そのため、意味記述に差異が生じたことは否めません。

語法・用例に関するこ

ひとつの用法に複数の用例を記述することを原則とし、用例は作例としました。小学生、中学生用の新聞のコーパスを利用して用例を記述することを試みましたが、時間的制約のため著作権者の許諾が取得できず、作例が中心となりました。コロケーション (collocation, 連語関係) をはっきりさせるためには、長い用例が必要ですが、作例ということで、短い用例が中心となりました。なお、慣用句は「語法」に記述しました。

表記に関すること

「初級 500 語」では、1見出し1表記を原則に、学習辞典ということから、日本社会で標準的に使われる表記を用いました。そのため、仮名で示したものもあります。また、注意すべきところについては、「表記」のコラムで取り上げました。標準表記の採用は、国語辞典界の傾向です。標準表記を用い、表記が変わると見出しを変える市販辞典もあります。今後、学習用の基本語辞典の発展には、明確な表記規則と大規模な表記調査が必要です。

コラムに関するこ

「外国人日本語学習者に役立つように、「語法」だけでなく「文化」「語源」「表記」「参考」などのコラムを随所に設けました。特に「語法」のコラムを充実させることを目指しました。これは、主担当者が市販の国語辞典で語や漢字の用法をコラムで説明したことを利用したのですが、英和辞典、特に中学生用のものも参考にしました。しかし、「語法」には、コーパスとその分析ということが必要不可欠のため、執筆担当者の知見をもとにすることになりました。「語法」での説明記述の充実は、今後の最重要課題です。

《意味記述の例》

あお（青）【名】

① 色の1つ。晴れた空の色。ブルー。

「青の絵の具で背景の空を塗る」「空の青に白い雲が映える」

用例の数量

② 緑、青緑などの色。

「信号が青になる」「草原の青が目にしみる」「青は藍（あい）より出（い）でて藍より青し（弟子が先生を超えること）」

あお（青）【接頭】

① 青い色をしていることを表すことば。

「青信号になってから道路を渡ろう」「青鉛筆で線を引く」

品詞情報の区分

② 年が若く、一人前でないことを表すことば。

「まだ青二才のくせに生意気を言うな」「青書生の分際で何をほざくか」

用例の選定

あおい（青い）【形】

語法の提示範囲

① 青の色をしている。

「目の前に青い海が広がっている」「ヨーロッパでは青い目をした人が多い」「この青いぶどうはマスカットという品種です」

② 果実が赤や黄色に色付いていない。未成熟だ。

「梅の実が青いうちに落ちてしまった」

③ 物事を完全にマスターしていない。未熟だ。

「おまえの考えはまだ青い」

④ 血の気がない。

「心配のために青い顔をしている」

説明の難易

「初級 500 語」は、学習者用辞典における意味記述のあり方について模索し、時間的制約の中で、これまでの知見を駆使し、執筆協力者を得て作成しました。意味記述に改善の余地がありますが、日本語学習者用辞典として今までにないものを目指しています。

学習者に必要な意味記述をするためには、前述のとおり、基盤となる日本語データをはじめ、記述する意味の範囲、記述に使う語彙の範囲、印刷媒体の特徴と限界、掲載する情報の範囲など、解決すべき様々な研究課題があります。例えば、日本語学習辞典に助詞や助動詞が体系的に網羅されていないことも課題の一つです。

この「初級 500 語」には、これをもとによりよい学習辞典や対訳辞典が作成されるようという執筆者たちの思いがあります。また、学習辞典の意味記述の研究成果を具現化したものとして、外国語研究者や日本語教育研究者などをはじめ多くの方々からご意見を頂戴したいと考えています。そこで、本書は、出典明示の上での配布自由、改変自由として刊行しました。

日本語教育を円滑に進めるためには、よい対訳辞典が必要です。著作権や基盤となる日本語データの問題、意味記述の難しさなどにより、よりよい日本語学習用辞典の編纂はなかなか進捗していません。日本語教育基盤情報センターは、日本語の教育や学習にとって基盤となる日本語データを集成していく使命と責任があります。学習辞典を取り巻く課題を解決するために、日本語学習の基盤整備という観点から、日本語の語法用例の情報を集成し、誰でも自由に使って学習辞典を作る環境を整えることで、日本語教育だけでなく国語教育に大きな貢献ができると考えます。

平成 21 年 7 月 31 日

独立行政法人国立国語研究所日本語教育基盤情報センター
主任研究員 島村 直己

意味記述編

—あお（青）～わるい（悪い）—

あお（青）【名】

- ① 色の1つ。晴れた空の色。ブルー。
「青の絵の具で背景の空を塗る」「空の青に白い雲が映える」
- ② 緑、青緑などの色。
「信号が青になる」「草原の青が目にしみる」「青は藍（あい）より出（い）でて藍より青し（弟子が先生を超えること）」

あお（青）【接頭】

- ① 青い色をしていることを表すことば。
「青信号になってから道路を渡ろう」「青鉛筆で線を引く」
- ② 年が若く、一人前でないことを表すことば。
「まだ青二才のくせに生意気を言うな」「青書生の分際で何をほざくか」

あおい（青い）【形】

- ① 青の色をしている。
「目の前に青い海が広がっている」「ヨーロッパでは青い目をした人が多い」「この青いぶどうはマスカットという品種です」
- ② 果実が赤や黄色に色付いていない。未成熟だ。
「梅の実が青いうちに落ちてしまった」
- ③ 物事を完全にマスターしていない。未熟だ。
「おまえの考えはまだ青い」
- ④ 血の気がない。
「心配のために青い顔をしている」

あか（赤）【名】

- ① 色の1つ。血のような色。紅色。朱色。
「赤のボールペンで書く」「信号が赤になった」
- ② まちがいを直す朱色の書き入れ。
「生徒の作文に赤を入れる」
- ③ 損失。マイナス。
「決算で赤が出る」
- ④ まちがいなくそのとおりであること。全く。
「赤の他人なのに親切にしてくれた」
[語法] ③の反対語は「黒」。

あか（赤）【接頭】

- ① 赤の色をしていることを表すことば。
「赤信号では止まって待ちましょう」「赤鉛筆で数字を書く」「赤レンガ造りの家が建った。」
- ② 全くその通りであることを表すことば。

「赤恥をかく」「赤裸になる」

あかい（赤い）[形]

赤の色をしている。

「赤い靴をはく」「髪を赤くそめる」「酒を飲んで赤い顔をしている」「恥ずかしさのために耳の付け根まで赤くなつた」

あかるい（明るい）[形]

① 光があたりをよく照らしている。

「月夜で道路が明るい」「夜が明けて東の空が明るくなった」

② 赤や黄、薄緑などの色が多く使われてはなやかだ。

「全体に明るい感じの絵が描けた」「明るい柄のワンピースを着る」

③ 性格や態度などが陽気だ。明朗だ。

「クラスで明るくふるまう」

④ 知識が多い。よく知っている。精通している。

「うちの父は物理学に明るい」「外国の事情に明るい」

⑤ これから先のことには希望がもてる。期待できる。

「両国の文化交流に明るい見通しが立つ」

[語法] 反対語は「暗い」。

あき（秋）[名]

夏の次、冬の前の季節。

「秋の長雨が続く」「秋には柿の実（み）が実（みの）る」「秋に鹿の鳴く声を聞いても悲しい思いにふける」

[語法] 同音語の「飽き」にかけて、「男心と秋の空」「女心と秋の空」のように、移り変わりやすいことのたとえに使われることがある。

あける

[一]（明ける）[下一自]

① 日が昇って明るくなる。

「東の空から夜が明けてくる」

②（ある時期が）終わる。

「夏休みが明ける」

③ 新しい年がくる。

「年が明けて元日を迎える」「明けましておめでとう」

[二]（開ける・空ける・明ける）[下一他]

① 表面の一部をとりのぞいてすきまを生じさせる。

「壁に穴を開ける」

② ふさいでいるものをどけて、中のものが見えたり、物を入れたり出したりできるようにする。

「戸を開ける」「幕を開ける」「ビンのふたを開ける」「胸を大きく開けたドレス」

③ 間を広げる。すきまを作る。

「行間をあける」「車と車の間をあける」「2位の選手に大きく水を開ける」

④ 中に人や物の入っていない状態にする。からにする。

「一升瓶を空ける」「午後から家を空けます」

⑤ 予定を入れないでおく。

「重役の席を開けておく」「明日の予定は開けておく」

⑥ ドアやシャッター、幕などを開いて、仕事をはじめる。オープンする。

「毎朝 10 時に店を開ける」「来月 1 日（ついたち）に店を開けます」

⑦ 中身をほかへ移す。

「コップの水をバケツに開ける」

⑧ （しまっている鍵を）ひらくようとする

「鍵を開ける」

[表記] [一] は「明ける」がふつう。[二] は「開ける」が一般的だが、明るくなる場合には「明ける」、開けて何もなくなつてからになる場合には「空ける」と書くこともある。

[語法] 反対語は [一] ①「くれる」、[二] ①「ふさぐ」、②「しめる・とじる」、③⑤「つめる」、⑥「しめる」、⑧「かける」。

あさ（朝）【名】

夜が明けてしばらくの間。また、夜が明けてから昼までの間。

「朝のうちに勉強をして午後からプールで泳ぐ」「朝のご飯を食べる」「父は朝から晩まで働いている」「あすの朝、一番電車で出発の予定だ」

あさって（明後日）【名】

明日の次の日。明後日（みょうごにち）。「あさってまでにこの小説を読んでしまう」「あす、あさってまでは予定が詰まっている」

あし（足・脚）【名】

① 動物の胴体から下に分かれて、体を支えたり歩いたりする部分。

「あの女性は足が細くて長い」「足を組む」「芝居で馬の足の役をもらった」

②（おもに人の）足首から先の部分。

「足が大きいので特別製の靴をはく」「足の甲を痛める」「足の裏にマメができた」「足の型をとる」

③ 物の下にあってそれを支える細長い部分。

「テーブルの脚に膝をぶつける」「このテーブルの脚は折りたたみ式になっている」

④ 歩いて進むこと。行くこと。また、来ること。

「故郷に足が向く」「客の足が遠のく」「客が店に足を運ぶようになる」

⑤ 進む早さ・強さなどの能力。

「子どもの足で 1 時間はかかる」「船の足が遅い」

⑥ 行く手段。交通。

「足の便が悪い」「台風で足を奪われる」

⑦ 逃げる道すじ。

「犯人の足が割れる」「盗んだ品物から足がつく」

⑧ 予定をこえてしまうこと。

「予算より足が出る」「忘年会で足を出す」

[表記] ②⑥⑦⑧は「足」、他は「脚」も使うが「足」が一般的。

あした（明日）【名】

今日の次の日。明日（みょうにち）。明日（あす）。

「借りた金はあしたには返す」

あそこ（あそこ）【代】

① （話をしているところから遠い、または見えない）あの場所。

「あそこに我が家が見えている」「ニューヨーク、あそこは大都会だ」

② あの程度・段階。

「あそこまで話が進んでいるとは思わなかつた」

あそぶ（遊ぶ）【五自】

① すきなことをして楽しむ。

「こどもたちがかくれんぼをして遊ぶ」

② 仕事をしないですごす。

「失業して半年遊んだ」

③ 作業が出来ない状態にある。

「不景気で工場の機械が遊んでいる」

④ 外国や有名な場所に出かけていって学ぶ。遊学する。

「フランスに遊ぶ」

あたま（頭）【名】

① 動物の首から上の部分。

「頭を柱にぶつける」「頭隠して尻隠さず」

② 考える働き。頭脳。

「頭がいい」「お父さんは頭が古い」

③ もののいちばん先。先頭。

「鼻の頭にあせをかく」「雲の上から富士山が頭を出す」「先頭集団の頭に立つ

④ 髪の毛。

「頭を刈りに行く」

⑤ 人の数。あたまかず。

「頭だけはそろえた」「頭がたりない」[頭出で割って集金する]

[語法] ③の反対語は「しり」。

あたらしい（新しい）【形】

- ① (ものごとが) 出来てから時間がたっていない。初めて使う。
「新しい洋服を着てゆく」「新しい電球に換える」
- ② 取ったり、作ったりしたばかりである。とれたて。できたて。新鮮だ。
「新しい魚を買い求める」
- ③ 今までにない。斬新だ。
「新しい考え方を世に問う」
- ④ (時が) 今までとはちがうようになっている。
「新しい月をむかえる」「新しい年の初めのあいさつをする」
[語法] 反対語は「古い」。

あちら（あちら）【代】

- ① (話をしているところから遠い、または見えない) 場所、または方角。
「あちらへ行って話をする」「あちらへ向かって並ぶ」「残骸があちらこちらに散らかっている」
- ② 「あの人」をていねいにいうことば。の方。
「あちらがお父様ですか」
[語法] ①は ふだんの話し言葉では「あっち」が使われる。反対語は「こちら」。

あっち（あっち）【代】

- (話し手や聞き手から) 遠い場所、または方角
「あっちへ行け」
- [語法] ていねいに言うときは「あちら」を用いる。反対語は「こっち」。

あつい（暑い）【形】

- 気温が高い。
「日本の夏の夜は暑くて寝苦しい」
- [語法] 反対語は「寒い」。

あつい（熱い）【形】

- ① (物体の) 温度が非常に高い。
「熱い湯を浴びてやけどをする」「日に焼けて熱くなった石をつかむ」
 - ② 感情が高まっている。
「熱い論戦を繰り広げる」
 - ③ (男女の) 愛情が非常に強い。
「あの二人は熱い仲だ」
 - ④ 兵器を持って戦うこと。
「熱い戦争と冷戦が交互に起こる」
- [語法] ①の反対語は「冷たい」。

あと（後）【名】

- ① 後ろ。
「母親のあとからついて行く」
 - ② あることが終わったその次の時。
「食事のあとに家族だんらんの時間をもつ」
 - ③ 死んでからのちのこと。
「死んだ両親のあとをとむらう」「主君のあとを追う」
 - ④ 家をつぐこと。またその人。跡継ぎ。子孫。
「長男があとを継ぐのが当然なのか」「名家だったがあとが絶えた」
- 〔語法〕 反対語は①「さき（先・前）」、②「まえ（前）」。

あなた（あなた）【代】

相手を尊重して言う語。

- 「あなたにはお変わりがありませんか」「あなたにはずいぶん世話がやけましたよ」
- 〔表記〕 男性に対しては「貴方」、女性に対しては「貴女」と書くこともある。
- 〔語法〕 遠い場所をさす「彼方（あなた）」という古い語から。「直接に向かって言うのではありません」、という気持ちからできた語。同輩かやや目下の人に対して使う。目上には、話し言葉では相手を指す代名詞は使わずに、「先生」「社長」「〇〇さん」などを用いるのがふつう。書き言葉では「貴下・貴台・尊兄」なども使われる。

あの（あの）【連体】

- ① 聞き手、または話してから遠いところの物をさすことば。
「あの山に登ろう」
 - ② 聞き手も話し手も知っているものごとをさすことば。
「あの人はどうしていますか」
- (参照) この・その

あぶない（危ない）【形】

- ① 安全ではない。危険だ。
「かけこみ乗車は危ないからやめよう」「危ないもうけ話しには乗らないようにしよう」
- ② 生命が終わりに近い。だめになりそうだ。
「あの会社はもう危ない」「あの患者は今夜あたりが危ない」

あまい（甘い）【形】

- ① 砂糖やあめ、みつのような味をしている。
「このミカンは甘い」「酒より甘い物の方が好きだ」
- ② 塩味が足りない。薄い。
「我が家のみそ汁は甘い」
- ③ きびしくない。てぬるい。
「子どもに甘い父親」「甘い採点」

- ④ しっかりしていない。いいかげんだ。
「君の考えはまだまだ甘いよ」
- ⑤ 十分でない。ゆるい。
「ネジのしめ方が甘い」「タイヤの空気が甘い」
- ⑥ においやふんい気などが快く感じられる。甘美だ。
「部屋には甘い香りがただよう」「スピーカーから甘いメロディが流れる」「あの俳優は甘いマスクが売りである」
- [語法] ①②③の反対語は「からい」。

あめ（雨）【名】

- ① 広いはんいで空から落ちてくる水のつぶ。
「雨が降る」「雨に打たれる」「雨がやむ」「雨が上がったら散歩に出よう」
- ② 雨①の天候。
「明日は雨のちくもりの予報が出ている」
- ③ 次々に落ちてくるもの、とんでくるもの。
「弾丸の雨の中から生還した」「質問の雨が降り注ぐ」
- [語法] 氷った状態で落ちてくるものを「雪・霰（あられ）・雹（ひょう）」などという。

ありがとう（ありがとう）【感】

- 感謝の気持ちを表すことば。
「ご協力、どうもありがとうございます」
- [語法] めったにない意の「有りがたし」の活用形「有りがたく」から変化した語。ていねいに言うときは「ありがとうございます」、くだけた言い方では「ありがとさん」という。関西では「おおきに」が使われる。

ある（ある）【五自】

- ① 持っている。所有する。
「私にはよい友達がある」「家には金がある」
- ② 起こる。生じる。行われる。
「事故があった」「あす、全体会議があります」
- ③ そこに位置をしめる。存在する。
「野中に一軒家が在った」「祖父がこの世に在ってさかんだったころを回想する」「責任は君の側に在る」「首相の座に在る」
- ④ 表れている。書かれている。
「立て札に立ち入り禁止とある」
- ⑤ （「である」の形で）文を言いきるべきのことば。…だ。
「私は日本人である」「ここはたいそう静かである」
- ⑥ （「である」の形で）動作や行為が終わってそのままになっている意を表す。
「車が止めてある」
- [表記] ふつうの文章ではひらがなで書かれる事が多い。漢字表記は「有る」が一般的

だが、「存在」の意味の場合「在る」の使われることがある。

あるく（歩く）【五自】

- ① 左右の足をかわるがわる前に出して進む。徒步で行く。
「駅まで歩いて5分の距離だ」
- ② あちこち移動する。
「世界を股にかけて歩く」「得意先を歩く」
- ③ 段階や順序を追って進む。
「戦後国民の歩いてきた道を振り返る」

あれ（あれ）【代】

- ① 話し手、または聞き手から見て遠くにある物ごとをさしていふことば。「右から3軒目の赤い屋根の家、あれはわたしの生れた家だ」「あれは3年前のことだった」「あれもこれも手を出しては失敗する」
- ② 遠くの人、そこにいない人をさすことば。
「うちの息子、あれも成長して社会人になった」
- ③ 思い出せないとき、なんと言つてよいか迷うときにはさむことば。
「ここには、あれ、何とかもちという名物のお菓子があつたね」
(参照語) これ・それ

いいえ（いいえ）【感】

- ① 聞かれたことを、そうでないと打ち消す（否定する）ことば。
「『太郎は帰ったか』『いいえまだです』」
- ② 命令されたり、誘われたりしたことを断ることをあらわす語。
「『どいてください』『いいえ、 どきません』」
[語法] 「太郎は帰っていないか」という否定形の疑問文には「いいえ、帰っています」のように肯定形に使われる（英語の no が帰っていないときにしか使えないのとは異なる）。「いいえ」はていねいな言い方に使うが、「いえ」と短くいうと打ち消しを強める。また、「いや」は同じ意味だがやや硬い表現で、えらそうに聞こえる。反対語は「はい」。

いう（言う）

[一] [五他]

- ① 意思を口に出して伝える。述べる。話す。告げる。
「これから大事なことを言うからよく聞くように」「人のことを悪く言う癖がある」
- ② （「という」の形で）・・・と呼ぶ。名付ける。
「この山を日本のアルプスという」「かれは平成の名人といわれる」

[二] [五自]

- ① 音を立てる。鳴る。
「風で木の葉がざわざわいう」「寒さで奥歯がガチガチいう」
- ② （「こう、 そう、 ああ、 どう」などの語とともに、また「～という」の形で、）その

ようなものであることを表す。

「やっぱりこういう結果で終った」「ああいう悪人はこらしめなくてはならない」「上役にペコペコするという態度は許せない」「これはポチという犬です」

[表記] [一] ①は「言う」と書く。「云う」は俗字。他は仮名書き。

いえ (家) [名]

① (中で人や動物が) 生活をするための建物。ハウス。

「赤い屋根の家が見えてくる」「四十歳で家を建てる」「大水で、住んでいた家が流された」「ポチに家を造ってやる」

② 生活の基本となる場所。ホーム。

「家に帰って休む」「仕事を家に持ち込む」

③ 夫婦を中心とした共同生活をする集団。家庭。

「結婚して家を出て独立する」「家の決まりを家訓(かくん)という」

④ 祖先から続く③の系統。家系。

「長女が婿(むこ)を取って家を継いだ」「跡取りがなくて昔からの家が絶えてしまう」

いく (行く) [五自]

① ある場所を通って進む。

「この道をまっすぐ行くと駅前に出る」「私の行く道の右手に工場がある」

② ある地点・目的などに向かう。出掛ける。

「毎朝学校へ行く」「映画を見に行く」「兵隊として戦地に行く」「高校卒業後プロ野球へ行きます」

③ 状態がある方向へ変わる。そのような状態になる。

「作戦がうまく行く」「娘が嫁に行く(結婚する)」「商売に損が行く」「思うとおりにはなかなか行かない」

④ 遠くへ移動する。離れる。

「早くあっちへ行け」「台風は行ってしまった」

⑤ (「・・・て行く」の形で) 動作や状態が続く。

「夫婦仲良くやって行く」「この年金では老後暮らして行けない」

⑥ (あの世へ行く意で)死ぬ。

「祖父が行ってもう3年になる」

[表記] ⑥は「逝く」とも、また②のうち、兵役に関しては「征く」とも書く。

[語法] 「ゆく」と同義だが、「いく」のほうがくだけた言い方。ただし、「た・て」の付いた「行って・行った」には「ゆって・ゆった」の形がないため、この違いは生じない。

いくつ (幾つ) [名]

① (個数・年齢・日数など) 数をたずねる語。いかほど。

「お年はいくつですか」「あといいくつ寝るとお正月ですか」

② (「も」「ても」などとともに用いて) 数が多い、または少ないとを表す語。

「リンゴはまだいくつも木になっている」「残りはもういくつもありません」「いくつあ

「っても足りない」「いくつになってもまだ子どもだ」「いくつでもよいから、買ってください」

いくら（幾ら）【名】

① 数量・金額を尋ねる語。どれほど。

「ガソリンはいくら入れますか」「このマンションの家賃はいくらですか」

② （「も」「でも」などと共に用いて）数量・金額が多い、または少ない意を表す語。

「そういう話しある」「資金はいくらも残っていない」「いくらでもいいから払ってください」

いくら（幾ら）【副】

（仮定の「ても」「たって」などの句の中で）程度が仮に大きくとも、の意を表す語。どんなに。

「いくらがんばっても勝てない」「いくら後悔したってもう遅い」

いし（石）【名】

① 岩が欠けた固い鉱物。粉状の砂より大きいもの。

「丸い石を庭に敷き詰める」「のら犬に石を投げて追う払う」「川原に石を積む」

② 飾りや機材として加工された鉱物。

「この指輪の青い石はサファイヤです」「この腕時計には石が六つ使ってある」「ライターの石がすりへる」

③ 岩を切り出した建築材。石材。

「石で造った家に住む」「城の壁に石を積む」「石の墓を建てる」

④ たまって固まつたもの。

「腎臓に石が出来た」「歯の石を取ってもらう」

⑤ 圏碁で盤の上に置く円形の白、または黒の固体物。また、その並んだ集まり。

「はじめに黒が石を置く」「右上の白の石が死んでいる」

⑥ じやんけんで、指を五本折りたたんだ型。ぐう。

「はさみ（ちょき）は石に負ける」

⑦ 冷酷、非情な人、価値のない物のたとえ。

「石の心を持った独裁者が大統領になる」「私は路傍の石に過ぎない」

いしや（医者）【名】

病気の診断・治療・予防や怪我（けが）の治療を職業とする人。医師。

「医者にかかる」「医者が患者を診（み）る」

〔語法〕 医者本人に向かっては「お医者さん」または「先生」と呼ぶ。

いす（椅子）【名】

① 座るための、脚・座面を持った家具。肘掛けや背もたれの付いている物もある。チエア。また、二人以上が並んで座る長いす（ベンチ）もある。腰掛け。

「この椅子に掛けてお待ちください」

- ② 高い地位や職。

「大臣の椅子をかけて争う」「息子が社長の椅子に着く」

いたい（痛い）【形】

- ① 強く打ったり、故障したりして体に激しくつらい刺激が感じられる。苦痛だ。

「ぶつけた膝が痛い」「ねんざをした足が痛い」「腹がしくしくと痛い」

- ② 負担が大きくてつらい。

「優勝決定を前に3連敗は痛かった」「給料日前に五万円の出費は痛い」「いくら言われたって痛くもかゆくもない」

いち（一）【名】

- ① 数の1つ。数や順番を数えるとき、最初のもとの数。

「一足す一は二である」「一から十まで数える」

- ② ものごとの最も上の物。最高。

「一はやっぱり富士の山だ」

いちばん（一番）【名】

- ① 順番がもっとも先（または後）であること。

「運動会のプログラムの一番はラジオ体操です」「駆けっこで一番になった」「成績はビルから一番だった」

- ②（試合などで）一回の戦い。一勝負。

「この一番に優勝がかかっている」「千秋楽の結びの一番は全勝の横綱どうしの決戦となった」

- ③ 最も良いこと。最上。

「健康なのが一番だ」

いちばん【副】

- ① 順位が最も上であること。最も。

「世界でいちばん速く走る男と言われる」「何もしないのがいちばん悪いことだ」

- ②（勝負を一つやってみよう、の意から）ためしにひとつ。試みに。

「ここはいちばん、サヨナラホームランを狙おう」

いつ（何時）【代】

- ① わかっていない時をたずねる語。どの時。

「いつになったら平和が訪れるのか」「それはいつ始まったことですか」「あなたはいつ来たのですか」

- ②（「も」「ても」などの語を伴って）すべての時。常時。

「いつの時代にも悪人はいる」「いつでも夢を持とう」

いつか（何時か）【副】

とくにこの時と決まっていない時、また決められない時。どの時だか。

「いつか会ったことがある」「いつかの学会で発表したことがある」「あたりはいつか薄暗くなっていた」「いつかの再起を目指してがんばろう」

〔語法〕過去のこと、現在のこと、未来のことそれぞれに使われる。

いつつ（五つ）【名】

① 数で、5個。

「五つの門をくぐってお城に入る」「リンゴを5つ買う」

② 年齢の5歳。

「娘が五つになった」

いつも（<何時も>）【副】

① どんな時でも。常に。

「いつも笑顔を絶やさない」

② 特に変わったことのない時。ふだん。

「いつものように朝の散歩に出た」「いつもより早く店を開いた」

いぬ（犬）【名】

① 哺乳類イヌ科の哺乳（ほにゅう）動物。番犬、狩猟犬、愛玩犬など、家畜としてして古くから人間に飼われている。

「柴の犬を飼っている」

② （犬が飼い主に忠実であることから）言うことをよく聞く手下。回し者。

「大国のイヌになった弱小国の首相」「あいちは警察のイヌだ」

③ 十二支の十一番目。

「平成18年はイヌの年だった」

〔表記〕③は「戌」とも書かれる。

いま（今）【名】

① 直面しているその時。この時。現在。現代。

「今の世界の経済情勢は厳しい」「今生きる若者の声を聞く」「今、渋谷駅前にいる」

② この時刻。現在。

「今は幸せです」

③ 現在より少し前。

「今の話しが大変参考になった」「テストは今終わった」

④ すぐ先の将来。

「演奏は今始まります」「今に見ていろ」「今にも降り出しそうな空だ」

いま（今）【副】

現状にさらに付け加える意を表すことば。もう。

「今一度考え直してください」「今少し我慢してください」

いみ（意味）【名・ス他】

① 内容を言葉で表すこと。わけ。語義。

「言葉の意味を調べる」「人がよいということは馬鹿だということを意味している」

② 行動や話などの目指すところ。

「彼の話の意味は深長だ」「意味のありげな顔をして話す」

③ 行動や表現などのよい結果。成果。

「彼が初めて言い出したことに意味がある」

いもうと（妹）【名】

① 同じ親から生まれた年少の女子。年下の女きょうだい。

「兄と妹の仲がよい」

② 婚姻や縁組みで出来た年下の女きょうだい。結婚相手の年下の女きょうだいや、弟の妻など。義妹。

「あの娘は私の義理の妹です」「幼い時から仲の良かった2人が姉と妹のちぎりをかわした（約束をした）」

〔語法〕 ②はふつうは年下の女性をいうが、夫や妻（配偶者）の妹のほうが年長で年上の義妹となるばあいもある。反対語は「姉」「弟」。

いりぐち（入り口）【名】

① 建物、会場などの中へはいるために設けられた施設。はいりぐち。

「公園へは入り口から入場する」

② ものごとの、取りかかるはじめの段階。

「改革もやっと入り口にさしかかった」

〔語法〕 「入る所」と「出る所」が違うときにいう（同じ所から出たり入ったりする場合は「出入り口」）。反対語は「出口」。

いる（居る）【上一自】

① （動物または動く物が）その場所にある。存在する。

「玄関先にはいつもイヌが居る」「駅前にはタクシーが居る」「大阪には弟が居る」「ライオンはアフリカの草原に居る」

② （「…ている」「…でいる」の形で）

（ア） その動作、行為がすでに実現した状態である。…し終わる。

「彼は三年前に死んでいる」「タベは確かに雨が降っていた」「明日の昼には書き上げているだろう」

（イ） その動作や行為が続く。

「彼はいま東海道を走っているところだ」「雨は昨日からずっと降っている」

（ウ） ずっとその状態にある。

「父はやせている」「彼が悪いのは前からわかっている」

③ 「…ずにいる」「…ないでいる」の形で) 物事を実行しない状態を続ける。

「朝から仕事をせずにいる」「政府は何の対策も立てられないでいる」

[表記] ②③は仮名書き。

[語法] 「存在する」という意味で「ある」「おる」と意味が重なる。「ある」は動かない物「ポスト」「家」などに使われる。「おる」は方言で「人がいる」の意味で「○○さんはおるかや」のように使われるほか、共通語で「誰かおるか」「ここに座っておれ」など威張った表現や、「ます」を伴って「私はここにおります」のようにへりくだつた言い方に使われる。

いろ (色) [名]

① 光の反射を受けて目に感じる一種の感覚。赤、黄、青、緑、白、黒など。色彩。カラ一。

「花の色が鮮やかになった」「きれいな色の着物を着ている」

② 感情の変化によって表れた顔や声の調子。

「色を変えてどなりこんでくる」「演説しているうちに声の色が変わってくる」「顔に不安の色が走る」

③ それらしい感じ。けはい。

「秋の色が深まる」「敗戦の色が濃い」

④ ふだんの落ち着き。

「重大なミスをおかして色を失った」

⑤ 男女間の恋愛。

「英雄は色を好む」「色も金もと欲張る」

⑥ (俗語で) 愛人。情人。

「あたしはあいつのいろだった」

⑦ 愛想のおまけ。余録。

「時給は千円だが少し色をつけよう」

いろいろ (色々) [名・形動・副]

種類がたくさんあるようす。さまざま。

「いろいろの考え方がある」「虫のいろいろについて調べる」「世の中にはいろいろな考え的人がいる」「いろいろ試みたが結局どれもだめだった」

[語法] 「いろいろの・へのいろいろ」は名詞、「いろいろだ・な・に」は形容動詞、「いろいろ～する」は副詞とするが、意味的な違いはない。「いろいろの」と「いろいろな」は語のゆれとする説もある。また、「いろいろな」はくだけた場面で「いろんな」という形になることもある。

うえ (上) [名]

① 高い場所・位置。

「空の上の雲」「猿は木の上で生活している」「頭の上の蠅を追え」

② 外側の表面。

「氷の上をすべる」「シャツの上にセーターを着る」

③ 地位・程度などがまさっていること。また、その人や組織。

「会社では私が彼の上に立っている」「年齢は君の方が上だ」「上からの命令には逆られない」

④ 関わりがあること。関連すること。

「太郎の上に何かが起きたらしい」「私の身の上について話します」「酒の上での失敗はいくらでもある」

⑤ そのほかに加えて。

「借金の上に借金を重ねる」「この上まだ飲むのか」

⑥ そののち。あと。

「さんざん文句を言った上、家を飛び出した」「無理を承知の上で改めてお願ひする」

⑦ 結果として。～になったからには。

「こうなった上は一戦を交えなければならない」

[語法] ①②③の反対語は「下」。

うえ（上）【接尾】

目上に当たる家族などを敬って言うことば。

「父上」「母上」「兄上」「伯父上」

うし（牛）【名】

① ウシ科の草食哺乳（ほにゅう）動物。家畜として昔から飼われていて、用途によって役牛（労働用）、肉牛、乳牛などがある。力があるが動きの鈍いもののたとえにされる。

「牛のように黙って働く」

② 十二支の第二番目。

「平成 21 年はウシの年です」

[表記] ②は「丑」とも書かれる。

うしろ（後ろ）【名】

① 人やものの正面とは反対のほう。背後。

「後ろを振り向く」

② 腹の反対側。背中。

「後ろから押してやる」「敵に後ろを向ける」

③ 向こう側の見えないところ。

「柱の後ろに隠れる」「タンスの後ろにへそくりを隠す」

④ あと。末尾。

「切符を買うために列の後ろにつく」「先生の後ろから生徒の列がついて来る」

[語法] 反対語は「前」。

うた（歌）【名】

① 詩にメロディー、リズムをつけて口ずさむもの。ソング。唱歌、歌曲、演歌、俗謡

など。

「ギターを弾きながらアメリカ黒人の歌をうたう」「私の青春の歌は『青い山脈』だ」

② 5, 7, 5, 7, 7 の 31 音節（拍）を標準とする定型の韻文。和歌。短歌。

「百人一首は百人の歌を一首ずつ集めた物です」

うたう（歌う）【他五】

① 歌詞にメロディーやリズムをつけて声に出す。口ずさむ。

「宴会の余興に民謡を歌う」

② 心情や情景などを詩や和歌に読む。詠じる。

「我が世の春をうたった和歌 3 首」

③ 広く人に知れるように言う。述べ立てる。

「選挙公約に減税をうたっている」

④ 盛んにほめる。

「彼女は絶世の美女とうたわれた」「皇帝の徳をうたいあげる」

〔表記〕①は「唄う」、②は「詠う」、③④は「謳う」と書くこともある（常用漢字表外字）。

うち（内）【名】

① 線や面で囲われた中。内側。

「円の内から外へ出るな」「鬼は外、福は内と叫んで豆をまく」

② 範囲や基準を越えないところ。

「2, 3 日のうちに借金は返す」

③ 自分の住んでいる所。我が家。

「今夜はうちに泊まっていけ」

④ 家。住宅。

「赤い屋根のうちが見える」「子どもは親戚のうちで遊んでいる」

⑤ 自分たちの所。

「内の社ではこの製品は扱っていない」「内のかみさんは働き者だ」

〔語法〕②は仮名書き。③, ④は「家」と書くこともある。①の反対語は「外」。

うち（うち）【代】

自分をさして言うことば（第1人称）。私。

「この仕事はうちがやりたいと思っています」「うちはちっとも知らなかった」

〔語法〕本来は関西方言で、「ウチハ」と頭高アクセントで言う。近年、首都圏では若い大学生、ビジネスマンが「ウチハ」と平板アクセントで使う人が増えている。

うま（馬）【名】

① ウマ科の草食哺乳（ホニュウ）動物。長い顔と、たてがみの生えた長い首を持つ。乗馬・運搬・軍用・競走などに使われる。

「カウボーイが馬で走ってゆく」「荷車を馬に引かせる」「馬の手綱を取る」「馬を引く」

- ② (馬が足を踏ん張るように開くことから) 脚立。
「庭木の手入れのために馬を出す」
- ③ 将棋で桂馬。また、相手陣に入って成った角行。竜馬 (りょうめ)。
「持ち駒は馬 (桂馬) と歩だけです」「馬 (竜馬) を下がらせる」
- ④ 貸した金を取り立てるために付いてくる役目の人。付け馬。
「家まで馬が付いて来た」
- ⑤ 競馬。
「最近馬にはまって大穴を当てた」「馬で金儲けしたやつはない」
- ⑥ 十二支の第七番目。
「うちの娘はウマの歳の生まれです」
- [表記] ⑥は「午」とも書かれる。

うまれる (生まれる) [下一自]

- ① 子や卵が母親の胎内から出る。出産する。
「跡取りの子が生まれる」「中国で生まれたトキを借りて繁殖を試みる」
- ② 新しく世に出て来る。
「新製品が生まれた」「よいアイデアが生まれた」

うみ (海) [名]

- ① 地球の表面上の塩水をたたえた部分。海洋。
「海は地球表面の約十分の七を占めている」「ここは海で生活する人々の港です」「海を越えて外国と交易をする」
- ② 水のたまっているところ。
「硯の海に水を足す」
- ③ 一面に広がっているもののたとえ。
「気がついたら部屋は火の海になっていた」「戦場は血の海と化した」「月面には静かの海という砂漠状の平面がある」
- [語法] ①の反対語は「陸」。

うれしい (嬉しい) [形]

望みがかなって心が浮き立つようだ。楽しくわくわくする。
「給料が上がって嬉しい」「今日は嬉しい遠足の日だ」「負けを覚悟で出した新人が完投勝利をあげたのは嬉しい誤算だった」

え (絵) [名]

- ① 物の形・姿を線や色を使って書き表したもの。図。絵画。
「丑年 (うしどし) の年賀状にウシの絵を描く」「彼女の着物姿は絵になる」「絵に描いたような逆転劇だった」
- ② 映画やテレビなどの映像。
「音は出るが絵が出ない」

えいが (映画) [名]

連続撮影をしたフィルムの画像を映写機でスクリーンに動作や表情などを再現して投影するもの。活動写真。シネマ。

「話題の小説をもとにして映画を作る」「映画を見に行く」「初期の映画は音の出ない無声活動写真だった」

えいご(英語) [名]

① イギリスでイングランド人が使った言語。イングリッシュ。現在では、イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、インドなどで公用語となっている。

「わたしは英語が話せない」「彼は英語に堪能だ」

② 学校教育で教科の一つ。英語教育を目的とする。

「一時間目は英語のグラマーだ」

〔語法〕正統な英語を「キングスイングリッシュ」、各国でなりを生じたものを「ピジンイングリッシュ」という。

えき (駅) [名]

(もと、街道に置かれた馬の乗り継ぎ場所の意から) 汽車・電車などが止まり、乗客が乗り降りしたり、荷物の積み下ろししたりする所。停車場。ステーション。

「列車は横浜の駅に到着した」「ここが我が家最寄りの駅です」

えん (円) [名]

① まる。輪の形。

「とんびが円を描いて飛んでいった」

② 数学で、平面上で定点から等しい距離にある点の連続（軌跡）。

「コンパスで直径5センチの円を描く」

③ 日本の通貨。

「ドルが下がって円が高くなった」「ドルを円に交換する基準を為替（かわせ）レートという」

えん (円) [接尾]

日本の通貨を数えることば（助数詞）。一円は百銭。

「三億円の資本金で会社を設立する」

えんぴつ (鉛筆) [名]

黒煙の粉と粘土を焼いて作った芯（しん）を、木の軸に入れた筆記用具。

「答案用紙にはH BまたはBの鉛筆ではっきり記入してください」

お (御) [接頭]

① 相手、または第三者に尊敬の意を表すことば（尊敬語）。

「お手を拝借します」「お堅いことを仰いますね」「お疲れ様でした」

② 自分側のものの動作・行為をへりくだつて言うことば（謙譲語）。

「お勉強しておきます（値段をまける）」「私がお迎えにあがります」「弊社がお引き受けいたします」

③ ものごとを丁寧に言うことば（丁寧語）。

「お花やお茶を習っています」「お暑うございます」

④（動詞連用形に付いて）目下の者に対して、軽い命令をあらわす。

「これをお読みよ」「しっかりお食べ」

おいしい（美味しい）【形】

①（飲食物の）味がよい。美味である。

「この料理はみんな美味しい」

②（俗語で）楽をしてもうけが大きい。

「寝ていて給料をもらえる美味しい勤め先はない」

【語法】①の反対語は「まずい」。

おおい（多い）【形】

数量が多く存在する。たくさんある。

「今年は雨の日が多い」「もうけは多いが苦労も多い」

【語法】反対語は「少ない」。

おおきい（大きい）【形】

①面積・体積などが多い。

「クジラは哺乳（ほにゅう）動物では最も大きい」「この服はサイズが大きい」「琵琶湖は日本で一番大きい湖です」

②程度・規模・傾向などがはなはだしい。

「台風の被害は予想より大きかった」「テレビの音が大きくて話しが聞こえない」「この商談は金額が大きい」「両国の間には大きい問題が存在する」

③年齢が上である。年長だ。

「私のほうが彼より3つ大きい」

④度量や包容力が豊かである。心が広い。

「明治維新後の政治家には大きい人物が多かった」

⑤おおげさである。

「話が大きい人だから割り引いて聞いていたほうがいい」

⑥いばっている。えらそうにしている。

「あいつは態度が大きい」

【語法】①～④の反対語は「小さい」。

おおきな（大きな）【連体】

「大きい」の連体形と同じ。

「大きな声を出す」「大きな人物」「大きな態度」「聴衆を前にして大きな風呂敷を広げている」

[語法] 形容詞「大きい」の連体形とほぼ同じ意味だが、「大きな」のほうがやや口語的である。反対語は「小さな」。

おきる（起きる）[上一自]

① 横たわっていたものが立ち上がる。

「ころんだ幼児はひとりで起きるようにさせなさい」「ころんでも、ただでは起きない」

② 目を覚まして、寝床から出る。

「老人は毎朝早くから起きてくる」

③ 目を覚ます。

「もう床の中で起きてはいる」

④ 寝ないでいる。

「毎晩遅くまで起きて勉強する」

⑤ (非日常的なことが) 発生する。

「殺人事件が連續して起きた」

⑥ 薪や炭に火が燃えつく。

「火が起きて部屋が暖かくなった」

[表記] ⑥は「熾ける」とも書く。

[語法] ⑤⑥は「おこる」(自五)ともいう。

おじいさん（お爺さん）[名]

男の老人を親しんで言うことば。

「山の中に1人のお爺さんが住んでいました」

[語法] 亂暴に言うときは「じじい・じいさん」、ていねいに言うときは「お爺さま」という。反対語は「お婆さん」。

おじいさん（お祖父さん）

父の父。または母の父。祖父。

「私のお祖父さんは今年70歳で、古稀を迎えた」

[語法] 「祖父（そふ）」より話し言葉的で親しみのある言い方。敬って言うときは「お祖父さま」という。反対語は「お祖母さん」。

おじさん（小父さん）[名]

中年の男性の敬称、または親しんでいうことば。

「少年だった彼も今ではいい小父さんになった」

[語法] 反対語は「小母（おば）さん」。

おじさん（伯父さん・叔父さん）[名]

「おじ」(父、または母の男兄弟)を親しんでいう語。

「私の母方のおじさんは浅草で呉服屋をやっています」

[表記] 父または母の兄は「伯父さん」、弟は「叔父さん」と書く。

おそい（遅い）【形】

① 動作がゆっくりで通常より時間がかかる。のろい。鈍い。

「一墨ランナーは足が遅いから盗墨の心配はない」「問い合わせに対して反応が遅い」

② 通常・予定よりも時間がたっている。遅れている。

「息子の帰りが遅いので心配だ」「長い交際の後、遅い結婚にこぎ着ける」

③ 時間がたちすぎて間に合わない。手遅れだ。

「今さら後悔してももう遅い」「君が助けに来てくれたが、一步遅かった」

④ 夜が更けている。深夜だ。

「もう遅いから寝よう」「新宿夜は遅くなつてもまだ昼間のように明るい」

[語法] 反対語は①「速い」、②③「早い」。

おとうと（弟）【名】

① 同じ親から生まれた子どものなかで、年下の男子。

「花子は弟が生まれてお姉さんになった」

② 婚姻や縁組みなどでできた年下の男きょうだい。結婚相手の年下の男兄弟や、妹の夫など。義弟。

「かれは妹の亭主だから私の義理の弟になります」「親友の二人はついに兄弟のちぎりを交わした（約束した）」

[語法] ふつうは年下の男性をいうが、夫や妻の弟のほうが年長で、年上の義弟となるばあいもある。反対語は「兄」「妹」。

おとこ（男）【名】

① 人間の性別で、女性でない方。男性。

「男と女が結婚して子を作る」「2番目の子は男だった」

② 成人の男性。

「成長して一人前の男になった」「見知らぬ男から声を掛けられる」

③ 男子としての体面・面目を持った人。男ぶり。

「金も力もあって男もよい」「事業に成功して男を上げる」「こんなことでくじけていては男がすたる」「男の顔をつぶされる」

④ 男性の愛人。情夫。

「母親が男を作つて駆け落ちする」「男が出来る」

[語法] ①は人間以外の動物や植物のばあい「おす」というが、擬人的に「男犬」「男株」などと使うこともある。反対語は「女」。

おととい（一昨日）【名】

昨日の前日の。いつさくじつ。おとつい。

「おとといから雨が降り続いている」「おととい来やがれ（もう来るなの意）」

[語法] 「いっさくじつ」は文章語的。「おとつい」は関西方言的。

おとな（大人）【名】

① 一人前に成長した人。成人。

「成人式を迎えて大人の仲間入りをする」「乗車券は12歳から大人の料金となります」

② 分別のある、立派な人間。

「大人の話し合いをしようじゃないか」「何時までも子どもだな、もっと大人になれよ」

おとな【形動】

(子どもが)よく言うことを聞いて静かでいるさま。

「坊やは今日は一日おとなだったね」

おなか（御中）【名】

(もと「体の真ん中」の意の女性語)腹。

「おなかがすいた」「おなかを壊す」「おなかを出して寝ていたら風邪をひいた」「食中毒でおなかが痛い」

おなじ（同じ）【形動】

変わりがないさま。同一だ。

「言うことは何時も同じだ」「きみと同じなやり方をする人はいない」「みんな同じに面倒を見てやる」

[語法] ややくだけて「おんなじ」ともいう。連体形はふつう、「君と同じ本を読む」のように「同じ」が使われる(この「同じ」を連体詞とする説もある)。

おなじ（同じ）【副】

どうせ～なら。

「同じやるなら派手にやろう」

おはよう（お早う）【感】

朝のあいさつのことば。

「息子が『おはよう』といって起きてきた」

[語法] ていねいに言うときは「おはようございます」を使う。

おまわりさん（お巡りさん）【名】

警官を親しんで言うことば。巡査さん。

「お巡りさんが交番に詰めている」

[語法] 隠口や悪口では「お巡り」という。

おめでとう【感】

新年や喜ばしい出来事を祝って言うことば。

「明けましておめでとう」「読売ジャイアンツ優勝おめでとう」
[語法] ていねいに言うときは「おめでとうございます」を使う。

おもい（重い）【形】

- ① 目方が大きい。重量がある。
「重い荷物を持って山に登る」「水は油よりも重い」
- ② 動きや働きがなめらかに行かない。
「重い腰をやっと上げる」「パワステに慣れると普通のハンドルは重く感じる」「何か隠しているのか口が重い」「いやな仕事をするので気が重い」
- ③ 大切である。重要だ。
「重い責任なのにギャラは安い」「重い地位に就く」
- ④ 程度が甚だしい。重大だ。
「重い病気にかかる」「事態を重く受け止める」
[語法] 反対語は「軽い」。

おもしろい（面白い）【形】

- ① 心が満足するほど楽しい。興味深い。
「寄席で面白い落語を聞いた」「彼の漫談は何時聞いても面白い」
- ② 普通でなくてこっけいだ。おかしい。
「面白い顔をしてみせる」「」
- ③ 普通と変わっていて好ましい。思わしい。
「面白い実験結果が得られた」「会社の経営状況はあまり面白くない」

おもちゃ（玩具）【名】

- ① 子どもが持つて遊ぶための小道具。玩具。
「子どものおもちゃを取り上げて遊ぶ」
- ② 遊びが目的でいいかげんにつきあう相手。なぐさみもの。
「人をおもちゃにするな」

おやすみ（お休み）【感】

寝るときのあいさつのことば。夜、別れるときにも使われる。
「お休み、また明日（あした）ね」
[語法] ていねいに言うときには「おやすみなさい」が使われる。

およぐ（泳ぐ）【五自】

- ① 人や動物が手足やひれなどで水を搔いて、水中や水面を進む。
「ホエールウォッチングとはクジラがが泳ぐのを見ることです」「ドーバー海峡を泳いで渡る」
- ② 自由自在に動き回る。
「フィクサーとして政界を泳いでいる」「警察は容疑者を泳がせておいた」

③ 前のめりになる。

「外角を攻められてバッターの体が泳いでしまった」「ホームで人波に押されて体が泳いだ」

おわり（終わり）【名】

物事の最後。はて。おしまい。

「白くなったススキが秋の終わりを告げている」「初めから終わりまで熱心に観戦した」

「終わりよければすべてよし」ということだからしっかり締めくくろう」

〔語法〕反対語は「始め・始まり」。

おわる（終わる）【五自】

おしまいになる。果てる。

「仕事が終わったら一杯やろう」「企みは失敗に終わった」

〔語法〕他動詞形は「終える」だが、「終わる」が「これで発表を終わります」のように他動詞的に使われることもある。反対語は「始まる」。

おんがく（音楽）【名】

① リズム・拍子・音階・和声（音の重なり）などにもとづいて人の感情や思想を音で表現する芸術。歌を主とする声楽と楽器演奏を主とする器楽とがある。

「日本古来の音楽を邦楽という」

② 学校教育で学科の1つ。音楽教育を目的とする。

「3時間目は音楽です」

おんな（女）【名】

① 人間の性別で、男性でない方。女性。

「男と女が結婚して子を作る」「最初の子は女だった」

② 成人の女性。

「器量も気だても良くていい女だ」「見知らぬ女に声を掛ける」「愛想のないいやな女だ」

③ 女性の愛人。情婦。

「夫に女が出来たらしい」

〔語法〕反対語は「男」。

おんなのこ（女の子）【名】

① 幼い女。女児。童女。

「女の子の七五三は、三歳と七歳の時にするものだ」

② 若い女性。女子。

「我が社の女の子は美人揃いだ」

〔語法〕反対語は「男の子」。

か（火）【名】

「火曜日」の略。

[語法] 案内状などで「〇月〇日（火）」のように使用する。話し言葉として使用することはない。

か（日）【接尾】

① 月のはじめから数えて何日目であるかを示す。

「5月3日（ごがつみつか）」

② ある日から数えて何日目であるかを示す。

「三日後（みつかご）に会おう」

③ 一定の期間を日にちで示す。

「レポート書くのに三日（みつか）かかる」

[語法] ふつか（二日）・みつか（三日）・よっか（四日）いつか（五日）・むいか（六日）なのか（七日）・ようか（八日）・ここのか（九日）・とおか（十日）・はつか（二十日）]のように 使用する。上記以外の日に使用することはない。「みそか（三十日）」と言うこともあるが、現代語としては稀。「一日」は「ついたち」と読む。

がいこく（外国）【名】

自分が持つ国籍以外の国。

「外国に行きたい」

[語法] むかしは「外国」を「とつくに」とも読んだ。

がいこくじん（外国人）【名】

よその国の人。その国に国籍を持っていない人。

「日本に永住している外国人も多い」

[語法] 「がいじん（外人）」とも言うが、差別的なニュアンスがあり、好ましい表現ではない。

会社（会社）【名】

利益を得る目的で作られた組織。

「会社に通う（かよう）」「会社を首になる（会社をやめさせられる）」「会社を設立する」

[語法] 学校・官庁・個人経営の店などは会社と言わない。

かう（買う）【他五】

① ほしい物をお金をはらって手に入る。

「時計を買う」「時計を買いに行く」「時計を買って来る」

② 相手の心をひきつける。

「歓心を買う（相手が気に入るような行動をとる）」

③ 価値をみとめる。

「彼の才能を買って採用した」「才能を買わされて他の会社に引き抜かれた」

④ ある役目を引き受ける。

「会社の設立に一役（ひとやく）買う」

⑤ お金をはらって性的行為をする。

「女を買う」

[語法] 反対語は「売る」。①の意味では「買い求める」という言い方もある。

かえる（帰る）[自五]

(人などが目的を果たしたのちに) 出発した場所にもどる。

「家に帰る」「日本に帰る」「東京に帰る」

[参考] 「もどる」は「かえる」の類義語。「家に帰る」は「帰宅する」、「日本に帰る」は「帰国する」、「東京に帰る」は「帰京する」とも言う。「帰宅」「帰国」「帰京」はおもに文章の中で使う。「かえる」(帰る)に対応する他動詞は「かえす」(帰す)。

「家出した娘を家に帰す」

かえる（返る）[自五]

① もとの状態にもどる。

「正気に返る」

② (品物が) もとの位置にもどる。

「出した手紙が返る」「貸した本が返って来た」

[参考] 「もどる」は「かえる」の類義語。「かえる」(返る)に対応する他動詞は「かえす」(返す)。

「図書館に本を返す」

かお（顔）[名]

① 目や鼻や口があるところ。

「顔を洗う」「顔にけがをする」

② 顔(①)の形。容貌(ようぼう)。顔立ち。

「顔が美しい」

③ 表情。

「笑っているときの顔がすてきだ」

④ 顔の色。

「顔が赤くなる(恥ずかしいときや、酒に酔ったときの状態)」「顔から火が出る(非常に恥ずかしいことをしたときの状態)」

⑤ 人格。品性。

「顔がつぶれる(名誉をきづつけられる)」

⑥ 有名であること。

「顔が広い(多くの人に知られている)」「顔が売れる(有名になる)」「あの人はこの店では顔だ(この店の常連として有名だ)」

[語法] 「かお」の類義語に「つら」があるが、「つら」はおもに①の意味で用い、卑語的なニュアンスが強い。

「つらを洗って出なおして来い」

[語説] 上代には「かお（かほ）」は②の意味でのみ用い、①の意味では「おもて」を用いた。

かく（書く・描く）【他五】

① [書] 文字で記す。

「手紙を書く」「日記を書く」

② [書] 出版する。

「本を書く」

③ [描] 絵の形で示す。

「富士山の絵を描く」

[語法] ③の意味では「えがく」とも言う。

かさ（傘）【名】

① 雨や雪、また、強い日差しなどをふせぐために、手を持って頭の上にかかげる柄のついている道具。

「傘をさす」「傘をひろげる」「傘をたたむ」「急に雨が降ってきたので、友達を傘に入れてあげた」

② 保護してくれる勢力。

「アメリカの核の傘に入る（アメリカの核兵器に守ってもらう）」

[語法] 日光をふせぐ傘は「日傘（ひがさ）」と言うのがふつう。

[表記] ①と同じ目的で頭にかぶる柄のない物は「笠（かさ）」と書く。

かし（菓子）【名】

おやつやデザートとして食べる物の総称。現代ではくだものをのぞく甘い物をさすことが多い。

「お菓子を食べる」

[語法] 話したことばでは「お菓子」と「お」をつけて言う。ようかん、まんじゅう、大福（だいふく）などの和菓子と、ケーキ、クッキーなどの洋菓子に大別される。くだものは「水菓子」とも言う。

かぜ（風）【名】

① 空気が動く現象。

「強い風が吹く」「風がやむ」「扇風機で風を送る」

② 良い状態。

「日本経済に風が吹いてきた（日本経済が良い方向に向かってきた）」

③（「風のたより」の形で）どこからともなく聞こえてくるうわさ。

「風のたよりで彼の死を知った」

④（「風の吹き回し」の形で）状況。心境。

「どういう風の吹きまわしか（どのような心境（状況）の変化か）」

⑤（「〇〇かぜを吹かせる」の形で）えらそうな態度を示す。

「役人かぜを吹かせる（役人がいばった態度をとる）」

⑥（「臆病かぜに吹かれる」の形で）臆病になる。おじけづく。

[語法] ⑤⑥は接尾辞的な用法。

かぜ（風邪）【名】

鼻水、くしゃみ、せきなどが出る病気。熱が出ることもある。

「風邪を引く」「風邪がなおる」

かぞえる（数える）【他下一】

① 人や物の数を確かめる。

「おかねを数える」「人数を数える」

② 日にち、年の数などを確かめる。

「卒業してからの年数を数える」「クリスマスまでの日にちを数える」「子どもの歳を数える」

③ 順番を確かめる。

「成績の順位を数える」「前から何番目にいるか数える」

[表記] 「算える」とも書くが一般的ではない。

かぞく（家族）【名】

同じ家に住む夫婦、親子、兄弟など。

「家族の幸せを願う」

[語法] 「家族が別れ別れに住む」のように、本来は同じ家に住むべき人が別居している場合にも「家族」と言うことがある。

かた（肩）【名】

胴体の上で、腕の根もとの部分。

「かばんを肩にかける」「肩がこる（肩の筋肉がこわばる。「堅苦しく感じる」という意味でも使う）」「肩で風を切る（いばった態度をとる）」

かたかな（片仮名）【名】

仮名（平仮名と片仮名）の一つ。外来語をあらわすのに用いることが多い。漢字をもとに作られた日本独特の文字。

「片仮名で記す」「カタカナことば（外来語など片仮名で書くことが多い単語）」

がつ（月）【接尾】

1月から12月までの月をあらわすことば。

がっこう（学校）【名】

ある目的をもつ人々を集めて、一定の資格をもった教師たちが教育を行う組織、または教育を行う場所、建物。

「学校に入学する」「学校に通う」「学校を卒業する」「あそこに学校が見える」「学校まで1キロある」「学校を建てる」

かね（金）【名】

- ① 鉄や銅などの鉱物を含む鉱石から作られるかたい物質。金属（きんぞく）とも言う。
「この杖（つえ）はかねでできている」「かねのようのかたい」
- ② 物を買うときに、その価値に見合った量を支払う物質。現代では硬貨と紙幣がある。
「金が足りない」「金がほしい」「金をばらまく」「金を借りる」
〔語法〕実際に硬貨や紙幣のような物質でなくても、「あの人は金をたくさんもっている」のように、財産の意味でも使う。
〔表記〕①の意味では「きん（金）」との誤読を避けるため「かね」と仮名書きすることが多い。

かばん（鞄）【名】

通学や通勤などのとき、必要な物を入れて運ぶ皮やズックなどで作った入れ物。
「鞄を買う」「カバンのデザインを選ぶ」「カバンに本を入れる」
〔表記〕片仮名で「カバン」と書くことが多い。
〔語義・語誌〕「鞄」という漢字は、もともと「なめし皮」または「なめし皮を作る職人」の意味で、現在の意味は、明治時代以降の日本で生まれたもの。

かみ（紙）【名】

- ① 字を書いたり、品物を包むときなどに用いる薄い繊維（せんい）。「障子紙（しょうじがみ）」「襖紙（ふすまがみ）」「ちりがみ（鼻紙）」「トレットペーパー」などさまざまな用途（ようと）がある。
「紙に字を書く」「紙を破る」「紙を数える」「紙を何枚も重ねる」
- ② じゃんけんで手を開いて出すかたち。「石」に勝ち、「はさみ」に負ける。
「かみを出したら負けた」
〔語法〕①の意味の紙は「一枚・二枚」と数えることが多いが、「一葉～」「一片～」というかぞえかたもある。

かみ（髪）【名】

頭に生えている毛。

「髪を切る」「髪を洗う」「髪が薄くなる（髪が抜けて少なくなり、はげあたまに近づく）」
〔語法〕「髪の毛」とも言う。「1本（いっぽん）」「2本（にほん）」「3本（さんぽん）」「4本（よんほん）」のように数える。

カメラ（camera）【名】

光を吸収し、物体を映像として記録する器械。かつてはフィルムや乾板を用いて記録する方法がふつうであったが、近年は電子媒体（でんしばいたい）に記録するデジタルカメラが普及しつつある。静止画像（動かない画像）を写す物が多いが、映画の撮影機や

テレビカメラ、ビデオカメラなどもカメラの一種。

「カメラで写す」「カメラで撮る」「カメラで撮影する」「カメラのシャッターを押す」「カメラに写る」「カメラに入る（カメラで撮ってもらっている人の中に加わる）」

[語法] 昔は「写真機（しゃしんき）」と言った。数え方は「～台（だい）」。

かよう（火曜）[名]

月曜の次の日で、水曜の前の日。日曜から数えれば週の三日目で、月曜から数えれば週の二日目にあたる。

[語法] 「火曜日（かようび）」とも言う。案内文などの中では「〇月〇日（火）」のように表記することもある。

からだ（体・身体）[名]

動物がさまざまな動作をする部分の全体。一般には人間について言うことが多い。

「からだを洗う」「からだをきたえる（スポーツなどをして丈夫なからだを作る）」「からだをこわす（病気になる）」「いいからだをしている（体格がいい。またはスタイルがいい）」「からだを大切にしてください（健康に注意してください）」「あの人はふつうのからだではない（病気をもっている人や妊娠している人について言う）」

[語法] 「なきがら（亡骸）（死んだ人のからだ）」の「から」は「からだ」の「から」と語源が同じ。「だ」は接尾辞。「おからだをお大切に」のような表現は、手紙の末尾の挨拶に使われることが多い。「しんたい（身体）」は書き言葉の固い表現として使われる。

[表記] 「からだ」を「身体」と書くのは新しい使い方。

かるい（軽い）[形]

① 物を持ったり動かしたりするのに大きな力を必要としない。

「軽い荷物」

② 價値が小さい。

「この論文は中身が軽い」「軽い仕事を与えられて不満だ」「軽くあしらわれる（価値が低く見られる）」「口が軽い（深く考えずに価値のない発言をする。または秘密にしておくべきことを、人にしゃべってしまう）」

③ のびのびしている。

「身のこなしが軽い」「心も軽く、身も軽く（楽しい気持ちをあらわすことば）」

④ 落ち着きがない。

「尻が軽い（一箇所に落ちついられない性質だ）」

⑤ 程度が小さい。

「刑が軽い」「病気の症状が軽い」「軽い食事（量の少ない食事）」「軽く一杯やろう（少しだけ酒を飲もう）」

⑥ （普通ならできないことを）簡単に行うことができる。

「あの人ならむずかしい曲でも軽く弾ける」「大盛り五杯の飯を軽くたいらげた」

⑦ 最低限の程度を予測する。

「この仕事は軽く五年はかかるだろう（最低五年はかかるだろう）」

[語法] 反対語は「重い」。「重い」は上記の①②③⑤の反対語として用いる。

かわ（川・河）[名]

高い土地に降った雨が低い土地に流れ落ちる際に自然にできた水の通路。最後は海にそそぐ。

「川が流れる」「川を舟で下る」「川で魚を釣る」

[表記] 「河」は「川」よりも大きいものをあらわすことが多い。

かわいい（可愛い）[形]

① 幼い子どもや若い女性、また、動物などに対する愛情を表す。

「かわいい娘」「かわいい子犬」

② 小さい物への親しみの感情を表す。

「かわいい花」「かわいい人形」「かわいいクルマ」

③ 幼い子どもが身につけるような魅力を感じる。

「かわいい柄の洋服」

④ 幼い子どもや若い女性（異性）に特有の魅力を感じる。

「あの女性は目がかわいい」「君はかわいいことを言うね」

⑤ （若者ことばとして）親しみを感じる。

「あの先生はかわいい」

[表記] 「可愛い」は借字（当て字の一種）。

かんじ（漢字）[名]

中国から日本に入ってきた文字。平仮名や片仮名の元になっている文字。

「漢字を学ぶ」「漢字で書く」「漢字のテスト」

き（木・樹）[名]

① 幹（みき）のある植物。

「木を切る」「木に登る」「木から落ちる」「柿の木」「栗の木」「見上げるように高い木」

② 材木。建築材料として製材した木。「木で家を建てる」「木の香りがする家」

[表記] ふつうは「木」と書く。「樹」は「樹木（じゅもく）」（地面に生えている複数の木）として用いることが多い。

きいろ（黄色）[名]

レモンの皮や菜の花のような色。三原色の一つ。

「黄色の絵の具」「黄色に染める」

きいろい（黄色い）[形]

黄色である。

「黄色い紙」「顔が黄色い」「みかんを食べ過ぎで顔が黄色くなった」

「黄色い声（かん高い声）」「くちばしが黄色い（歳が若く、未熟である）」

きく（聞く・聴く）【五他】

① 音や声を耳で感じる。

「笛の音（ね）を聞く」「CDで音楽を聴く（聞く）」

② 話しの内容を理解する。

「先生の講義を聞く（聴く）」「ラジオを聞く」

③ 情報を受け取る。

「彼のうわさを聞く」

④ 言われたことに従う。

「親の言いつけを聞く」

[語法] 「きく」に対応する自動詞は「きこえる」。

[表記] ①②において、熱心に「きく」場合には「聴く」と表記する。

きしゃ（汽車）【名】

（本来は）蒸気機関車がひっぱる列車。広く長距離を走る列車全体を指すこともある。

「汽車に乗る」「汽車が走る」「汽車の切符」「汽車の汽笛（きてき）」

[語法] 汽車に対して、電気の力で走る列車は「電車」と言う。電車はとくに都市郊外の短距離を走る列車や、路面電車を指すことが多い。汽車と電車を総称して「列車」と言う。

きた（北）【名】

方位磁石が指す方角。日の出る方角（東）に向かって左の方角。

「東へ（に）向かう」「東の方角」「東が明るい」

きって（切手）【名】

郵便物を出すときに料金を支払った証明として郵便物に貼る絵が描いてある小さな紙切れ。郵便切手。

「切手を貼る」「切手を買う」「外国の切手を集める」

[語法] 数え方は「～枚」

きっぷ（切符）【名】

① バス、列車に乗るときに、料金を支払った証明となる紙切れ。乗車券。

「窓口で切符を買う」

② 旅客機に乗るときに、料金を支払った証明となる紙切れ。航空券。チケット。

「インターネットで飛行機の切符を予約する」

③ 劇場に入場するために、料金を支払った証明となる紙切れ。入場券。チケット。

「映画の切符」「コンサートの切符」

[語法] 数え方は「～枚」または「～片（へん・ぺん）」

きのう（昨日）【名】

今日（きょう）の前の日。

「きのうは学校が休みだった」「きのう学校を休んだ」

[語法] 書き言葉（または改まった挨拶など）では「さくじつ（昨日）」と表現することもある。「きのう学校を休んだ」の「きのう」は副詞的用法。

きもの（着物）[名]

① 着る物の総称。衣服。

「着物は和服でも洋服でもかまいません」

② 日本伝統の衣服。和服。

「着物に似合う帯を締める」「成人式に着物を着る」

きゅう（九）[名]

① 八に一を加えた数詞（数を表すことば）

「十（じゅう）から一を引くと九だ」「（野球などで）九回の裏」

[語法] 「九回」「九階」のような序数詞や「九台」「九枚」のような助数詞とともに用いるのがふうで、単独で用いることは稀。

② （慣用表現の中で）数が多いことを表す。

「九死に一生を得る（何度も死にかけたが生き残る）」「三拝九拝（何度も拝むこと、また、何度も頼むこと）」

[語法] 「九」は「第九交響曲」「九時」「四十九日」などのように、一定の単語の中では「く」と読むこともある。

きゅうこう（急行）[名・ス自]

① [名] 駅のすべてには停車せず、目的地に早く着く列車。急行列車。特急（特別急行）は急行より速く、準急（準急行）は急行より遅い。

「急行に乗る」「急行で行く」「急行券を買う」

② [ス自] 急いで目的地に向かう。

「火事の現場に急行する」

きゅうじゅう（九十）[名]

八十九に一を加えた数。単独では年齢を表すときに用いることが多い。

「父は来年九十になる」「父は九十まで生きた」

ぎゅうにゅう（牛乳）[名]

牛の乳（ちち）。

「牛乳を飲む」「牛乳を買う」「牛乳はきらいだ」「チーズは牛乳から作る」

きょう（《今日》

① いま過ぎつつある日。きのうの次、あすの前の日。

「今日は学校が休みだ」「今日こそ宿題を仕上げよう」「今日10時にうかがいます」

② 同じ日付や曜日の日。

「去年の今日はイタリアに行っていた」「先週の今日は風邪で学校を休んだ」

[語法] 「今日うかがいます」の「今日」は副詞的用法。

きょうかい（教会）【名】

特定の宗教の教えを伝え、儀式を行う場所、建物。とくにキリスト教について言うことが多い。

「日曜日に教会に通う」「教会で結婚式をあげる」

きょうかしょ（教科書）【名】

学校でそれぞれの科目を学ぶときに用いる本。大学ではテキストと言うことが多い。

「国語の教科書」「この授業では教科書は使いません」

きょうしつ（教室）【名】

学校で生徒や学生が学ぶ部屋。

「その授業は○○番の教室で行います」「教室の清掃」

きょうだい（兄弟）【名】

同じ親から生まれた関係にある者。

「私のきょうだいは仲がいい」「私は3人きょうだいです」

[語法] 女性どうしの場合は「しまい（姉妹）」と呼ぶこともある。

[表記] 女性どうし（または男性と女性）の場合は「きょうだい」と呼ぶことはあっても「兄弟」と表記することはない。

きよねん（去年）【名】

ことし（今年）の前の年。

「去年は豊作だった」「去年イタリアに行った」

[語法] 去年の同義語に「昨年（さくねん）」があるが、「昨年」はおもに文章語（書きことば）として用いる。「去年イタリアに行った」の「去年」は副詞的用法。

きらい（嫌い）【形動】

付き合ったり、食べたり、学んだり、行なったりすることを避けたい気持ちだ。

「あの人嫌いだ」「数学が嫌いだ」「嫌いな食べ物」「今の仕事は嫌いだ」

「勉強は嫌いだ」

[語法] 反対語は「すき（好き）」

きる（着る）【上一他】

① 衣服を身につける。

「着物を着る」「上着を着る」「シャツを着る」

② （「笠に着る」の形で）地位を利用していはった態度をとる。

「権力を笠に着る」

③ 受け入れる。

「罪を着る（自分の罪として受け入れる）」「恩に着る（恩を受けて感謝する）」

[語法] ①の場合、ズボンやスカートは「はく」と言う。

きれい（綺麗）【形動】

① 美しい。

「虹がきれいだ」「字がきれいだ」「きれいな女性」

② 清潔だ。

「部屋をきれいに掃除する」「洗濯したきれいな下着」

③ 物事に執着せず、さっぱりしている。

「金（かね）にきれいだ（金銭に執着しない）」

④ すっかりなくなるようす。

「料理をきれいに食べつくす」「借金をきれいに返済する」

[語法] ①の場合、「美しい」は書きことば的、「きれい」は話しことば的。

きん（金）【名】

「金曜日」の略。

[語法] 案内状など中で「〇月〇日（金）」のように使用する。話し言葉として使用することはない

ぎんこう（銀行）【名】

預金、貸し付け、送金、為替、投資信託の販売など、金融全般を扱う機関。

「銀行で預金をする」「銀行にお金を預ける」「銀行からお金を借りる」

「銀行から送金する」「銀行の窓口で行員に相談する」

きんよう（金曜）【名】

木曜の次の日で、土曜の前の日。日曜から数えれば週の六日目で、月曜から数えれば週の五日目にあたる。

[語法] 「金曜日（きんようび）」とも言う。案内文などの中では「〇月〇日（金）」のように表記することもある。

く（九）【名】

八に一を加えた数詞（数を表すことば）。

「九九八十一（かけ算の唱えことば）」「十中八九（確率の高いこと）」「九分九厘（ほとんど完成していること）」のような熟語や、「第九交響曲」「九時」「四十九日」などのように、一定の単語の中で造語成分として使われる。単独で使われることはない。

くさ（草）【名】

茎がやわらかい植物。木のように大きく成長することはない。

「庭に草が生える」「草を刈る」

くさ (草) [接頭]

本格的な競技ではなく、素人が趣味として行うレベルの低い競技。または、設備が整っていない場所で行われる競技。

「草野球」「草競馬」「草すもう」

くさ (草) [接尾]

上に付く名詞の材料や対象になるもの。

「お笑い草 (笑いの対象)」「質草 (質屋でお金を借りるときに預ける品物)」「言い草 (発言した内容)」

[語法] 上の用例はすべて「～ぐさ」と読む。

[語源] 「くさ」は「種 (くさ)」に由来する。

くだもの (果物) [名]

りんご・柿・みかん・メロンなど、おかずではなく、お菓子のようにおやつやデザートとして食べる草木の実。

「果物が好きだ」「何か果物が食べたい」

[語源] 「木だ物」(木の物)に由来するという説が有力。類例に「けだもの (獸)」(「毛だ物」に由来という説)がある。

くち (口) [名]

① 顔にある穴で、食べたり飲んだり、また、声を出す場所。

「口が大きい」「口をあける」「みかんを口に入れる (食べる)」「口をつぐむ (沈黙する)」

「あいた口がふさがらない (あきれたようす)」「口をとがらす (不満を顔にあらわす)」

② 口から出ることば。

「口をそろえて (皆一斉に) 反対する」「口がすべる (言ってはいけないことをうつかり言ってしまう)」「世間の口がうるさい (世間の人が口に出していくいろいろなうわさを言う)」

③ (「口をきく」の形で) しゃべる。

「よけいな口をきくな (よけいことをしゃべるな)」

④ (「口をきく」の形で) 紹介する。なかを取り持つ。

「社長に会いたいので友人に口をきいてもらった」

⑤ 物や液体を入れたり出したりする穴のような所。

「牛乳瓶の口をあける」「掘った穴の口をふさぐ」

くつ (靴・沓)

皮や布で作った履き物で、足をすっぽりと入れて履く物。

「靴をはく」「靴をぬぐ」「靴が足に合わないので靴ずれができた」

[語法] 数え方は「～足 (そく)」

[表記] ふつうは「靴」と書く。「沓」は古い用字。

くつした（靴下）[名]

靴をはくときや寒いときなどに足を保護するために素足（すあし）にはくもの。

「靴下をはく」「靴下をぬぐ」

[語法] 数え方は「～足（そく）」

くび（首・頸）[名]

① からだの一部で、頭と胴体をつなぐ部分。

「首が痛い」「首をふる」「首を右に向ける」「首をくくる（首を吊って死ぬ）」「首をかしげる（賛成できかねる気持ちをあらわす）」「首をひねる（考え込む）」「首がまわらない（借金を返せず、困りはてる）」「首を切る（「解雇する」の意味でも使う）」「首になる（解雇される）」

② 入れ物の首に似た細い部分。

「とっくりの首」「ビール瓶の首」

[表記] ふつうは「首」と書く。

くも（雲）[名]

空に浮かぶ白い綿状の物質。大気中の水分が凍結して細かい粒になったもの。

「空に浮かぶ白い雲」「雲が流れる」「雲が晴れる」「雲をつかむような話し（とらえどころのない、スケールの大きい話し）」「雲をつくような（きわめて背の高い）大男」

くらい（暗い）[形]

① 明るさが十分でない。

「暗い道」「あたりが暗くなってきた」

② 落ち込んだ気持ちである。

「彼の死を知って暗い気持ちになった」「暗い毎日を送る」

③ 性格が明るくない。

「彼女は暗い性格だ」「いつも暗い顔をしている」

④ 前途に希望が持てない。

「このままでは日本の未来は暗い」

⑤ その分野の知識が足りない。

「政治情勢に暗い」

[語法] 反対語は「明るい」

くらい（位）[名]

① [名] 身分の位置を示す。

「位が高い（低い）」「大臣の位に就く」

② [名] 十、百、千、万など十進法の段階を示す。

「(3,000のように) 千の位で点を打つ」

くらい [副助]

① だいたいの見当を示す。

「塩を 100 グラムくらい入れてください」「駅まで 10 分くらいかかる」

② 状況をなにかにたとえる。

「目が飛び出るかと思うくらい驚いた」「手紙を書くくらい簡単じゃないか」

③ 他のことがらにくらべて程度が大きいことをあらわす。

「子どもに死なれるくらい悲しい出来事はない」

④ 自分の好みや主観で他を選択することをあらわす。

「いやな上司の下で働かされるくらいなら、退職したほうがました」

[語法] 「ぐらい」と言うこともある。

くる（来る）【カ変自】

① 人や物が自分の方に近づく。

「友達が遊びに来る」「手紙が来る」「こっちに来て（「来い」という命令表現）」「アメリカから来た」「あした遊びに来ない？」「早く来ればいいのに」

② 自然現象がおきる。

「春が来る」「嵐が来る」

③ ある状態になる。

「からだにがたが来た（からだが弱った）」「ピンと来る（直感で分かる）」「頭に来る（感情的に反発する）」

④ あることが原因で起こる。

「運動不足から来る肥満」

⑤ 主題を強調する。

「文学の話とくると（文学の話なんか）全然分からない」「うちの亭主ときたら（うちの亭主なんか）酒ばかり飲んでいるんだから」

[方言] 九州方言などでは、発言した相手に近づくことを「来る」と言う。これを方言と気づいていない人が多い。

「あした遊びに来ない？」「うん、来るよ（行くよ）」

くるま（車）【名】

① 軸に取り付けて回転する円形の部品。多くは運搬装置の部品として使われる。車輪。

「車をころがす」「車を取り付ける」

② 荷車や自動車など、車輪を回転させて進む道具。現代では自動車を指すことが多い。

「車に荷物を積む」「クルマでドライブする」「うちにはクルマが三台ある」

くろ（黒）【名】

① 墨（すみ）のような色。

「黒は不吉な色だ」「黒のボールペンがほしい」

② 犯罪の事実があること。

「あいつは黒に違いない」「安易に黒ときめつけない方が良い」

③ 黒の墓石。

「先手で黒を持つ」

くろい（黒い）【名】

- ① 黒色である。
「黒いハンカチ」「日に焼けて顔が黒くなった」（目の黒いうちに（自分が生きているうちに））
- ② 悪いことを隠しているようす。
「腹が黒い人（表面がよい人のように見えるが、なにかたくらみがある人）」「黒いうわさ（悪いうわさ）」

け（毛）【名】

- ① からだに生えている糸のようなもの。
「髪の毛を染める」「髪の毛がぬける」「毛を剃る」「動物の毛」
- ② 毛①に似ているもの。
「ブラシの毛」

け（家）【接尾】

代々続いている家柄であることをあらわす。

「徳川家」「将軍家」「佐藤家の婚礼」

〔語法〕元来は身分の高い家柄をあらわしていたが、現代ではふつうの家であっても尊称として広く用いられる。

けさ（今朝）【名】

今日の朝。（話をしているとき、手紙を書いているときなどの）その日の朝。

「今朝はいい天気です」

げつ（月）【名】

「月曜日」の略。

〔語法〕案内状などで「〇月〇日（月）」のように使用する。話し言葉として使用することはない。

げつ（月）【接尾】

月単位の期間をあらわす。

「四ヶ月（よんかげつ）」「数ヶ月（すうかげつ）」

げつよう（月曜）【名】

日曜の次の日で、火曜の前の日。日曜から数えれば週の二日目で、月曜から数えれば週の最初の日にあたる。

〔語法〕「月曜日（げつようび）」とも言う。

げんき（元気）【名・形動】

- ① 【名】からだの調子がよく、気力のあるようす。
「元気がある」「今日は元気がない」「元気いっぱいだ」「いつも元気のいい人だ」
- ② 【形動】意味は元気①と同じ。
「元気な人」「今日も元気だ」「お元気ですか」「うちの祖父は八十になるが、まだまだ元気だ」

ご（五）【名】

四に一を加えた数詞（数を表すことば）

「六から一を引くと五だ」「(野球などで) 五回の裏」

【語法】「五回」「五階」のような序数詞や「五台」「五枚」のような助数詞として用いるのがふうで、単独で用いることは稀。

【表記】「伍」と表記することもある。

こうえん（公園）【名】

- ① 町の一画に草花を植えたり、ベンチを置いたり、ブランコや滑り台などの遊具を設置したりして住民のいこいの場としたもの。
「公園で子どもを遊ばせる」「公園を造る」「公園デビュー（若い母親が初めて子どもを連れて公園に行くこと）」
- ② 海中公園や森林公園などのように、動物・森・池などを自然に近い状態で保存した、やや規模の大きい施設。
- ③ 国立公園のように、指定した一帯を自然のまま保存し、人工的に手を加えることを制限した地域。

コーヒー（[蘭] koffie）

コーヒーの木の種（コーヒーの豆）を煎（い）って粉にし、それに熱湯を通した飲み物。ブルーマウテン、モカ、キリマンジャロなど、さまざまな銘柄がある。複数の銘柄の粉を混ぜ合わせたものをブレンドと呼ぶ。アメリカンコーヒー（略称アメリカン）は酸味の強いコーヒーを浅煎りにして薄めに入れたもの。

「コーヒーを飲む」「コーヒーをいれる（粉に熱湯を通してコーヒーを作る）」「コーヒーを沸かす」「コーヒーを挽く（コーヒーの豆を粉にする）」

【文化】コーヒーはもと薬用であったが、13世紀半ば頃より飲料とするようになり、アラビアを中心に広がった。日本には18世紀後半に伝來した。

【表記】「珈琲」と表記することもある。

【数え方】飲み物としてのコーヒーは「～杯（はい・ぱい・ばい）」。

こおり（氷）【名】

水が冷えて固まつたもの。透明で堅い。

「池に氷が張った」「冷蔵庫で氷を作る」「ウイスキーに氷を入れる」

「熱が出たので、氷で頭を冷やす」「氷を割る」

[表記] 歴史的仮名遣いが「こほり」であるため、仮名書きでは「こおり」と表記する。
「こうり」と書くのは誤り。

こくばん（黒板）【名】

白墨（ハクボク）で字や図を書く黒色の板。学校などで使用する。最近は緑色のものも多い。

「黒板に板書（ばんしょ）する」「黒板を消す（黒板に書いた字を黒板ふきで消す）」

【参考】黒板と同じ用途で、白い板にマジックインキで書く物は「ホワイトボード」と言う。

ここ（此処）【代】

話し手がいる場所、または話し手に近い場所をあらわす。

「ここは私の家です」「ここは東京です」「ここに来てください」「ここにあるよ」「ここは学校で、あそこは市役所です」

【表記】「此所」と表記することもあるが、ふつうは仮名書きすることが多い。

ごご（午後）【名】

正午から夜十二時までの間。正午から夕方までを指すこともある。

「午後八時に帰宅した」「会合を開くなら午後がいい（この場合は正午から夕方までを意味していることが多い）」

ここのか（九日）【名】

① その月の九番目の日。ようか（八日）の次の日でとおか（十日）の前の日。

「今月の九日は都合が悪い」「十月九日（じゅうがつこのか）」

② 九日間。

「レポートを仕上げるのに九日（ここのか）くらいかかる」

ここのつ（九つ）【名】

① 物が九個あることをあらわす。

「まんじゅうが九つある」

② 年齢が九歳あることをあらわす。

「九つの孫がいる」

ごじゅう（五十）【名】

① 十の五倍の数。「五十回」「五十番」のような序数詞や、「五十枚」「五十台」のような助数詞とともに用いられ、単独で用いられるることはほとんどない。

② 五〇歳。

「来年は五十になる」

ごぜん（午前）【名】

真夜中の零時から正午までの間。夜明けから正午までを指すこともある。

「午前一時に帰宅した」「会合を開くなら午前がいい（この場合は明るくなつてから正午までを意味する）」

こたえ（答え）【名】

- ① 相手の質問や誘いなどに対する返事。回答。
「質問したら明確な答えが返ってきた」「案内状を出したのに答えがない」
- ② 問題が求めているもの。解答。
「正しい答え」「答えがまちがっている」「答えが合っている（正しい解答をしている」

こたえる（答える）【下一自】

- ① 質問や求めにに対して返事する。回答する。
「質問に答える」「批判に答える」「アンケートに答える」
- ② 問題が求めていることを記したり、言ったりする。解答する。
「試験問題に答える」「クイズに答える」

こたえる（応える）【下一自】

- ① つらく感じる。
「寒さが応える」「骨身に応える」
- ② 相手の要望・期待にかなう行動をとる。
「要請に応えて努力する」「観衆の声援に応える」
- ③ （「こたえられない」の形で）とても気持ちがよい。
「暑い夏に飲むビールの味はこたえられない」
[表記] ③は「堪えられない」とも表記する。

こちら（こちら）【代】

- ① 話し手が聞き手に向かって自分のいる位置を指すことば。
「こちらにおいでください」「（電話などで）こちらは東京です。そちらはどちらからおかけですか」「こちらは寒いです」
- ② ふたつの物があるとき、話し手により近い所にある物を指すことば。
「こちらの品はお安くなっています」「ぼくはこちらの方が好きだ」
- ③ 聞き手に対して話し手自身を指すことば。わたくし。わたし。
「こちらから電話します」「こちらの都合も聞かずに会の日取りを決めないでください」
[語法] 話しことばとして使われるのがふつう。よりくだけた言い方では「こっち」と言う。

こっち（こっち）【代】

「こちら」のくだけた言い方。意味は「こちら」の①②③に同じ。

- ① 「こっちに来てよ」「こっちは寒いよ」
- ② 「こっちの方が安いよ」「ぼくはこっちがいい」

③ 「こっちから電話するからね」「こっちの都合も聞いてよ」

〔語法〕 親しい人に対して使う。目上の人には「こちら」と言った方がよい。

コップ（蘭 kop）〔名〕

ガラスやプラスチックなどで作った筒型の飲み物を入れる道具。

「コップで水を飲む」「コップが割れた」「コップから水がこぼれる」「歯磨きのコップ」

「コップの中の嵐（直接関係している人たちにとっては大変なことだが、部外者から見れば小さな出来事）」

〔語法〕「コップ」の類義語に「グラス」があるが、グラスはビールやワインなど加工した飲み物を飲むときに使うことが多い。たとえばレストランなどでは「コップ」とは言わない。逆に歯を磨くときに水を入れる道具は「グラス」とは言わない。

ことし（今年）〔名〕

いま過ごしている年。去年の次、来年の前の年。

「今年がいい年になりますように」「今年こそ外国に行こう」「今年ももうすぐ終わりだ」

〔語法〕「イタリアに今年行った」というときの「今年」は副詞的用法。

こども（子ども）〔名〕

① その人の子。息子や娘。動物の仔を指すこともある

「私には子どもが三人いる」「早く子どもがほしい」「娘に子どもができた」

「飼っている犬に子どもができた」

② 大人になっていない年齢の人。

「子どもを大切に育てよう」「このような映画は子どもには見せたくない」

「大学生になったが、まだ子どもだね（精神的に大人になっていない）」

この（此の）〔連体〕

① 聞き手に向かって、話し手に近いものを指す。

「この方はどなたですか」「この犬は隣の犬です」「このバイオリンは名器だよ」

「あの人よりこの人の方が選手に向いている」

② 話し手が当面問題にしている事がらを指す。

「この問題はむずかしい」「この点を早く解決したい」「この戦争は長引きそうだ」

ごはん（御飯）〔名〕

① 米を炊いた食べ物。日本人の主食。

「御飯を三杯食べた」「パンよりご飯が好きだ」「ごはんのおかず」

② 食事。

「そろそろごはんにしよう」「朝ごはん」「昼ごはん」「晩ごはん」

〔語法〕おもに大人の男性が使う、やや乱暴なことばとして「めし（飯）」がある。

「早くめしにしてくれ（早く食事にしてくれ）」「三度のめしより野球が好きだ（野球がすごく好きだ）」（この場合の「三度のめし」は慣用句であり、乱暴な言い方ではない）

これ（此れ）〔代〕

- ① 聞き手に向かって、話し手に近いものを指す。
「これがほしい」「これは万年筆です」「ぼくがほしいのはそれじゃない、これだよ。」
- ② 話し手が当面問題にしている事がらを指す。
「これはむずかしい問題だ」「これを早く処理しないと大変なことになるよ」
- ③ （「これ（は）という」の形で）とくに問題にするほどではないことをあらわす。
「かなり努力したが、これという進歩は見られなかった」「これはというほどのすぐれた選手はみあたらない」

これ（これ）〔感〕

自分が注目したことに相手の注意を向けさせるときに発することば。
「これ、このとおりうまくいったよ」「これ、すごいでしょ。見て。」

こんげつ（今月）〔名〕

いま過ごしている月。
「今月は家計が赤字だ」「運動会は今月の20日だ」

こんしゅう（今週）〔名〕

いま過ごしている週。
「今週は忙しい」「卒業式今週の木曜日です」

こんど（今度）〔名〕

- ① 次の機会。
「今度はいつ会えるかな」「今度会うときは新宿にしよう」（この「今度」は副詞的用法）
- ② 近い将来に起きることを指す。
「今度こそがんばるぞ」「今度留学することになった」（この「今度」は副詞的用法）
- ③ 最近起こった事がらを指す。
「今度の殺人事件は解決がむずかしそうだ」「今度は運動会の準備が大変だった」

こんにちは（今日は）〔感〕

昼間、人に会ったときや、他人の家を訪問したときに使う、あいさつことば。
[語源]「今日はよいお元気で……」などの後の部分が略されてできた語。

こんばん（今晚）〔名〕

今日の晩。今夜。今日の夜。
「今晚は、冷えますね」「今晚は、暑いですね。」「今晚は、むしますね」「今晚、お暇ですか？」

こんばんは（今晚は）〔感〕

夜，人に会ったときや，他人の家を訪問したときに使う，あいさつことば。

「今晚は。お久しぶりです」「今晚は。おじやまします」「今晚は。おいでですか」

[語源]「今晚は穏やかな夜で……」などの後の部分が略されてできた語。

さい（歳）【接尾】

年齢や年数を数える語。

「三十歳」「五歳年上の人」「四，五歳」

[表記]小学校では，年齢を表す「歳」の代用字として，「才」を用いる。

さかな（魚）【名】

川や海に住む，尾びれで泳ぐ動物。うお。魚類。

「さかなを三枚におろす」「川のさかな」「海のさかな」

[語源]酒を飲むときに添えて食べる酒菜（さかな）の意から。

さくら（桜）【名】

春，白色や淡紅色の花が咲く落葉高木。バラ科サクラ属。ヤマザクラ，ソメイヨシノ，など種類が多い。春を代表する花で，花の見頃には，その下で花見の宴を開く風習がある。昔から和歌に詠まれ，近世以降は，日本を象徴する花となった。

「さくらを見に行こう」（花見に行く意）「さくらは日本を象徴する花です」

ざっし（雑誌）【名】

二人以上の書き手が執筆する定期刊行物。週刊，月刊，季刊などがある。マガジン。

「雑誌に私の論文が掲載された」「マンガ雑誌」

[語源]magazine の訳語として使用されたのは，柳河春三が慶應三年（1867年）刊行した「西洋雑誌」が最初。

さびしい（寂しい）【形】

① 人のいるようすがなくて，ひっそりとしている。

「人影のないさびしい夜道を歩く」

② 相手になる人がいなくて心細い。孤独な気持ちである。

「君がいなくてぼくはさびしい」

③ 心がみたされず，物足りない気持ちだ。

「たばこをやめて口がさびしい」

さむい（寒い）【形】

① からだで感じる気温や温度が，自分の適温より低いと感じる。

「今夜は寒いぞ」「うす着だと外は寒い」

② （「おさむい」の形で）内容や中味が貧弱である。

「報告書というにはお寒い内容だ」「財布の中がお寒い状態だ」

さようなら（さようなら）【感】

別れるときの、あいさつことば。さよなら。バイバイ。

「さようなら。ごきげんよう」「では、さようなら」「では、またあした。さようなら」

[語源]「然様（さよう）ならばこれにて御免」の後の部分を略した言い方。

さる（猿）【名】

サル目のうち、人類以外の哺乳類。原猿、広鼻猿、狭鼻猿、類人猿に大別される。数匹で群生するもの、家族群を構成するものがある。日本では、狭鼻猿のニホンザルを指す。犬とは不仲とされている。

さん（三）【名】

二の次の数。四の前の数。みつ。みつつ。

[表記]金額を記すときに、間違いを防ぐために「参」を用いることもある。

さん（山）【接尾】

① 山の名についていう語。

「富士山」「六甲山」「大雪山」

② 寺の名についていう語。山号。

「比叡山（ひえいざん）延暦寺」「金竜山浅草寺」

[語法]「ざん」と読む語もある。

さんかく（三角）【名】

三つの角（かど）がある形。三角形。

「紙を三角に切りなさい」

[語法]「目を三角にする」（目に角（かど）をたてて怖い目つきをする。）

さんじゅう（三十）【名】

① 10の三倍の数。

「29の次は30です」

② 年齢の30歳をいう。

「私は今年三十になる」

[文化]「さんじゅうにして立つ」という慣用句がある。30歳になったら自分の立場、信念をもって生活するようになれという意味。中国の「論語」から。

し（四）【名】

3の次の数。5の前の数。よ。よん。よつ。よつつ。

[文化]音の「し」は「死」（し）と同音なので、縁起をかつぐ人は「よ」「よん」という。

金額を記すときに、間違いを防ぐために「肆」を用いることもある。

し（紙）【接尾】

新聞を指す。

「本紙に記事がのる」「他紙」「スポーツ紙」「日刊紙」

じ (字) [名]

① ことばを書き記すために用いる符号。文字。日本では、片仮名、平仮名、漢字、ローマ字を用いる。

「ジョージは日本の字が読める」「日本の字を学ぶ」

② 書いた人の字の形。筆跡。書体。

「字が下手で恥ずかしい」「これは私の字ではない」「妻の字」「犯人の字」

③ 人名の一文字に「の字」を付けて、その人を遠回しにいう。

「おい、まのじ（政次<まさじ>のこと）」

④ 紋所の名。

「丸に一の字」「丸に十の字」

[語法] 「あの人にはの字」（あの人にはれていること）

「御<おん>の字」（ひじょうに結構なこと）

じ (時) [接尾]

① 時刻を表す。1日を24等分した60分が単位となる。

「午前8時」「12時に昼食をとる」

② そのとき。そのおり。特定の時刻。

「空腹時」「就寝時」「車のラッシュ時」

しお (塩) [名]

① 食生活の基本調味料の一つ。海水や岩塩から作る白い結晶。塩化ナトリウム NaCl を主成分とする塩辛い味の物質。

「サラダに塩をかける」

② しおあじ（塩味）のぐあい。しあけ。

「塩をきかす」（塩味を強くする）

[文化] 日本では、けがれを清めるものとして用いる。葬儀の後で、家に入るときお清めの塩をふりかける習慣がある。「清めの塩を盛る」

しかく (四角) [名]

角（かど）が4つある形。四角形。四辺形。

「真（ま）四角」「四角の紙」

[語法] 「四角な紙」「四角な顔」「四角なテーブル」のように、「な」を付けて使う。また、「四角い紙」「四角い顔」「四角いテーブル」とも使う。

じかん (時間) [名]

① 時（とき）の長さを測る単位。1日を24時間とし、1時間は60分からなる。

② 時の流れの中での、ある一点。時刻。

「出発の時間は午前8時です」「時間通りに開会する／閉会する」

③ ある時刻と他の時刻との間の長さ。区切られた長さの時。

「勤務時間」「待ち合わせ（約束）のときまで図書館で時間をつぶす」「時間外労働」「国語の時間」

[参考] 哲学では、空間と時間を最も普遍的な存在形式とする。過去・現在・未来の三様態があり、出来事は一方向に経過し、逆はありえない。

しごと（仕事）[名]

① 生計をたてていくための職。収入を得るための職業。

「教育関係の仕事に就く」「仕事を探す」

② しなければならないこと。業務。

「大事な仕事を任される」

③ 自分や、集団が従事した行動の結果。業績。

「日本のために／世界のために、いい仕事を残した」

④ 世間に迷惑をかける行動の結果。悪事。

「暴力団が仕事をしでかした」「泥棒が仕事をしたのだろう」

[文化] 太平洋戦争前は、「針仕事」（縫い物）を「お前急に一つ仕事をしてくれんか」（尾崎紅葉「多情多恨」）のように、内職の仕事として使われていた。

しじゅう（四十）[名]

① 10の4倍。よんじゅう。

「40は39の次、41の前である」

② 40歳のこと。

「私は四十になった」

[語法] 数のかぞえかたには、音と訓とがある。「しじゅう」は音読みである。

しずか（静か）[形動]

① 周囲にうるさい音や声がない状態。ひっそり。

「廊下は静かに歩くこと」「神社の境内は静かだ」「静かな宿」

② 目につく動きが少ない状態。ゆったり。ゆっくり。

「静かな川の流れ」「椅子を静かに引く」「行列が静かに進む」「静かなブーム」

③ 人の気持ちや態度が落ち着いている状態。あわてない状態。おだやか。

「静かに余生を送る」「静かな境地」

した（下）[名]

① 基準となるものより場所や位置が低いこと。

「三歳下の妹」「下の意見を聞く」「木の下で休む」「雪の下から芽が出る」「右目の下にホクロがある」「ワンマン社長の下で働く」

② 表面に表れていないところ。おおわれた物の内側。

「コートの下にセーターを着る」

③ 能力が劣っていること。

「六十点より下は不合格だ」「実力は僕の方が下だ」

④ 文章を書くとき、これから述べる部分。以下。

「詳細は下に記します」

⑤ すぐその後で。

「独立自尊だといった口の下から、もう助けてくれとは！」

しち（七）【名】

六の次の数。八の前の数。なな。ななつ。

【語法】いち（一）としち（七）を聞き間違えることが多いので注意する必要がある。

金額を記すとき、間違いを防ぐため「漆」とも書く。

しちじゅう（七十）【名】

① 10の7倍。ななじゅう。

「七十は69の次、71の前の数である」

② 70歳のこと。古稀。

「私は70になった」

【文化】唐の詩人杜甫が書いた詩「曲江詩」中の「人生七十古来稀」から70歳をいう。また、その祝い。

じてんしゃ（自転車）【名】

人が自分の足でペダルを踏み、車輪を回転させて走る乗り物。二輪車がふつう。

「自転車をこぐ」「自転車に乗る」「自転車競技」

じどうしゃ（自動車）【名】

エンジンの力によって車輪を回転させて走る車。レールや架線を用いないで路上を走る。

くるま。形の上から、自動二輪車、三輪車、四輪車などの種類がある。

しめる（閉める）【下一他】

① あいていた窓や戸などをとじる。

「雨戸を閉める」

② その日の営業や業務を終了する。

「本日は窓口業務を12時で閉めます」

③ 店や会社を廃業する。

「店を閉める」

しゃ（車）【接尾】

車輪を回転させて人や物を運ぶ乗り物。

「自転車」「自動車」「乗用車」「レッカーチー」「はしご車」

しゃしん（写真）[名]

カメラを用いて人物や風景の映像を記録したもの。

「結婚の記念に写真を撮る」「写真を送る」「写真をくばる」

[文化] 日本に写真機が渡来したのは、1848（嘉永元）年ごろオランダ船によるといわれている。

シャツ（shirt）[名]

① 男女ともに、上半身に着る洋風の肌着。アンダーシャツ。

② 上着の下、肌着の上に着る洋風の衣服の一つで、男性用はワイシャツ、女性用はブラウスという。

③ 上着として用いるものは、カッターシャツという。

しゅう（週）[名]

日曜日から土曜日までの7日間を単位とした暦の上の単位。一週間。

「週に一回、役員会議がある」「今月は第4週の土曜日に研究会を行う」

じゅう（十）[名]

9の次の数。11の前の数。とお。

[表記] 証書に金額を記すとき、間違いを防ぐため「拾」とも書く。

[語法] 「十本」「十個」「十銭」などは「ジュッポン」「ジュッコ」「ジュッセン」のほかに「ジッポン」「ジッコ」「ジッセン」とも読む。

しゅうかん（週間）[名]

① 1週のあいだの7日間。日曜日から土曜日までの間。

「テレビの週間天気予報を見る」

② 特別の行事を行う7日間。

「今週は交通安全週間ですよ」「緑化週間」

じょう（上）[接尾]

…に関して、…の面で、…の上で。名詞に付く。

「行きがかり上、行かざるをえない」「一身上の都合で退職した」「経済上の理由が大きい」「立場上、理由はいえない」「歴史上の大事件だ」

じょう（上）[名]

① その物の質が、程度・価値・等級などで、普通のものより高いこと。その質を示す記号として使う。

「握りしの上をたのんだ」「日本語の成績は中の上だ」

② 本が2冊、3冊からなっているときの第1冊目をさす。上巻。

「上の巻」「この本は上・中・下の三冊からなっている」

③ たてまつる意味を示す。進物の上包の紙に書く語。

しょうがつ (正月) [名]

- ① 1年のうちの最初の月。1月。昔は「むつき」ともいう。
 - ② 年の初めを祝う行事の行われる期間。新年の行事。正月の飾りのある松の内の7日間。
- 「盆と正月が一緒に来たようないい」「正月気分が抜けない」

しょうがっこう (小学校) [名]

日本では、9年間の義務教育のうち、はじめの6年間の初等教育を受け持つ学校。満6歳から満12歳までの児童が入学する。

[文化] 小学校の名称は、明治5(1872)年の学制に始まる。昭和16(1941)年から昭和22(1947)年までは、国民学校と呼ばれた。

じょうず (上手) [形動]

- ① 物事を手際よく仕上げること。
「絵の上手な人です」「彼は字が上手だ」
- ② 時間をうまく使うさま。
「余暇を上手に使うことが大切です」

じょうず (上手) [名]

- ① ことばを巧みに使って、相手の気持ちをよくすること。お世辞。
「上司に（お）上手をいう」
- ② 物事が巧みな人。名人。
「槍の上手」「上手といわれる」「上手の手から水が漏れる」

しょくじ (食事) [名]

生きるために、毎日、習慣的に何回か物を食べること。
「日本人は、朝、昼、晩と三回食事をする」「忙しくて食事をとるひまもない」

しる (知る) [五他]

- ① 人が人と面識がある。つきあいがある。
「パーティは、知らない人ばかりで退屈した」「田中君なら、よく知っている」
- ② 人が体で実感する。体験する。
「世の中の苦労を知らない」「作業の辛さは身をもって知っている」「子を持って知る親の恩」「恋を知る」「酒の味を知る」
- ③ 人が物事の本質を理解する。その意味が分かる。
「彼は自由の味を知っている」「遠慮ということを知らない奴だ」「物のよしあしを知っている」「恥を知れ」「おのれの非を知る」
- ④ 人が物事の情報を得る。知識を持つ。
「事情を知らずに失礼しました」「ニュースで事件を知った」「内部の事情をよく知って

いる者の犯行だな」「英語を知っている」(習っておぼえる)「中国語なら、少し知っている」(学んでおぼえる)「その町なら、よく知っている」

⑤ 人が物事を知覚する。気がつく。自覚する。

「身の危険を知る」「知らずに通り過ぎる」「知らないうちに、こんな時間になっていた」

⑥ (下に否定表現をともなって) 人が人にかかわりあって、責任をもつ。関知する。

「彼がどうなろうと、僕は知らないぞ」「彼女がどうなっても、知らないからな」

⑦ (「…ところを知らない」「…ことを知らない」の形で) その事態がかぎりなく続くことを表す。

「株価の下落はとどまるところを知らない」「社長の横暴は、きわまるところを知らない」

しろ (白) [名]

① 色の名。雪のような色。

「白のワイシャツ」

② 色で分けられた紅白試合の白組のこと。

「赤勝て、白勝て」

③ 暮の試合で用いる白の石。白と黒の石を用い、あとで打つ人が白の石を使う。

④ 罪の疑いがないこと。無罪。無実。有罪ならば「黒」という。

「容疑者は白だった」

⑤ 何も書き入れてないこと。また、印刷されていない紙やページ。

「答案用紙は、まだ白です」

⑥ 白ナンバー (自家用車のナンバー) の略。

「白トラ (自家用トラック) のもぐり運送」

[文化] 白は、「紅白」「黑白」のように紅と黒と対になって用いられる。「紅白歌合戦」「紅白試合」「紅白の餅」など、紅も白も対等で明るいイメージがある。これに対して、「黑白を争う」「黑白を明らかにする」のように、黒は非・邪、白は是・正を示し、対比的である。

しろい (白い) [形]

① 白の色をしている。

「白い歯を見せて笑う」「ベンチを白く塗る」「白い肌が美しい」

② 潔白である。無罪である。

「白いか黒いか、出るところへ出て決めよう」

③ よごしたり、書き込んだりしていない状態。

「白いままでの答案用紙」「白い布に鯉の絵を画く」「白いままでのキャンバス」

しんせつ (親切) [形動]

相手の身になって、いろいろとやさしく配慮すること。その人のためになるように、思いやりをもってつくすこと。

「お年寄りには親切にしなさい」「御親切は、決して忘れません」

しんぶん (新聞) [名]

① 社会の出来事や話題を、できるだけ早く知らせるための定期刊行物。多くは、毎日刊行される。新聞紙 (newspaper) の略。

「その記事は今朝の新聞で読んだぞ」「新聞をとる」「新聞を配達する」

② 新聞がみ。

「新聞で弁当を包む」

すい (水) [名]

① 水曜日の略語。

「ごみの収集は、月、水、金だ」

② 水道の略語。

「電、ガ、水」(電気、ガス、水道)

③ 氷水 (こおりみず) のうち、砂糖の蜜だけで味をつけたもの。

すいよう (水曜) [名]

一週のうち、火曜日の次、木曜日の前の日。水曜日。

[参考] 日、月、火…と数えると、4日目。月、火、水と数えると、3日目になる。注意必要。

スカート (skirt) [名]

① 女性が腰から下を筒状に包む洋装の衣類。タイトスカート、フレアスカート、プリーツスカートなど種類が多い。

「スカートをはく」

② 線路上の障害物をはねのけるために、車両の下の方にかぶせる鉄板。

「電車のスカート」

すき (好き) [形動]

① ある対象や行為に、心がひかれるさま。理屈抜きで気に入ること。

「好きな人がいますか」「彼は酒が好きだ」「私は旅行が好きです」

② 他人から見ると、程度がはなはだしかつたり、変わった対象に打込んだりするさま。

「またカラオケですか。あなたも好きですねえ」「あいつも好きだなあ。またマージャンだ」

③ 自分の思うままにするさま。勝手にするさま。

「どうとでも好きにしろ」「好きなだけ持っていけ」「いつでも好きなときにおいで」「好きなことばかりいって」

すぐ (直ぐ) [副]

① その時から時間を置かないさま。ただちに。すぐに。

「家に帰ったら直ぐ (に) 寝てしまった」「連絡があれば直ぐ (に) 対処します」「すぐ行くから待ってくれ」

② 手数がかからないさま。簡単に。容易に。

「道順は、交番で聞けば直ぐわかります」「この問題なら直ぐ解けます」

- ③ ちょっとしたことで、ある状態になるさま。
「彼は体が弱くて、すぐ風邪をひく」「父は、うまくいかないとすぐ怒りだす」
- ④ その場所から距離が離れていないさま。
「銀行はすぐ目の前にある」「目的のレストランはすぐ左だ」「すぐ近くで火事だ」
- [語法] ①②③の「すぐ」は「すぐに」となることが多い。

すこし（少し） [副]

- ① 数量や程度が、わずかであるさま。ちょっと。
「酒を少し飲みたい」「頭が少し痛い」「その件については少し考えさせてください」
- ② 基準となる場所や時刻から、わずかな状態にあるさま。
「少し右へ寄ってください」「客は少し前に帰った」
- [語法] 「少し」には「少しこっちの立場になってくれよ」とか「少しの暇」などのように、名詞の使い方もある。

すずしい（涼しい） [形]

- ① 暑くなくて気持ちがよい。あたりの気温は熱い。
「木陰を涼しい風が吹く」「日射しは暑いが、木陰はさわやかで涼しい」
- ② ひんやりとする、ほどよい気温である。肌寒く感じる気温である。
「朝晩、めっきり涼しくなった」「だいぶ涼しいですね」(=肌寒い)
- ③ 目や声が澄みきっていて、さわやかな感じだ。
「あの子は涼しい目をしている」「目もとの涼しい少年」「少年合唱団の歌声は涼しく聞こえる」
- [語法] 「涼しい顔をする」は、「知らんぷり」「平気な顔」の意味で、表面は「さわやか」に見えるが、心の中は別である意味に用いる。

ズボン（仏 jupon） [名]

- 男性が腰から下にはく、洋装の衣類。股（また）から下は二つに分かれている。スラックス。
- 「ズボンをはく」「ズボンを脱ぐ」
- [語誌] フランス語のジュポンは、ズボンの下にはく下着のこと。

すむ（住む） [五自]

- ① 家や庭をきめて、いつも、そこで生活をする。居住する。
「職もなければ住む家もない。かわいそうだ」「緑の多い、空気のよい所に住みたいものだ」「アパートに住んでいる」
- ② 特定の階層や領域に生活する。生きている。
「我々とは別世界に住んでいる人」「妄想の世界に住む」
- ③ 動物が巣を作つて、その中で生活する。そこをすみかとする。
- [表記] ③の意味のときは人間と区別して「棲む」とも書く。

する (△為る) [サ変自他]

[一] (自サ)

- ① 人が自分の体の変調を感じる。
「朝から頭痛がする」「どうも寒けがする」「胸がどきどきする」
 - ② 人の身体や性格が、ある状態を示す。
「彼の体格はがっかりしている」「彼女は気性のさっぱりした人だ」「あかぬけした服装」「立派な服装をした人」
 - ③ 人が外界の刺激を感覚で受けとめる。生じる。
「遠くの空に稻光がする」「どこかでゴロゴロ音がする」「台所からよい香りがする」
 - ④ 人が、もう少しである行動をとる状態である。
「話もせずに帰ろうとする」「言おうとして言い忘れた」
 - ⑤ 時間がたつ。経過する。
「この魚は三日もすると、くさる」「カゼは二、三日すればなおる」
 - ⑥ (金額のあとにつけて) 値段がかかる。値段になる。
「この車は百万円する」「一万円する本を買う」
- ### [二] (他サ)
- ① 人が、ある動作・行為を行う。
「運動をする」「居眠りをする」「事件を公にする」「うっかりする」「仲間にする」「そういうことは口にするな」「することなすこと気にくわない」
 - ② 人が心である状態を考える。
「遠足を楽しみにして待つ」「何をもって生きがいとしたらよいか」「私としたことがとんだ粗相をいたしました」
 - ③ 人が心で意志を決める。
「今度は出席することにする」「やめにする」「私はカレーライスにする」「家庭を二の次にする」「約束をほごにする」「なかつたことにする」「値段を安くして売る」
 - ④ 人が世間で、ある役割をとめる。ある職業・地位に身を置く。
「私は弁護士をしている」「留守番をする」「今、何をしていますか」「教師をしています」
 - ⑤ 人が集団である行為を始める。
「ここで休憩にしよう」「そろそろ閉会します」
 - ⑥ 人が物を身につける。
「ネクタイをきちんとする」「イヤリングをする」
 - ⑦ 人の視界に入る。見る。
「街でよく目にする看板」
 - ⑧ (「お…する」「ご…する」の形で) 目上の人とかかわりのある動作を述べるときに使う、謙譲表現。
「こちらからお電話します」「先生もお呼びすることにしたらどうですか」「ぜひお会いしたいものです」

すわる (座る) [五自]

- ① ひざを折り、足の上に腰をおろした状態になる。正座する。

「畳（たたみ）に座る」「座布団に座る」「きちんと座って挨拶する」

② 椅子にかける。

「ベンチに座って読書する」

③ ある場所に腰をおろす。

「上座（かみざ）に座る」

④ ある重要な地位につく。

「政権の座に座る」「社長の椅子に座る」「首相の後釜（あとがま）に座る」

せいと（生徒）【名】

学校などで先生から教えを受ける人。現在は、大学の学生、小学校の児童と区別して、中学校、高等学校で教育を受ける人をいう。

「学校で生徒を募集している」「教師は生徒をなぐってはならない」「この先生は生徒の信頼がある」

せき（石）【接尾】

① 腕時計などの軸受けにするルビーなどの数をかぞえることば。

「十七石」

② 電気製品の中のトランジスターなどの数をかぞえることば。

「八石」

[参考] 「石」は「いし」と読みば訓で、stone の意味になり、「せき」と読みば音。

せなか（背中）【名】

① 人や動物の背の中央。背骨のあたり。せ。

「子どもを背中におぶう」

② 物の後ろの部分。背面。

「冷蔵庫の背中にある放熱板を修理する」

せん（千）【名】

① 100 の 10 倍。万の 10 分の 1。

「千は 999 の次、1001 の前の数である」

② 数が多いことを表す。

「千に一つも誤りがない」「千客万来」「千変万化」

[表記] 契約書や領収書に金額を記す場合、間違いを防ぐために「阡」とも「仟」とも書く。

せんせい（先生）【名】

① 自分が教えを受ける人。特に、学校で教育にたずさわる人（教員）や、芸能などを教える人（師匠）を指す。

「小学校の先生になる」「ピアノを先生に習う」「先生について書を習う」

② 医者、議員、弁護士、作家などを尊敬して呼ぶことば。

「小児科の先生に子どもを見てもらう」「小説家の A 先生に指導していただく」

③ ある人をからかったり、親しみをこめて呼ぶことば。やっこさん。

「ちょっとおだてたら、先生その気になっちゃった」

[参考] 手紙のあて名に「○○先生」と書くことがある。

そう（そう）【感】

① 相手の言うことに同意する返事のことば。しり下がりの調子でいう。

「そう、そのとおり」「そう、それがいいよ」

② 相手の言うことに問い合わせ返すことば。本当ですか。しり上がりの調子でいう。

「あら、そう」「そう、信じられないな」

③ 何かを思い出したときに発することば。

「そう、あれは去年の正月のことだったね」

そう（そう）【副】

① そのように

「私もそう思います」「彼女がそう言ったのですか」「いくらおいしくてもそれは食べられないよ」（「それは」の「は」は強調の気持ちを示す）「そうするよ」

② そのとおりだ。そうだ。

「そうですか」「学生さんですか。そうです」「そうさ」

③ それほど。そんなに。あとに打ち消しの語をともなう。

「彼は、そうおおきくはないよ」「そう大変ではない」

そこ（そこ）【代】

① 相手と同じ場所にいるとき、自分たちから少し離れた場所を指すことば。

「駅はすぐそこだ」「学校はすぐそこです」

② 相手と離れているとき、相手に近い所を指していふことば。

「そこから黒板の字が見えますか」「そこにあるチョークをとってくれないか」

③ 自分と相手とが共通に知っているところや状態や場面をさし示すことば。

「そこをよく読んでくれ」「駅から行くと、左側にスーパーがある。そこから三軒目が私の家だ」「そこまでひどいとは思わなかった」

④ 話題にのぼっている物事の程度や状態をさしていふことば。それほど。「そこまで」の形で用いる。

「そこまでひどいとは思わなかった」「そこまでしなくてよい」

そして（そして）【接】

① 前に述べた事柄を受けて、それを継続したり、その結果をつづけて述べるためのことば。そして。

「朝7時に起きた。そして、8時に学校へ出かけた」

② 前に述べた事柄を受けて、それに追加するために、あとへ続けるためのことば。

「空は青く、そして澄んでいた」「富士山は高く、そして美しい」

そちら (そちら) [代]

- ① 自分と離れている相手に近い場所・方向・ものをさすことば。そっち。
「今、そちらへまいります」「そちらは、まだ暑いですか」
- ② 自分より、少し離れている人をさすことば。相手や相手の身近な人をさす。
「そちらは、お茶ですかコーヒーですか」「そちらからの連絡をお待ちします」

そっち (そっち) [代]

- ① そちら①
「今、そっちへ行きます」
- ② そちら②
「そっちは、お茶、コーヒー？」

[参考]

「そっち」は「そちら」の音変化した形。「そちら」は「そっち」より「ていねい」な言い方。

その (其の) [連体]

- ① 相手に近い物事をさしていうことば。
「その本とってください」「その家、君の家かい」
 - ② すぐ前に、相手が示した事柄をさしていうことば。その場での出来事をさす。
「その件は、引き受けた」「その問題は簡単だ」「その元気、その意気だ」「その態度は、なんだ。けしからん」
 - ③ すぐ前に相手が示した話題をさしていうことば。示す内容の時期は昔になる。
「その年に、子供が生まれたんだ」
 - ④ 全体をいくつかに分けたときの、一部分。
「この本の、その一、その二が特におもしろい」
- [参考] 「実は、その、言いにくいのですが」というような、言葉がうまく出て来ないときの、つなぎのことばとしても用いる。このときは感動詞となる。

そば (側・傍) [名]

- ① 空間のへだたりがない所。近く。人にも、物にもいう。
「僕のそばにいろよ」「あいつはそばにいるだけで手を貸そうとしない」「駅のそばに郵便局がある」
- ② 時間のへだたりがないことを示すことば。すぐそのあと。「……するそばから」の形で使う。
「教えるそばから忘れる」「作るそばから食べる」「稼ぐそばから使ってしまう」

そら (空) [接頭]

- ① なんとなく。わけもなく。下にくることばの気持ちがはなはだしいことを表す。形容詞につく。
「そら恐ろしい」「そら恥ずかしい」

② あてにならない。かいがない。下にくることばの効果が生じないことを表す。名詞につく。

「そら頼み」「そら音（ね）」「そら夢」

③ いつわり。ごまかし。うわべだけ。下にくることばの実体が存在しないことを表す。名詞・動詞につく。

「そらいびき」「そら泣き」「そら寝（ね）」「そらとぼける」

そら（空）[名]

① 自分の立っている地面の上方に広がる空間。昼は雲があり、青く見える高いところ。夜は星の見える遠いところ。天空。

「空高く鳥が飛んでいる」「空を仰ぎみる」「夕日の沈む西の空」

② 空模様。天候。天気の様子。

「空が曇ってきた」（雨が降るかな）「秋の空は変わりやすい」

③ 日常生活の場所から遠く離れたところ。また、その生活。

「異国の空で暮らす」「故郷の空を思う」「今は旅の空だ」

④ 不安だったり、落着かなかつたりする心の状態。気持ち。

「生きた空もない」「うれしくて、うわの空だ」

⑤ 書いたものにたよらず、暗記していること。「空で」の形で使う。

「高歌の歌詞は空で覚えているよ」「空でいう」

⑥ うそ。いつわり。

「空を使う」「空をいっても、すぐばれる」

それ（それ）[代]

① 自分が相手とそばにいるとき、自分たちから少し離れた所にあるものをさすことば。

「これよりは、それのほうがよくできている」

② 自分と相手とが離れているとき、相手に近い所にあるものをさすことば。

「ちょっと、それ取ってくれ」「あなたの持っているそれは何ですか」

③ 相手の発言や行動を、繰り返すかわりにさすことば。

「それどういう意味ですか」「私はそれを言いたかったのだ」「それは、こまります」

④ 相手と共通の話題としている事柄をさすことば。

「彼にはそれ以来会っていない」

それから（それから）[接]

① 前の事柄に続いて、後の事柄が起こることを示す。そして。そうして。その次に。

「戸締まりをして、それから家を出た」「出社すると一服して、それから仕事にかかる」

② 前の事柄に並べて、後の事柄を加えることを示す。そして。

「佐藤君、池田君、それから田中君もいたよ」「菓子と、それから花を恩師に贈ろう」

だいがく（大学）[名]

① 高等学校の上の学校。学部は4年制、6年制のものと、2年制、3年制の短期大学

とがある。学部の上、さらに専門的な研究を行う大学院がある。卒業すると、学士の学位が授与される。

「大学に入学する」「大学生」

② 教養講座などに市民大学、老人大学などと呼ぶ名称。

だいじょうぶ（大丈夫）【形動】

心配ないようす。安心できるさま。確か。

「彼女ならまかせておいて大丈夫だ」「火の元は大丈夫ですか」「資金は大丈夫か」

〔参考〕「大丈夫、きっとうまくいくよ」「大丈夫、合格するよ」「大丈夫、まだ間に合う」のように、「まちがいなく」の意味で、副詞にも用いる。

たかい（高い）【形】

① 下から上方まで大きく伸びている。

「彼は背丈が高い」「高い波をかぶる」「富士山は日本で一番高い」「高いビルの屋上に登った」

② 位置が上方にある。

「手を高く上げる」「空高く雁が飛ぶ」「旗が空高くひるがえっている」

③ 鼻や筋肉や乳房が盛り上がっている。

「欧米人は鼻が高い」「彼女の胸は高く盛り上がっている」

④ 音や声が大きいさま。音量が大きい。

「興奮して声が高くなる」「ステレオの音量を高くする」

⑤ 高音であるさま。音程が上である。

「ソプラノ歌手の高い声」「澄んだ高い声で歌う」

⑥ 地位、価値、能力が上であるさま。

「高い地位につく」「身分の高い貴族になる」「彼女の能力は、社長から高く評価されている」

⑦ 評判がよい。質がよい。程度が上である。

「名人の評判が高い」「このレストランは格調が高い」「さすがお目が高い」「この工場は生産性が高い」「理想の高い人」

⑧ 自分からすぐれていると思ったり、行動したりする。高慢である。

「お高くとまっている」「プライドが高い」

⑨ 数値や割合が大きい。

「温度が高い」「血圧が高い」「栄養価が高い」

⑩ 金銭の額が大きい。

「ブランド品は値段が高い」「高い買物をした」「利息が高い」

たくさん（沢山）【副・形動】

① 分量が多いさま。多数。

「本を沢山持っている」「本を沢山買い込んだ」「彼女は沢山な（の）贈り物をいただいた」「お祭りは沢山の人でにぎわう」

② 分量が十分であるさま。これ以上はいらないようす。

「先生のお説教はもう沢山だ」「お酒はもう沢山です」

[参考] ①の意味では「子だくさん」「盛りだくさん」のように、名詞について「……だくさん」の形で用いる。

タクシー (taxi) [名]

お客様を運ぶ営業用の自動車。路上で求めに応じて客を乗せ、走行距離で料金をとる。

「流しのタクシーを拾う」

だけ (丈) [副助]

① その事に限定する意味を表す。

「君だけは、わかつてほしい」「学校だけでなく、家庭での指導も必要だ」「あとは結果を待つだけです」「二人だけの秘密だ」「これだけは確かだ」「それだけだ」「三日だけよ」

② それが可能な程度をあらわす。

「行けるだけ行くぞ」「要るだけとれ」「できるだけ努力する」「あれだけの人物は、それはいない」「どれだけの人が、本質を理解しているだろう」

[参考] 「だけに」「だけあって」「だけのことはある」などの形で、「相当だ」「当然だ」と認められる条件をあらわす。「新しいだけに壁の汚れが目立つ」「高いだけあって品質がよい」「さすが自慢するだけのことはある」

ただいま (ただいま) [名]

① ちょうどいま。過去と未来との境になる時をいう。

「ただいま、八時半です」「社長は、ただいま席をはずしております」

② ほんの少し前。ついさきほど。ごく近い過去の時をいう。

「ただいまお渡しした書類にサインをお願いします」「ただいまのお話、たいへん感動いたしました」

③ 少しあとで。今すぐ。ごく近い未来の時をいう。

「はい、ただいまうかがいます」「課長は、ただいまこちらへ来られます」

[参考] 「ただいま帰りました」の略語として、挨拶のことばとしても用いる。

[表記] 「只今」「唯今」とも書く。

たつ (立つ) [五自]

[I] (人や動物が)

① 横になつたり、座つたりしていた状態から身を起こす。立ち上がる。

「呼ばれたら、立ちなさい」「赤ん坊がはじめて立ったぞ」

② 身を起こして、その場を離れる。

「黙って席を立つ」「手洗いに立つ」

③ 体の部分で、伏せていたものが起きる。

「髪の毛が立つ」「鳥肌が立つ」「耳のピンと立った犬」

④ とがつたものが突き刺さる。

「足にとげが立つ」「このせんべいには歯が立たない」

[II] (自然界の物が)

⑤ 草木が下から上へまっすぐに伸びる。

「街路樹が立つ」

⑥ 細長いものが下から上へ、まっすぐに位置する。

「電柱が立っている」「看板が立つ」

⑦ 煙や蒸気などが空中に上がり漂う。

「土ぼこりが立つ」「霞が立つ」「虹が立つ」

⑧ 風や波などが起こる。

「土用波が立つ」「秋の涼風が立つ」

⑨ 水面に気泡が生じる。

「鍋の湯に泡が立つ」「温泉に泡が立つ」「風呂に泡が立つ」

[III] (人が社会に身を置いて)

⑩ ある立場や状況に身を置く。

「行列の先頭に立つ」「教壇に立って教える」「裁判で証人に立つ」「署名を求めて駅頭に立つ」

⑪ 世間に知られ、認められる。

「歌手として人気が立つ」「不良のうわさが立つ」「彼女の服装は人目に立つ」「彼は潔白のあかしが立った」「小説家として立つ」

⑫ 物事が好ましい形で成り立つ。筋道が通る。

「面目が立つ」「役に立つ」「予定が立つ」「見通しが立つ」「義理が立つ」「言いわけが立たない」

⑬ 感情が激しくなる。たかぶる。

「この騒動に、みな気が立っている」「あいつの仕打ちに、腹が立つ」

⑭ 新しく物事が設けられる。

「市（いち）が立つ」「暮らしが立つ」

⑮ 割り算で商が成り立つ。

「六を二で割ると三が立つ」

たのしい（楽しい）[形]

心が満ちたりて、うれしい状態が続くようす。

「春の一日を楽しく過ごす」「なんとも楽しい思い出だ」「ピクニックはとても楽しかった」「彼とのおしゃべりは楽しい」

たべる（食べる）[下一他]

① 食べ物を口でかんで、おなかに入れる。

「家族そろって朝食をたべる」「昼にはカレーライスをたべた」「何か腹の足しになるものをたべたい」

② 生活する。生計をたてる。

「月給だけでは食べていけない」「年金だけでは食べられない」「フリーターの仕事で、

何とか食べている」

[参考] ①の意味で尊敬を示すには「上がる」「召しあがる」「召す」を用い、謙譲には「頂く」「ちょうどいする」を用いる。

たまご（卵）【名】

① 鳥、虫、魚などのメス（雌）が産み、子になる前の、球形または橢円形のもの。

「アヒルの卵がかえる」「卵を産む」

② 食用にするニワトリの卵。鶏卵（けいらん）。

「卵をゆでる」

③ まだ、十分に発達しない段階のもの。

「台風の卵が発生した」

④ 一人前にならない修業中の人。

「彼は医者の卵だ」「学者の卵」

〔表記〕 ②は「玉子」とも書く。

だめ（駄目）【形動】

① してはいけないこと。禁止。

「知らない人の話に乗っては駄目だよ」「一人で外出しては駄目だぞ」「当分、酒とタバコは駄目だぞ」

② むだ、無益であること。

「今は、彼に何を言っても駄目だ」「駄目かもしれないが、とにかく頼んでみよう」

③ 望みがないさま。不可能なさま。

「二人の仲はもう駄目だ」「このままでは彼は駄目になる」「家庭の事情で、進学は駄目だ」

④ 劣っているさま。

「何をやらせても駄目な人」

だめ（駄目）【名】

① 囲碁で、白と黒の境目にあって、いずれのものともならない目。

② 演劇などの演技で、注意や注文。

「あの監督は何度も駄目を出す」

だれ（誰）【代】

① 名前を知らない人。その人とはつきりわからない人。

「あの人はだれだ」「犯人はだれだ」「君はだれだ」

② 「だれか」の形で、自分以外の不特定の人。

「だれか来てくれ」「だれか来たようだ」「だれか欲しい人はいないか」

③ 「だれも」の形で、全面的な否定を示す。一人も。打消の語を伴う。

「公園にだれもいない」「だれも会場にいなかった」

ちいさい（小さい）【形】

① 物の形や広がり（体積・面積）が、標準となるもの、比較の対象となるものより少ない。

「小さい手」「小さい犬」「小さい箱」「小さい家」「小さい部屋」「小さい池」「小さい国」

② 高さ・長さが標準となるものより少ない。低い。短い。一方が固定しているものに使う。

「小さい煙突」「彼は私より背が小さい」「小さい鉛筆」

③ 物事の程度や割合が標準となるものより少ない。わずかだ。

「被害は小さくてすんだ」「小さい問題は後まわしにしよう」「小さいことでくよくよするな」「影響が小さい」「温度差が小さい」

④ 数や量などが標準となるものより少ない。

「声を小さくする」「100より小さい数」「もっとボリュームを小さくしてください」

⑤ 年令が少ない。おさない。

「小さい子どもたちが遊んでいる」「弟は僕より一つ小さい」

⑥ 包容力が少ない。度量がとぼしい。心が狭い。ちぢこまる。

「人物が小さい」「彼は気が小さい」「度量の小さい人間になるな」「隅のほうで小さくなるな」

ちいさな（小さな）【連体】

「ちいさい」①～⑥の連体形と同じ意味に用いる。ちいさい。

① 「小さな手」

② 「小さな煙突」

③ 「小さな問題は後まわしにしよう」

④ 「100より小さな数」

⑤ 「小さな子どもたちが遊んでいる」

⑥ 「度量の小さな人間になるな」

ちかい（近い）【形】

① 空間的に隔たりが少ない。

「自宅は駅から近い」「引っ越したら、勤務先が近くなった」

② 時間的に隔たりが少ない。

「近いうちに、また伺いますので、よろしく」「近い将来、研究所は移転するでしょう」「このごろ小便が近い」

③ 血すじや関係の隔たりが少ない。

「彼と僕とは近い親戚関係にある」「二つの会社は、社長が兄弟で関係が近い」

④ 物事の内容や性質が似ている。

「社長の意見は、社員の考えに近い」「この布に近い色をさがせ」

⑤ 数量がほぼある値に達しそうである。

「百人近い人が集まった」「あれから5年近い月日が過ぎた」「60歳近い人」

[参考]「目が近い」の形で、「近眼である」ことを示す。「目が近くてよく見えない」

ちかく（近く）【名】

- ① 距離が近いところ。近辺。
「ポストは家の近くにある」「近くの駅はどこですか」
- ② 数量を示す語について、その数値より少なくて、近い数値であることを示す。
「目的地まで一時間近くかかります」「四キロ近く歩いた」

ちかく（近く）【副】

時間が近いうちに。まもなく。
「近く公表する予定です」「近く国会が開かれます」

ちかてつ（地下鉄）【名】

地下鉄道の略語。乗客をはこぶために、都市の地下にトンネルをほって作った鉄道。メトロ。ホームと線路の大部分が地下にある。
[参考] 世界最初のものは英国ロンドンで、1863年開通。日本では、1927（昭和2）年に、東京の浅草と上野間に開通したのが最初。

ちから（力）【名】

- ① 人や動物の体に備わった筋肉などの働き。
「力にまかせて押しまくる」「満身の力をこめる」「空腹で足に力が入らない」
- ② 考えたり、行動したりするもとになる気力。心身の勢い。
「先輩のはげましで力がわいてきた」「朗報に力を得た」「不合格と聞いて力がない」
- ③ 何かを目標として行う努力。
「社員全員、力をあわせてがんばろう」「自分一人の力でやりとげるぞ」
- ④ 何かの期待をもって、頼りにするもの。
「困ったときは君の力になろう」「両親はわが子を力にして生きた」
- ⑤ 人や物に備わっていると考えられる能力。
「ペンの力は剣より強い」「圧力団体の力に屈する」「力で事を解決する」「彼には原書を読みこなす力がある」「親の力ではどうしようもない」
- ⑥ 物の状態を変える作用。
「蒸気の力で機関車を動かす」

ちゃ（茶）【名】

- ① ツバキ科の常緑の低い木。茶の木。秋、白い五弁の花が咲く。春、若葉をつんで飲料の原料とする。
「茶の畑」
- ② 茶の木の若葉をつんで蒸し、もみながらかわかしたもの。茶の葉。
「高級な茶」
- ③ 茶の葉に湯をさして飲む飲料。製法により緑茶と紅茶になる。湯の色が緑と紅となる。

「茶を入れる」

④ 抹茶をたてること。その作法。茶道。茶の湯。抹茶の場合、特に「茶をたてる」という。

「茶をたしなむ」「茶のお手前（茶をたてるときの作法）」

⑤ 茶色の略語。

「茶の上着／ズボン」

[参考] 「茶にする」には、「休んでお茶を飲む」意味のほかに、「人の話を茶にする」というように、「はぐらかす」「ちゃかす」という意味もある。

ちやいろ（茶色）[名]

色の名。黒みをおびた赤黄色。茶。

「茶色のセーターを着ている」「茶色のかばんが気に入った」

ちやわん（茶碗）[名]

茶を注いだり、飯を盛ったり、コーヒー、紅茶を注いだりして飲食する陶磁製の器（うつわ）。これらを区別するときは、茶飲み茶わん（湯のみ茶わん）、ごはん茶わん、コーヒー茶わんと呼ぶ。

「茶碗に御飯をよそう」

ちゅう（中）[名]

① 三つに分けたときの、まんなか。

「大中小」「上中下」「これは中のサイズだ」

② なかほどで、良くも悪くもないこと。

「彼はクラスで中の下（げ）の成績だ」

③ 中学校の略語。

「小中高の一貫教育」「この学校は大学の付属中だ」「中卒」

④ 野球で、中堅手の略語。

「左中間」

⑥ 中国の略語。

「和洋中の料理がそろっている」「訪中が楽しみだ」「日中友好」

[参考] 書き言葉では、「中を取る」「中を失わず」など、「中庸」「かたよらない」という古典的意味でも用いる。

ちゅう（中）[接尾]（名詞につく）

① その物の中に含まれていることを示す。

「空気中の酸素」「100グラム中の有効成分」

② その範囲内にあることを示す。

「30人中の5番だ」「十中八九は成功するだろう」「今週中に完成する」「今月中は出張で留守です」

③ ちょうど、その状態にあることを示す。

「ただ今会議中です」「電話中ですので、しばらくお待ちください」「就業中」「話し中」

④ 「…中の…」の形で、そのなかで最もそれらしいことを示す。

「本命中の本命」「秀才中の秀才」

ちょうど（丁度）【副】

① 話し手が考えていること、または、期待している現実の状態に一致するようす。折よく。

「ちょうどよいところへきた」「ちょうど手があいたところだ」「この箱はカードを納めるのにちょうどいい大きさだ」

② ある基準に過不足なく一致するようす。ぴったり。きっちり。

「ちょうど約束の時間に到着した」「ブラジルはちょうど日本の裏側にあたる」「ちょうど、君のうわさをしていたところだ」「100万円ちょうどの買い物をした」（端数のない買い物）

③ そっくり、そのままだと、物事にたとえられるようす。まるで。さながら。

「真っ赤になって怒った顔は、ちょうど金時のようだった」「ちょうど、秋晴れの空のような深い青の湖面だった」

ちょっと（ちょっと）【副】

① しばらく。待ち時間の感じを示す。

「開演までちょっと時間がある」「ちょっと待て」

② すこし。わずか。物事の量や大きさが少ないようすを示す。

「塩をちょっと足しましょう」「もうちょっと大きめの服がほしい」

③ その行動が、大げさなことではないという感じを示す。

「ちょっと出かけてくる」「ちょっと署まで来てくれ」「ちょっと目を離したすきに、子どもがいなくなった」

④ かなり。その方面で、頻度が高いことを示す。

「ちょっといい女がいるぞ」（かなりの美人）「これでもその道ではちょっとは知られた顔だ」

⑤ 下に打消の語をともなって、簡単には存在しない、できないことを示す。

「ちょっとお目にかかるない図だ」「これほどの人物はちょっといない」

〔表記〕「一寸」「鳥渡」は当て字。

ちょっと（ちょっと）【感】

呼びかけることば。

「ちょっと、お客様」「君、君、ちょっと」

ついたち（一日）【名】

月の第一日。

「毎月一日に定例の会がある」「あいにく一日は日曜日だ」「一日に研究会を開く」

〔語源〕「ついたち（月立ち）」から音変化してできたことば。

[語法] 「一日（いちにち）」は、同表記の別語。

つかう（使う）【五他】

- ① 人が人に言いつけたり、頼んだりして仕事をさせる。
「事務所でアルバイトを使う」「あごで人を使う」
- ② 人が自分の身体の部分を、ある目的のために有効に働く。心をあれこれ働く。
「取材には足を使う」「彼女は彼に色目を使う」「頭を使え」「気を使う」
- ③ 人が道具として有効に使用する。
「治療に新薬を使う」「電気掃除機を使って部屋をきれいにする」「マイクを使って話す」「コンブをだしに使う」「ようじ（楊枝）を使う」
- ④ 人が有効な方法・手段として用いる。その結果、巧みによそおいて、偽りの状況を作り出す。
「賄賂（わいろ）を使う」「居留守を使う」「仮病を使う」「袖の下を使う」
- ⑤ 人が扱いの難しいもの、訓練を必要とするものを、巧みにあやつる。
「魔法を使う」「猛獣を使う」「人形を使う」「手品を使う」
- ⑥ 人が、自分にとって大切なものをへらす。
「体力を使う」「多額の金を使う」

[語法] 「使う」は「○○を使う」の形で、慣用句として用いるものがある。「湯を使う（入浴する）」「手水（ちょうず）を使う（便所へ行く）」「袖の下を使う（ワイロを送る）」など。

つき（月）【名】

- ① 地球の衛星。
「月を探検する」「月に人工衛星を打ち上げる」「十五夜の月を鑑賞する」
- ② 地球以外の惑星の衛星。
「木星の月」「土星の月」

[文化] 日本では月を鑑賞する習慣がある。

つき（月）【名】

- ① 曆のうえで1年を12に区分した1つ。1月、2月のように、それぞれ名称を持っている。
「小の月」「大の月」
- ② 1ヶ月のこと。
「月に1度会う約束をする」「月に1度給料をもらう」「一月（ひとつき）、二月（ふたつき）とすぐに日が経ってしまう」

つぎ（次）【名】

- ① 後にすぐ続くこと。また、続いたそのもの。
「次から次へと新しい案を考える」「次の間に控えている」「次は私の番です」

② あるものより一段低い位置にあること。

「社長の次に権力のある人」「主将の次に実力のある人」「あの人は、次の首相と呼ばれている」

つくえ（机）【名詞】

文章を書いたり、本などを読んだりするときに使う台。

「机を並べる」「もう中学生なのだから、自分の机で勉強しなさい」「小学生になったから机を買ってあげる」

つくる（作る）【五他】

① あるまとまったものを新しく生み出す。

「棚を作る」「食事を作る」「詩を作る」

② 組織・制度・仕組みなどをこしらえる。

「国を作る」「法律を作る」

③ 農作物などを育て上げる。

「大根を作る」「ミカンを作る」

④ 土地を耕す。

「田を作る」「畑を作る」

⑤ 財産を生み出す。

「お金を作る」「一財産（ひとざいさん）を作る」

⑥ 新しい記録を生み出す。

「世界記録を作る」「新記録を作る」

⑦ 物ごとの原因となるものを生み出す。

「敵を作る」「発展の基礎を作る」

[表記]「造」を使うこともある。

つめたい（冷たい）【形】

① 温度が自分の体温より低く感じられる。

「運動をした後、冷たいジュースを飲むのが楽しみだ」「膝頭が冷たい」

② 思いやりがない。

「冷たい態度をとる」「あの人は、性格が冷たい」

つよい（強い）【形】

① 腕力、気力が十分にある。

「けんかに強い」「気が強い」「向こう意気が強い」

② 得意である。

「機械に強い」「英語に強い」「パソコンに強い」「経理に強い」

③ 勢いが激しい。

「強い雨が降る」「強い口調で責める」

④ 耐久力、抵抗力に富んでいる。

「スポーツで強い体を作る」「不況に強い会社」

て(手) [名]

- ① 人体で両肩から別れている部分。指先から肩までの部分。
「手を挙げて発言する」「袖に手を通す」
 - ② 指先から手首までの部分。手のひら、指先をいうこともある。
「しっかりと手を握る」「口より手のほうが早い」(口論をするとき、腕力を使う)
 - ③ 器具などで、手で持つようにできている部分。
「鍋の手をしっかりと持つ」「急須の手を握る」
 - ④ 労働力。
「どうしても手が足りない」「人手が必要だ」「女手一つで子どもを育てる」
 - ⑤ 仕事をすること。
「執筆の手を休める」「少しばかり手を抜く」
 - ⑥ 手間や手数。また、人の行為をばくぜんと指す。
「手の込んだ細工」「手のかかる生徒」「人のやっていることに手を出さない」
 - ⑦ (将棋や囲碁などで) 駒を指したり石を打ったりすること。
「終盤で1手打つのに1時間かける」
 - ⑧ 攻めや守りの方法。
「それはいい手を考えついたものだなあ」「もう打つ手はない」
- [語法] 「火の手があがる」(火事になる)
「警察の手が入る」(警察が介入する)
「手に職を持つ」(技術を身に付ける)

てがみ (手紙) [名]

- ① 自分の意思を伝えるために、紙に書き記した物。
「手紙を書く」「置き手紙を残しておく」
- ② 郵便葉書に対し封書の郵便物のことをいう。
「手紙をポストに入れる」「就職のお願いの手紙を書く」

できる (出来る) [上一自]

- ① 新たに作られる。発生する。生じる。
「新しく会社ができる」「頭にできものができる」「雨が降って水たまりができる」
- ② (「できた」の形で) 試験や問題がうまく成し遂げられた。
「試験はできた」「この問題はできた」
- ③ (「できている」の形で) [俗]男女が特別の関係にあること。
「あの二人はどうやらできているらしい」
- ④ それをする能力がある。
「英語がものすごくできる人」「彼は勉強ができる」
- ⑤ 可能性がある。
「この文章は幾通りにも解釈できる」

⑥ (人柄や技能などが) すぐれている。

「あのはるは、人間ができるている」「できる人は、やっぱり違う」

[表記]かな書きで書くことが普通。

でぐち (出口) [名詞]

中から外へ出る口。

「この部屋の入り口と出口は同じだった」「出口をかためる」

[語法]「選挙の出口調査」(選挙人が選挙でだれに投票したかを投票所の出口で調査すること。放送局が当落を予想するために行う。)

デパート (department store から) [名]

多種類の商品を並べて販売する大型の小売店。百貨店。

「デパートで買い物をする」

てぶくろ (手袋) [名]

防寒や装飾などのために、手にはめる袋状のもの。皮・布・ゴムなどで作られている。

「寒いので手袋をはめる」「ちょいとしやれた手袋を買う」「手袋を脱ぐ」

でる (出る) [下一自]

① ある範囲内から外に移る。超える。

「1週間ぶりに家から外に出た」「部屋から出る」「もう少しで足が土俵の外に出るところだった」

② そこを離れてほかの所へ行く。

「電車はもう出るところです」「気ままな一人旅に出る」

③ 学校を卒業する。

「大学は出たけど職はなし」「大学をやっと出る」

④ ある所に行き着く。

「ようやく大通りに出た」「町に出る」「郊外に出る」

⑤ 商品が売れる。

「この製品はよく出る」「出る商品は決まっている」

⑥ そこから由来する。出発する。

「彼は名門の出だ」「今から家を出るから後15分ほどかかる」「8時に家を出る」

⑦ 現れる。見つかる。

「月が出る」「盗まれた自転車が出てきた」「その主人公はこの物語に出てくる」

⑧ (ある仕事や活動をするために) 特定の場所にのぞむ。

「市長選挙に出る」「友だちの結婚式に出る」「急いで電話に出る」

⑨ ある態度をとる。

「高飛車に出る」「下手に出ればいい気になって」

⑩ 広く知られるようになる。

「テレビに出る」「新聞に出る」「雑誌に出る」

⑪ 新たに生じる。

「霧が出る」「雨雲が出る」

⑫ 与えられる。

「ボーナスが出る」「ご馳走が出る」

テレビ (television の略) [名]

放送局から映像や音声を流し、それを受信するシステム。特に、その受信装置を指す。

「家に帰るとすぐテレビを見る」「テレビ番組を録画する」

てん (店) [接尾]

店のこと。

「喫茶店」「中華料理店」

てんき (天気) [名]

① (晴れ、雨、曇りなどの) 気候の状態。

「今日はいい天気だ」「山では急に天気が崩れる」

② 晴れていること。晴天。

「天気が長持ちする」「今日は天気だが、明日は雨との予報だ」

でんき (電気) [名]

① 摩擦電気や放電などのさまざまな電気現象の元となるもの。

「電気を発生させる」

② 電灯。

「もう寝るから電気を消すよ」「暗くなってきたので電気をつける」

③ 電力。

「村に電気を引く」「電気の料金がかさむ」

でんしゃ (電車) [名]

電気を動力源とする鉄道車両。

「電車が時間通りに発車した」「電車に乗る」「電車から降りる」

でんわ (電話) [名]

① 電話機の略。

「あ、電話が鳴っている」「ダイヤル式の古い電話」

② 電話機を使って話すこと。

「家に電話をかける」「話の途中で電話を切る」

ど (土) [名]

土曜日の略。

[語法] 話しことばでは使われない。書きことばでのみ使う。

どあ (door) [名]

洋風の戸。扉。

「勢いよくドアを開ける」「ドアをバタンと閉める」

どうして (どうして)

[一] [副]

① どうやって。どんな方法で。

「どうして暇をつぶそうか」「どうしてこんなふうにできたんだろう」

② なぜ。どんな理由で。

「この子は、どうしてこういうことを聞かないのだろう」

[二] [感]

強調する気持ちを表す。

「どうして、どうして、ものすごい人出でした」

どうぞ (どうぞ) [副]

① 丁重に頼む気持ちを表す。

「どうぞよろしく」「どうぞお願いします」

[語法] 「どうか」と同じ意味で使われることが多い。

② 物ごとを勧める気持ちを表す。

「はい、おひとつどうぞ」「どうぞお召し上がりください」

どうぶつ (動物) [名]

① 生物を動物と植物に区分したときの一種。自由に行動し、植物や他の動物を食べて栄養素を摂取する。

② 動物①のうち人間以外のもの。特に、獣類。

「動物を飼育する」「あの人は人間じゃない。動物よ」

とお (十) [名]

① 九の次の数。

② 十歳。

「ようやく十 (とお) になった」

とおい (遠い) [形]

① (場所や時間が) ひじょうに離れているさま。

「学校が家から遠い」「完成までまだ遠い道のりだ」「遠い将来のことを気にするな」

② (関係が) 薄い。

「遠い親戚を頼りにしてもむだだ」

③ 隔たりが大きい。

「理想から遠くかけ離れている」「秀才といわれるにはほど遠い成績だ」

[語法]

- 「耳が遠い」(難聴である)
- 「電話が遠い」(電話の声が聞き取りにくい)
- 「目が遠い」(遠視である)
- 「気が遠くなる」(意識が薄れる)

とおか (十日) [名]

- ① 10日間。
「ちょうど十日休む」「十日ぶりに出勤する」
- ② 月の10番目の日。
「三月十日」

とおく (遠く)

- [一] [名]遠いところ。遠方。
「遠くの国から来た人」「一生懸命遠くを見る」
- [二] [副]隔たりが大きいさま。
「これでは世界記録に遠く及ばない」

とき (時) [名]

- ① 過去から現在、未来へと切れ目なく続いていき、一定不変の速さで移ってゆくと考えられるもの。
「時が流れる」「時が経(た)つ」「時は金なり」(時間は貴重である)
- ② ある一時点。
「時を同じくして二つの事故が相次いだ」「ある時を境に2人の運命は大きく変わった」
- ③ (季節、時代など) 比較的長い間。
「若葉の時」「若い時は2度来ない」
- ④ 大事な時。
「時が熟した」
- ⑤ (「の」を伴って) その時。
「小泉首相の時」「子どもの時は楽しかった」「地震の時は気を付けなさい」

ときどき (時々)

- [一] [名]その時その時。
「時々の話題を口にする」
- [二] [副]ある程度間を置いて、繰り返されるさま。ときおり。
「時々昼寝をする」「晴れ時々曇り、後雨」

[語法]

「たびたび」「しばしば」より頻度が低く、「たまに」より頻度が高い。

とけい (時計) [名]

時間を量ったり、時刻を示す器械。

「時計が時間を刻む」「時計の電池を入れ替える」

どこ（何処）【名】

はつきりとは分からぬ場所。どの場所。

「どこのお生まれですか」「どこまで行くの」「どこまでお出掛けですか」

[語法]「どちら」は「どこ」のていねいな言い方。

ところ（所）【名】

① 場所。

「机を置くところを決めてください」「ところ変われば品変わる」

②（～のところ）の形で）～の住んでいる場所。

「叔父のところに下宿する」「父のところにはもう帰らない」

③（あるものの）近く。

「信号のところを左に曲がる」

④ 部分や側面。

「そこが彼の悪いところだ」「彼にはいいところが多い」

⑤ 場面。状況。場合。

「ちょうどいいところに来た」「今日のところはこれで済ます」

⑥ およその程度・範囲。

「だいたいのところをいうと」「およそのところ、これぐらいの量だ」

⑦ 時間・時期

「このところ心配が多い」「今のところ間に合っています」

[表記]仮名書きで書くことが多い。

とし（年）【名】

① 1年間。

「その争議は年を越した」「年が過ぎる」「あの年は雪が多かった」

② 年齢。

「お年はおいくつですか」「あの人は年のことを聞かれると機嫌が悪くなる」

③ 年齢が多いこと。高齢。

「もう年でそんなに無理はできない」「年をとる」

としょかん（図書館）【名】

図書・雑誌・記録などを収集し、整理・保管して閲覧させる施設。

「県立の図書館に通う」「図書館で本を借りる」「図書館で調べ物をする」

どちら（どちら）【代】

① 特定されていない方向・場所を指す。

「どちらから来たの」「どちらへ行くの」

[語法] 「どこ」と同じ意味だが、「どこ」よりも丁寧。また、「どっち」のほうが選択する意味が強い。

② 二つのもののうちの一つ。

「どちらが好きだ」「どちらかを選びなさい」

③ どなた。

「どちら様でしょうか」「どちらのお宅でしょうか」

[語法]

「だれ」よりもていねい。

どっち (どっち) [代]

「どちら」のくだけた言い方。

[語法] 話しことば的。

とても (とても) [副]

① (打ち消しの語を伴って) どうしても。とうてい。

「とてもまねのできない作品だ」「とても太刀受けできない相手だ」

② たいそう。非常に。

「とても美しい人」「とても高価な宝石」

どなた (何方) [代]

「だれ」の尊敬語。

「どなたでも結構です」「今笑ったのはどなたですか」

どの (どの) [連体]

複数あるものの中で、どれか1つに決められないものを指す語。

「どの果物が好きですか」「どの子もかわいい」

とぶ (飛ぶ) [五自]

① 空中を移動する。飛行する。

「飛行機が空を飛ぶ」「かもめが飛んでいく」

② 飛行機に乗って移動する。

「直行便でロンドンまで飛ぶ」「大統領就任演説の取材のためワシントンへ飛ぶ」

③ (力を加えられて) 空中を移動する。

「部屋中にホコリが飛ぶ」「暖かくなつて杉花粉が飛ぶ」

④ はねて空中に散る。

「火花が飛ぶ」「勢いよくしぶきが飛ぶ」

⑤ (何かをめがけて) 勢いよく放たれる。

「つぶてが飛ぶ」「唾が飛ぶ」

⑥ (スキーのジャンプ競技で) 空中を飛行する。

「90メートル飛ぶ大滑走」

- ⑦ つながっていたものが急に離れる。
「大地震で地震計の針が飛ぶ」
- ⑧ (うわさなどが) 急に広まる。
「うわさが飛ぶ」「デマが飛ぶ」
- ⑨ あったものが急になくなる。
「車のローンでボーナスの半分が飛んだ」
- ⑩ 大急ぎであるところへ行く。
「警察が事故現場へ飛んだ」
- ⑪ (犯人などが) 遠くへ逃げる。
「どうやら犯人は国外へ飛んだようだ」
- ⑫ ページの途中が欠けて先へ移る。
「ページが少し飛んでいる」

[語法]

「ヤジが飛ぶ」(ヤジがかかる)
「びんたが飛ぶ」(びんたを食らわされる)
「会社が倒産して首が飛ぶ」(会社が倒産して退職させられる)

とぶ (跳ぶ) [五自]

跳ね上がって物の上を越す。
「勢いよく飛び箱を跳ぶ」「三段飛びの選手」

とまる (止まる・留まる) [五自]

- ① (活動していたものが) 動かなくなる。
「車が門の前で止まる」「ストで電車が止まる」
- ② (続いていたものが) 続かなくなる。
「成長が止まる」「水道が止まる」
- ③ (手足の動きが) やむ。
「ペンを走らせていた手が急に止まる」「貧乏ゆすりが止まる」
- ⑥ (生理現象が) やむ。
「おかしくて笑いが止まらない」
- ⑦ (「とまらない」の形で) 固定できない。
「カレンダーが画鋲で留まらない」「太りすぎてボタンが留まらない」
- ⑧ ある場所に静止する。
「小鳥が枝に止まる」「蝶が花に止まる」

[語法]

「お高くとまる」(偉そうな態度をする)
「目に留まる」(印象づけられる)

ともだち (友達) [名]

たがいに心を通じ合って付き合っている人。友人。

「彼とは兄弟のように仲のいい友達だ」「友達付き合いをする」

どう (土曜) [名]

一週で金曜の次の日。土曜日の省略した言い方。

「今度の土曜は仕事で出だ」

とり (鳥) [名]

① 体全体が羽毛で覆われ、翼で空を飛ぶ動物。鳥類。

「大きな鳥が空を飛ぶ」「小鳥を愛玩用に飼う」

② にわとり。特に、その肉。

「鳥の水たき」「鳥の空揚げ」

どれ (どれ)

[一] [代] どのこと。どのもの。

「どれを先にしようか」「どれから始めようか」

[二] [感] あることにとりかかろうとしたときに発する語。

「どれ、そろそろやるか」「どれ、貸してみろ。こうやるんだ」

どんな (どんな) [形動]

① どのような。どういった。

「どんな状態だ」「どんな加減か知らないが、それでいい」

② (「どんなに」の形で) どの程度。大変。

「どんなに心配したか知らないでしよう」「あなたが試験に受かって、お父様はどんなに喜んでいることでしょう」

③ (「どんな～でも」の形で) いかなる～でも。

「どんな息子でもかわいいものだ」「粘土を使えばどんな形でも作れる」

ない (無い) [形]

(ものが) 存在しない。

「ここにはゴミ1つない」「水を飲もうとしてもコップがない」

ない (ない) [助動]

① (動詞の未然形について) その動作の打ち消しを表す。

「行かない」「もうしない」

② (「か」「かしら」「かな」「かなあ」などの語を付けたり、上昇調のイントネーションで) 命令、願望、推量などを表す。

「どうだ、もうしないか」「少しぐらいもらえないかしら」「やっぱりできないかなあ」

なか (中・仲) [名]

[一] (中) (空間的・時間的に) 区切られたそのあいだ。ある範囲の内側。

「部屋の中に入る」「山の中に入る」「部の中から代表を選ぶ」「雨の中を傘も差さずに歩く」「忙しい中をありがとう」

[二] (仲) 人と人との関係。良いか悪いかをいう。

「仲のいい兄弟」「彼と僕とは仲が悪い」

ながい（長い）【形】

(空間的・時間的に) 距離が大きい。

「15両連結の長い列車」「縦に長い土地」「長く留守にする」「日が長くなる」

【語法】

「息が長い」(ものごとが長期間続くこと)

「気が長い」(ゆったりとしていて、あせらないこと)

「長い目で見る」(気長に見守る)

なく（鳴く・泣く）【五自】

[一] (鳴く)

(鳥や虫や獣が) 声を出す。

「虫が鳴く」「馬がヒヒヒーンと鳴く」

[二] (泣く)

① (感情的な高まりや肉体的な苦痛で) 声を上げたり涙を流したりする。

「悲しみのあまり泣く」「激痛に耐えきれず泣く」

② 辛い体験をする。

「ガソリン高に泣く」「米の不作に農民は泣いている」

なぜ（何故）【副】

どういうわけで。どうして。

「なぜお前は反対するのだ」「なぜかは知らないが悲しい」

なつ（夏）【名】

四季の一つ。春と秋の間、冬の前。

「夏はむし暑い」「夏に旅行する」

ななじゅう（七十）【名】

① 十の七倍。

② 七十歳の略。

「もう七十だ、若くはない」

[語法] 「しちじゅう」とも読む。七十歳を「古稀」という。

なに（何）

[一] [代]

① 名前も分からず、正体も分からない事物を指すときに使う。

「これは何だ」「いったい私が何をしたというのだ」

② ある事物を挙げた上で、その他のものをひとまとめにしていうときに使う。

「財布も定期も何もかもなくした」

[二] [感]

① 相手に反発して、言っていることを否定するときに使う。

「なに、もう一度いってみろ」

② 驚いたり念を押したりするときに使う。

「なに、それは本当かい」

[三] [副]

(打ち消しを伴って) 少しも。まったく。

「なに気兼ねなく暮らす」「なに食わぬ顔をしている」

なのか (七日) [名]

① 七日間。

「七日働いた」

② 月の七番目の日。

「今日は一月七日なので七草がゆを炊いた」

[語法] 「なぬか」ともいう。

なまえ (名前) [名]

① 他と区別するために使う呼び方。名称。人間以外に使う。

「この犬の名前はタロウです」

② 姓名。

「名前は鈴木一郎です」

③ (姓に対して) 名。

「子どもの名前を考える」

なん (何)

[一] [代] 「なに」の音便。特に定まっていないものを表す。

「これはいったい何だ」「何ということをしたのだ」

[二] [接頭] どれくらい。

「彼のことは何回注意したことか」「いったい何人いたんだ」

に (二) [名]

① 一の次の数。ふたつ。

「一、二、三」

② 二番目。

「二の矢を射る」「二の句が継げない」

にいさん (兄さん) [名]

① 「あに」の口頭語。また、弟・妹が親しんで呼ぶ語。

「大学生のにいさんがいる」

② 若者。

「ちょっとそこのにいさん」

[語法] 尊敬語は、「おにいさん」。

にく（肉）【名】

① 動物の体で、主に筋肉からなる部分。

「肉が盛り上がっている」

② 食べ物としての動物の肉。

「肉の料理」「牛の肉を焼く」

③ 肉の付き具合。物の厚み。

「お腹の肉が付いた」「肉の厚い葉」

にし（西）【名】

太陽の沈む方角。東の反対。

「西の方を向く」

にじゅう（二十）【名】

① 十の二倍。十九の次。

② 二十歳の略。

「もう二十になる」

[語法] 「二十」は「はたち」とも読む。

にち（日）【造】

① 一日。24時間。

「一日一善」「日刊紙」

② 昼間。

「日中仕事をする」「日夜突貫工事をする」

③ 「日本」の略。

「日銀」「日中平和友好条約」

③ 「日曜日」の略。

「土日は休み」

にちよう（日曜）【名】

「日曜日」の略。週の第一日。

「日曜は休みです」

にっぽん（日本）【名】

わが国の国号。にほん。

にほん（日本）【名】

わが国の国号。にっぽん。

[語法]

「日本」は「にっぽん」「にほん」両様に読む。固有名詞では、「日本銀行（にっぽんぎんこう）」のように読みの定まっている場合が多い。

ニュース（news）【名】

① 一般にはまだ知られていない新しいできごと。

「悲しいニュースを耳にした」「それはビッグニュースだ」

② 新聞・ラジオ・テレビなどによる報道。

「九時のニュースをお伝えします」「新聞でそのニュースを知った」

にわ（庭）【名】

① 屋敷内で建物の建っていないところ。

「庭に花を植える」「庭の柿の木に実がなった」

② 物事の行われる場所。「学びの庭」（学校）「裁きの庭」（法廷）「いくさの庭」（戦場）

にわとり（鶏）【名】

家畜として飼育される鳥の一種。卵や肉を食べる。

「鶏が卵を産む」「鶏の飼育小屋」

[語源]「庭の鳥」から。

にん（人）【接尾】

人数を数える語。

「五人」「一人前」「十人十色（じゅうにんといろ）」

にんぎょう（人形）【名】

紙・土・木などで人の形をまねて作ったもの。女の子の遊び道具や飾り物にする。

「人形を抱く」「人形をお守り代わりにする」

ねえさん（姉さん）【名】

① 「あね」の口頭語。また、弟・妹が親しんで呼ぶ語。

「大学生のねえさんがいる」「ねえさんに勉強を見てもらう」

② 若い女性。

「ちょっとそこのねえさん」「いなせなねえさん」

[語法]尊敬語は、「おねえさん」。

ねこ（猫）【名】

ネコ科の哺乳動物。ペットとして飼われる。

「猫をかわいがって抱く」「猫にえさをやる」

[文化]日本では、「にやあにやあ」と泣く。

ねる（寝る）【下一自】

① 体を横たえて休む。

「寝ながらマンガを読む」「寝て体操をする」

② 眠る。

「もう丸一日寝ていない」「もう寝たかい」「10時には寝る」

③ 病気になって休む。

「風邪をひいて五日間寝た」「二、三日寝れば治る」

ねん（年）【名・接尾】

① 一年。

「年に一度のお祭り」「一年、二年と月日ばかり過ぎる」

② 年齢。

「年長のお友達」「幼稚園の年少組に入る」

ノート（note）【名】

ノート・ブックの略。帳面。

「小遣いの内訳をノートに付ける」「ノートに記録する」

のむ（飲む）【五他】

① （液体でも固体物でも）口に入れてかまざに流し込む。

「勢いよく水を飲む」「水といっしょに薬を飲む」「酒を飲む」

② （気分的に）圧倒する。

「敵を飲んでかかる」「飲まれる」「息を飲む」

は（歯）【名】

① 口の中に上下二列に生えている堅い器官。

「歯でかむ」「歯がじょうぶだ」

② ①の形をしたもの。

「下駄の歯」「のこぎりの歯」

はい（はい）【感】

① 相手のいうことに承諾するときに使う語。ええ。

「はい、分かりました」「はい、かしこまいりました」

② 相手の注意を向けさせる語。

「はい、こっちを向いて」

[語法]否定文でも使うなど、英語とは使い方が異なる。

はいる (入る) [五自]

- ① 外からあるものの中に移り動く。
「急いで部屋に入る」「チャイムが鳴ったので教室に入る」
- ② (仲間や集団などに) 加わる。
「合唱のサークルに入る」「サッカーのクラブに入る」
- ③ 外から侵入する。
「窓から雨が入る」「どろぼうに入られた」
- ④ 入学する。
「小学校に入る」「中学校に入る」「高校に入る」「大学に入る」

はこ (箱) [名]

(木・紙・竹などで作った) 物を入れたりしまったりする器で、角形も丸形もある。
「お菓子を入れておいた箱」「紙で箱を作る」

はさみ (鉗) [名]

二枚の刃で物をはさんで切る道具。
「このはさみはよく切れる」「器用にはさみを使う」

はし (箸) [名]

(木・竹・金属などで作った) 食べ物などをはさみ取るのに使う2本の細長い棒。「箸を使って日本食を食べる外国人」「箸をよく洗う」

はじめる (始める) [下一他]

あらたに行う。開始する。
「これから始業式を始めます」「勉強を始める」
[語法]動詞の連用形に付けても使う。「御飯を食べ始める」「歩き始める」

はしる (走る) [五自]

- ① (両足を動かして) 素早く移動する。
「廊下を走るな」「人が走っている」
- ② (動物以外の物が) 早く移動する。
「車が走っている道路」「バスが道路を走っている」
- ③ そのものが突然に現れる。
「頭に痛みが走る」「腰に激痛が走る」

バス (bus) [名]

大型の乗り合い自動車。
「観光バスに乗る」「バス停でバスを待つ」「バスで旅行をする」

はち (八) [名]

七の次の数、九の前の数。やつ。

「空中に手で八の字を書く」

[語法] 「八個」「八十」というような造語成分として使うことが多い。

はちじゅう（八十）【名】

① 七九の次の数。四十の二倍。

② 八十歳。

「祖母は八十になった」「八十を傘寿という」

はつか（二十日）【名】

① 20日間。

「二十日禁煙をした」「二十日外国旅行をした」

② 月の20日目。

「毎月二十日に神社に参拝する」「毎月二十日が給料日だ」

はっきり（はっきり）【副・ス自】

① 明確に区別できること。

「母の声がはっきりと聞こえる」「態度をはっきりとさせる」

② (気分や体調が)すっきりしていること。

「意識は、はっきりしている」「冷たい水で顔を洗ったら、頭がはっきりとしてきた」

はな（花）【名】

① (植物で)つぼみの状態から開いて実を結ぶもの。

「チューリップの花」「床の間に花を活ける」

② きらびやかで美しい物。

「彼女はまるで社交界の花だ」「花の都パリ」

③ 盛んな時期。

「今が花とばかりに咲き誇る」「若いときが花だった」

はな（鼻）【名】

哺乳動物の顔の中央にある盛り上がった部分。呼吸をしたり発声を助けたりする。「風邪をひいて鼻が詰まる」「高い鼻」「低い鼻」「団子っ鼻」

はなし（話）【名】

話すこと。また、話されたことがら。

「彼は話がうまい」「話によっては承諾する」

はなす（話す）【五他】

口で述べる。語る。

「大きな声で話す」「昔話を話す」

はやい（速い）【形】

一定の時間内にたくさん進むこと。スピードがある。

「自動車の走るスピードが速い」「彼よりも速く走れる」

はやい（早い）【形】

①（ある時間・時刻より）前である。

「早く起きる」「早く寝なさい」「寝るにはまだ早い」

②簡単である。

「こうやるほうが早い」「調べるより聞くほうが早い」

はる（春）【名】

春、夏、秋、冬と続く四季の最初の季節。

「ようやく暖かい春になった」「春は杉花粉が飛ぶ」

はれ（晴れ）【名】

（空が）晴れること。晴天。（空に）雲が少ない状態。

「昨日は雨だったけれど、今日は晴れだ」「今夜も晴れている」

ばん（晩）【名】

夕方。夕べ。また、夕方から夜にかけての時間。

「朝から晩まで働く」「あすの晩におじゃまします」

ばん（番）

[一]【名】

①割り当てられた位置。

「今度は君の番だ」「僕の番までなかなか回ってこない」

②見張りをすること。

「店の番をする」「僕が番をしているから君は休んでいていいよ」

[二]【接尾】

順番を数える語。

「一番バッターが出塁する」「二番バッターは俊足だ」

パン（[葡] pao）【名】

小麦粉を主材料として焼き上げた食べ物。

「パンにバターを塗って食べる」「朝食はパンとコーヒーですます」

ハンカチ（handkerchief の略）【名】

小型で四角形の手拭き用の布。

「ハンカチで手を拭く」「ハンカチを洗う」

【語法】「ハンケチ」ともいう。

ばんごう (番号) [名]

1つ1つに付けた順番を表す数字。
「手荷物に番号を付ける」「番号で呼ぶ」

はんたい (反対) [名]

- ① (物ごとが) 逆の関係にあること。
「反対の方角から人が来る」「左右反対におく」
 - ② (ある意見などに対して) さからうこと。同意しないこと。
「私はこの案に反対だ」「修正案に反対の意見を述べる」
- [語法]②の意味の場合、「スル」を伴って動詞として使われることが多い。
「私は君の意見に反対する」「修正案に反対する」

はんぶん (半分) [名]

2つに分けた片一方。
「リンゴを半分に割って食べる」「弁当を半分残す」

ひ (日) [名]

- ① 日の出から日没までの太陽が出ている間。ひる。ひるま。
「お彼岸を過ぎて一日一日と日が長くなる」「ずいぶん日が短くなった」
- ② 午前0時から午後十二時までの間。一日。
「日に一度は体操をする」「日に三度食事をとる」
- ③ ある特定の日。
「入学式の日のことは忘れない」「あの日のことは覚えている」

ひ (火) [名]

- ① 光や熱を発して燃えている物。
「火にあたる」「火に薪をくべる」
- ② 高温・高熱の状態にある物。
「肉によく火を通す」
- ③ 火事。
「横町から火が出た」「火の手が広がる」

ひがし (東) [名]

東、西、南、北という四つの方角の一つ。西の反対。
「太陽が東から昇り、西に沈む」「駅の東口を降りるとタクシーの乗り場がある」

ひき (匹) [接尾]

獣・虫・魚などを数える語。
「猫を三匹飼っている」「金魚鉢に金魚が五匹泳いでいる」

ひくい（低い）【形】

① 高さが少ない。

「私はあなたより背が低い」「天井が低い」「雲が低くたれこめている」

② （地位・身分・程度が）下である。劣っている。

「身分が低い人」「能力が低い人の指図は受けない」

ひこうき（飛行機）【名】

プロペラの回転やジェットなどの力によって飛ぶ航空機。

「飛行機が着陸する」「飛行機が離陸する」

ひだり（左）【名】

右の反対語。心臓のある方向。

「左を見る」「左の目の視力が弱い」

ひと（人）【名】

① 人間。人類。

「人の祖先を探る」「人の生活を調べる」

② 個々の人間。ある特定の人間。

「大坂の人」「人は一代だが、名は末代まで残る」

③ 他人。

「人は人、自分は自分」「人のふり見て我がふり直せ」「人の妻」

ひとつ（一つ）【名】

① いち。一個。

「一つ二つ三つ」「一つください」「一つにはこういう傾向がある」「一つまちがうと大変なことになる」

② 一歳。

「一つ違いの兄」

ひゃく（百）【名】

① 一の百倍。十の十倍。

「百人の人が私に会いに来た」「ボーナスが百万円を超えた」

② 百歳。

「もうすぐ百に手が届く」「おまえ百なら、わしゃ九十九まで」

びょういん（病院）【名】

患者の診察・治療を行う大きな施設。

「病院に薬をもらいにいく」「病院に入院する」

びょうき (病気) [名]

体や精神に異常が起こり、正常な働きができない状態。

「病気になって入院する」「病気がなれる」

ひらがな (平仮名) [名]

仮名の一種。漢字の草書体をくずして作られた音節文字。

「日本語は、平仮名と片仮名を混用する」

ひる (昼) [名]

① 日の出から日没までの明るい間。

「夏至は昼がいちばん長い」「昼の間に作業をすませよう」

② 昼食。

「そろそろお昼にしよう」「お昼の用意をする」

ぶた (豚) [名]

イノシシを改良して家畜化したもの。

「豚肉を食べる」「豚を飼う」

ふたつ (二つ) [名]

① 一の二倍。に。

「このお菓子を二つください」「同じものを二つ買う」

② 2歳。

『おじょうちゃん、いくつ』『ふたつだよ』

ふたり (二人) [名]

二個の人数。

「二人で頑張ればなんとかなるものだ」「二人とも欠席した」「二人は仲がよい」

ふつか (二日) [名]

① 二個の日数。

「二日で仕上げる」「完成まで後二日かかる」

② 月の二番目の日。

「毎月二日は休みです」「来月の二日は水曜だ」

ふとい (太い) [名]

横幅が大きい。

「筆で太い線をかく」「太い棒」

[語法]反対語は、「細い」。

ふね (舟・船) [名]

木や鉄などで作り、人を乗せて海や川などを走る乗り物。

「船に乗る」「湖に小舟が浮かぶ」

[表記]

「舟」は小さくて手でこぐものに使う。

ふゆ (冬) [名]

四季の一つ。秋の次、春の前。

「冬は寒い」「冬はスキーをするのが楽しみだ」

ふるい (古い) [形]

(物ができる) 長い時間が経っている状態。

「その情報はもう古い」「古い電池は捨てるほうがよい」

ふろ (風呂) [名]

湯を入れて、体を温めたり洗ったりする設備。

「風呂に入る」「風呂で体をよく洗う」「風呂をわかす」「風呂をたてる」「風呂をたく」

ふん (分) [名]

時間の単位。1時間の六十分の一。六十秒。

「熱くてこの風呂には一分と入っていられない」「電車が来るまで後五分かかる」

ページ (頁) [名]

① 閉じた印刷物の片面。

「次のページをめくって下さい」

② 本文の裏表に順序立って割り振られた数字。

「この本はページが飛んだ所がある」

[参考] ページがかけているのを落丁、ページが不揃いなのを乱丁という。

へた (下手) [名・形動]

① 技術が未熟である。

「彼は将棋が下手だ」「彼女は字が下手だ」「彼は話が下手だ」

② 物事を処理したり、さばいたりする能力が欠けている。

「彼は人を使うのが下手だ」

③ 技術が未熟で素人の域を出ない人

「下手の横好き」

へや (部屋) [名]

① 建物内の仕切られた空間何らかの機能や用途を有しているもの。また、それを数える助数詞。

「今晚シングル一部屋空いてますか」

② 力士養成のための寮生活を親方を中心として行う場所で、「へや」あるいは「べや」と読む。

「彼は時津風部屋（べや）の力士だ」

[語法] 何らかの機能を持った部屋は、職員室、研究室、娯楽室、喫煙室、ボイラー室、操縦室、会議室、授乳室、休憩室、社長室、更衣室の様に、「室（しつ）」が用いられる。

ペン (pen) [名]

① 長い柄の先に付いた先が割れた金属やガラスにインキを含ませた筆記具。

「妹は英語のペン習字を習っています」

② 万年筆、ボールペン、蛍光ペン、サインペン、筆ペンのように、自動的に液体が紙に接する部分に補給されるメカニズムを持った筆記具。

「履歴書はペン書きして下さい」「そのペン貸して下さい」

③ （文学的表現）文筆業を指してこう言う。

「彼は差別語が多くては文筆業は成り立たないとしてペンを折った」

べんきょう（勉強） [名・ス自他]

① 学問として組織だった体系を身につける行為。

「弟は今勉強中です」

② 進学や、資格取得のために必要とされる知識を身につける行為。

「彼女は看護士になるために勉強中です」「彼は弁護士になるために法律を勉強しています」

③ 社会の常識を身につける。

「一人前の人間になるにはまだまだいっぱい勉強することがある」

④ 値段を安くする。

「買いませんか、勉強しますよ」

[語法] 大学の授業科目は、「大学では経済学を専攻しました」[大学ではドイツ語を学びました]のように言うのが普通である。又、独学で知識を身につける場合には、[私は独学でフランス語を勉強しました]のように言うのが普通である。主として、先生について芸能や、習い事を身につける場合は、「母は若い頃お茶を習いました」「弟はギターを習っています」のように言うのが普通である。

べんじょ（便所） [名]

排泄を行うための部屋。職場やビルの女性用の部屋においては鏡などが備え付けられていて、化粧もできるようになっている。

[語法] 日常の会話では、この語を使うことはなく、「トイレ」「お手洗い」「化粧室」等の婉曲語が使われる。「トイレ」、「お手洗い」は、男女両方が使う一般的な語であり、「化粧室」は女性が使う語である。

べんとう（弁当） [名]

① 食べ物を携帯用の容器に入れたもの。

「今日の昼飯は女房の作った弁当だ」

- ② レストラン等で出される弁当の容器に入れた料理。

「幕の内弁当」

[語法] 元来は妻が夫のために作るものと意味したが、外食産業の出現と共に、携帯容器に入れて売られる主食全般がこう呼ばれるようになった。

ぼうし（帽子）[名]

ファッションとして、集団への帰属のシンボルとして、或いは日除け、雨除けとして頭に被る物。

「暑いから帽子を被っていきなさいよ」「卒業式にはその大学独特の帽子をかぶります」「帽子を被る」「帽子をとる」「帽子を脱ぐ」

[語法] 布製で頭をすっぽり覆う防災用の被り物は、防災頭巾と言われていたが、最近では防災帽という言い方もある。ヘルメットのことを防災帽と呼ぶこともあるが、通常は、別物として区別している。つまり、金属や硬質プラスチック製のものは、ヘルメットと呼ばれるのに対して、布製のこれまで頭巾と呼ばれてきたものの方は防災帽と呼んで区別する。

ぼく（僕）[代]

- ① 親しい仲間との会話で男の子や、成人男子が自分を指す言葉。

「僕はこう見えて短気なんだよ」「それ僕の靴だよ」

- ② 男の子に対して使う二人称の代名詞相当語句。

「僕幾つ？」

[語法] 改まった場所で成人男子が、自分を指して「僕」と言うと、子供っぽい感じがする。

ポケット [名]

- ① 服やズボンに付いている物を収納するためのスペース。

「ポケットに定期を入れたまま洗ってしまった」

- ② 鞄やバッグの表面、あるいは、内部に付いている収納用のスペース。

「このバッグは携帯や傘のためのポケットがあって重宝だ」

ほし（星）[名]

- ① 宇宙空間に浮かび円周運動をする固体のあるいはガス状のもの。

「今晚は星が出てないから明日は天気が悪いな」

- ② 一年を12の星座に割り振った運勢占いの基本となる分類単位。

「僕はさそり座だけど君は？」

- ③ 等級化に使う標識。

「このホテルは星が七つだ」

- ④ 犯罪事件の犯人を意味する警察関係者が使う隠語。

「星を見失うなよ」

[語法] ホテル等の等級化に使われる場合、星の読み方は、次の様になる：「ひとつぼし」「ふたつぼし」「みつぼし」「よつぼし」「いつつぼし」「ななつぼし」。「六つ星」というのは実際には使われない。星の名前に用いられた場合には、[ぼし] [せい] の二つの読み方がある。例えば、ほつきょくせい、ひこぼし。又、④の意味では「ホシ」と表記するのが普通。

ほそい（細い）[形]

① 紐状のものの断面の直径が小さい。

「もっと細い糸ありませんか」

② 直線等の幅が小さい。

「そんなに細い線じゃよく見えないよ」

[語法] 「食が細る」は食欲がなくなるの意味。「年取ると食が細くなつてね」という風に使う。

ホテル (hotel) [名]

原則として、バス、トイレが室内にあり、寝室にベッドがある洋風の宿泊施設。

「シンガポールではラフルズ・ホテルに泊まりました」

[語法] 和風の建物で、畳に布団を敷いて眠る宿泊施設は旅館と言う。

ほん（本）[接尾]

丸くて長いものや、映画の作品数を数える言葉。

「駅の前には松の木が三本今でも立っています」「歯が三本欠けてしまった」「箱には鉛筆が 12 本入っています」

[語法] 数詞と連結した場合の読み方は、次の通り：「いっぽん」、「にほん」、「さんぽん」、「よんほん」／「しほん」、「ごほん」、「ろっぽん」／「ろくほん」、「ななほん」、「はっぽん」／「はちほん」、「きゅうほん」、「じゅっぽん」、「ひやっぽん」、「せんぽん」、「まんぽん」、「おくほん」。

ほん（本）[名]

印刷されノンブルが付された紙を綴じたもので、娯楽、教養を目的とするもの。

「あの子は本を読むのが好きだ」

ほんとう（本当）[名・形動]

① 事実。

「それは本当に起こったことだ」

② 実際のところ。

「本当は怖いんだろう」

③ (本当なら、本当はの形で) 常識や良識に従うなら。

「本当なら礼の一つも言わなきやいけないのに」

④ 本来あるべき状態。「彼女の回復振りはまだ本当じゃない」

まい (枚) [造]

布地、紙、板、皿、貨幣の様に薄いシート状のものを数える言葉。

「50円切手三枚下さい」「このタオルを五枚下さい」

[語法] 写真は一枚、二枚と数えるのが正式。本はページで数え（この本は4ページ脱落している）、背広は着で数える（二着で5万円です）。

まいあさ (毎朝) [名・副]

朝になると決まって。

「毎朝少年は休まず新聞を配達した」

まいとし (毎年) [名・副]

年が巡って来るごとに。

「毎年父の田舎から新米が届いた」

まいにち (毎日) [名・副]

① 例外なく全ての日。

「毎日が退屈に感じられた」

② 来る日も、来る日も。

「彼は毎日食後の歯磨きを励行しました」「毎日夫婦はせっせと荒れた土地を耕した」

まいばん (毎晩) [名・副]

① 例外なく全ての晩。

「彼の帰りが遅いのは毎晩のことだった」

② 晩になると決まって。

「彼は毎晩飲み歩いた」

まえ (前) [名]

① 顔が向いている方向。

「人の前を通るもんじゃない」「あなたの前に落ちてるの、あなたの財布じゃありません」

② 人と向かい合う方向。

「皆さん、前を向きましょう」

③ 建物や物の正面の方向。

「学校の前に郵便局がある」「テレビの前に立っちゃ見えないよ」

④ 物が人と向き合っている側。

「その箱の前にあるの、何だい」

⑤ 中心的な部分に先行する部分。

「革命前夜」

⑥ 正面に近い部分。

「車の前が凹んでしまった」

まえ（前）【接尾】

- ① 基準となる時点に先行する。
「今から三年前に事件は起こった」
- ② 基準となる出来事に先行する時。
「彼が生まれる七年前」「それより一時間前彼は居酒屋で飲んでいた」

まずい【形】

- ① （食べ物や飲み物が）おいしくない。
「このケーキまずい」
- ③ 面倒なことになることをおそれている時に使う言葉。
「あの事務員を叱ったのはまずかったなあ、社長の娘だぜ」「まずい、先生が来るぜ」「彼を誘わないのはまずいですよ」

まだ（まだ）【副】

- ① ある状態や動作が依然として継続していること。
「父はまだ怒っています」
- ② 今の時点でも尚。
「あいつはまだ子供だな」
[語法] 「山田さんは来ています？」に対して、「来ていません」は、来るかどうかが未定な場合の答えであるのに対して、「まだきていません」は、来ることが期待されているのにその時点で来ていないということを含意する。

まつ（待つ）【他五】

- ① ある人や物が来るのを期待している状態。
「もう30分近くもバスを待っている」
- ② 締め切りや期限を猶予する。
「原稿は今週末まで待ちます」
- ③ 現状のままでいること。
「僕が帰って来るまでお嫁に行かずに待ってて下さい」

まっすぐ（まっすぐ）【形動】

- ① 曲がっていないこと。
「真っ直ぐな線」
- ② 他の場所に寄らずに目的地を目指すこと。
「真っ直ぐに家に帰ってきなさい」
- ③ 素直で正直な性格の。
「彼女はまっすぐな性格だ」

マッチ（match）【名詞】

軸の頭に黄磷を塗布したものを箱の側面で擦ることによって火を出す道具。
「ライターがなければマッチでもいい」

まで (まで) [副助]

- ① 移動の終着点を示す。
「京都までの切符」
- ②一定の時間、期間、範囲の下限を示す。
「書類は3月末までに提出下さい」「小学生から高校生までを生徒とよぶ」「6時までに来なかつたら帰るよ。
るよ」
- ③ 極端なものによる例示。
「ついには靴まで質屋行きとなつた」

まど (窓) [名詞]

換気、採光、展望のために建物に開けた開口部。
「窓を開ける」「窓を閉める」「ステートルームには窓がありません」

まる (丸)

[I] [名]

- ① どの2点をとっても同一の角度で曲がっている図形、円。
「コンパスを使わずに丸を描くのは難しい」
- ② 合格、正解を表す記号。
「正しいものに丸をつけなさい」
- ③ 文の終わりを示す記号。句点。
「この文の終わりに丸が抜けています」
- ④ 数字の零。
「四 (よん) ○ (まる) 九 (きゅう) 号室の鍵下さい」
- ⑤ そっくりそのまま。
「りんごを丸ごとかじる」
- ⑥ 半濁点。記号は「。」。
「はに丸では」
- ⑦ 正しいこと。
「今の答えで丸だと思う人？」

[II] [接頭]

日数を表わす語の前に置かれて、その日数が欠けていないことを表す。
「丸一日熱があった」

[III] [接尾]

船の名前に付ける語。
「氷川丸」

まるい（丸い） [形]

① どの2点をとっても直線にはならない周で囲まれている。

「盆のように丸い月」

② 性格が穏やかで練れた。

「年をとって丸くなった」

[表記] 「円い」とも書く。

まん（万） [名]

① 千の十倍の桁。

「一千万円」

② 数が非常に多いことを表す。

「八百万（やおよろず）の神」

③ 全て、何でも。

「万屋（よろずや）」

[語法] ②と③ではよろずと読む

みえる（見える） [下一自]

① 視界に入ってくる。

「晴れた日には富士山が見えます」

② 見ることができる。

「老眼で小さい字がみえなくなつた」

③ 思われる。

「犯人は土地勘があるように見える」

みかん（蜜柑） [名]

温州ミカンのこと。

「正月にみかんは欠かせない」

[参考] それ以外のみかんは、固有の名称で呼ばれる。例えば、デコポン、伊予柑、甘夏、夏みかん、ハッサク、ザボン、ボンタン、金柑、ポンカン、清見の様に。

みぎ（右） [名]

① 心臓とは反対の側。

「右向け右」「その角を右に曲がって下さい」

② 体制擁護的、或いは愛国的な思想。

「彼の考えは右寄りだ」

[語法] 反対語は「左（ひだり）」

みじかい（短い） [形]

① 端から端までの間隔が小さい。

「この紐じや短い」

- ② 時間の間隔が小さい。
「北海道の夏は短い」
- ③ 服やスカートの丈が小さい。
「彼女が穿いているスカートは短い」

みず (水) [名]

天から雨となって地上に降り注ぐ物。
「水があれば一週間は持ちこたえられる」

みせ (店) [名]

物を売る、もしくはサービスを提供する場所。
「理容店」「青果店」

[語法] 床屋と理容店では、前者には若干古くて、小規模なイメージがあり、これに対して、後者には、現代風の、設備も整った大規模なイメージがある。

みせる (見せる) [下一他]

- ① 相手の目の前に出す。
「いいもの見せようか」
 - ② 演技をする。披露する。
「スキーで素晴らしいジャンプを見せる」
 - ③ 感情や考えが表情や態度で人にしれる。
「その店員は客を馬鹿にした様な態度を見せた」
 - ④ ある性質を有している様に思わせる。
「上品な言葉使いが彼女を優雅に見せている」
 - ⑤ 医者に診察をしてもらう。
「子供を医者にみせた方がいい」
 - ⑥ 人を魅了する。
「あの役者の演技はいつもながら見せるなあ」
 - ⑦ 本物らしく見える様にする。
「白い石を波に見せている」
- [表記]⑤は「診せる」とも書く。

みつか (三日) [名]

- ① 三日間。
「雪は三日も降り続いた」
- ② 月の三番目の日。
「三月三日は雛祭りの日だ」

みつつ (三つ) [名]

- ① 三個を意味するくだけた言葉。

「このお饅頭三つ下さい」

② (幼児語) 三歳のこと。

「僕おいくつ」「三つ」

みどり (緑) [名]

① 木の葉の色。

「緑は目にいいそうだ」

② 木が多く集まっている地帯。

「この辺は東京でも緑が多い所です」

③ つややかな黒髪を形容する言葉。

「緑の黒髪」

みなみ (南) [名]

① 磁石が南極の極点を向く方角。

「その山は南の方に見えます」

② 南半球側。

「南の国だけあって暑いなあ」

みやげ (土産) [名]

訪問の際にお礼の気持ちをこめてもっていいく品物や、旅の記念に購入するある土地の特産品。

「上司への土産に何を買ったらいいかしら」

[語法] 「土産話」の形で、旅から帰ってから他人に聞かせたくなるようなおもしろい、又は珍しい話を意味する。人に手渡すときには、[これお土産です] の様に「お」を付けて使う。

みみ (耳) [名]

① 顔の横にある聴覚器官の開口部分。

「高さのせいで耳がビーンとなった」

② 聞こえの程度、聴覚。

「耳が聞こえにくい」「耳が遠い (聴覚が衰えて聞こえにくい)」

③ 食パンの周囲の焦げて堅い部分。

「食パンの耳も料理に使えます」

みる (見る) [上一他]

① 目を用いて文字、映像、物体を認識する。

「富士山を見るとすがすがしい気持ちになる。」

② 試合、演劇、映画等を視覚を通して楽しむ。

「サッカーの試合を見る」

③ こっそりと覗くこと。

「人の答案を見てはいけません」

④物事を予測する能力。

「彼は先を見る目がある」

みんな（皆）[名]

① ある集団の全員。

「乗客のみんなが犠牲になった」

②（口語で）ある物の全体、或いは全部を指す。

「彼はお金をみんな掏られてしまった」

[語法]「みんな準備できましたか」のように、副詞的にも用いる。「彼等はみんなお金を探られてしまった」では、みんなは彼等全員を意味するのに対して、「彼等はお金をみんな取られてしまった」ではみんなはお金全部を意味する。「みんな」は「みな」の口語体。

むいか（六日）[名]

① 一日の六倍の期間、一週間に一日足りない期間。

「試験まであと六日ある」

② 月の第六番目の日。

「来月の六日に日本を発ちます」

むこう（向こう）[名]

① 何かを越えた所。反対側。

「扉の向こうに誰かいる」「道の向こうへ逃げて行きました」

③ あちら。

「向こうの山がそれだ」

④ 相手、先方。

「向こうの出方次第さ」

⑤ これから先。

「向こう一年間は活動を停止するらしい」

むし（虫）[名]

① 昆虫、回虫、条虫、環形動物の総称。広義には、蜘蛛、ダニの類も含む。

「虫を取りに林へ行く」

② 感情、気持ち。

「今日は課長は虫の居所が悪いみたいだ」「母が死ぬ前に虫の知らせがあった」

③ 感情の原因となる正体不明のもの。

「彼女には又ふさぎの虫が取りついたようだ」

④ 何かに夢中になる人。

「彼は本の虫だ」

⑤交際相手や配偶者としてふさわしくない男。

「うちの娘に悪い虫がついてね」

むずかしい（難しい）〔形〕

技術や複雑な思考が必要とされる。

「この機械の操作は難しい」「この問題は大人にも難しい」

むつつ（六つ）〔名〕

① 2の3倍の数。

「サイコロには六つの面がある」

② (幼児語で) 六歳のこと。「お譲ちゃんお幾つ」「六つ」

むらさき（紫）〔名〕

① 赤と青の中間色。

「紫が似合う女性はなかなかいない」

② ムラサキ科の多年草。

「この染料はムラサキから採ったものです」

③ 醤油のことをしやれて言う言葉。

「すみません、むらさき下さい」

め（眼）〔名〕

生物の一器官で通常一对あって視覚の受容を司る。

「その深海魚は眼が退化している」

めがね（眼鏡）〔名〕

減退した視力を補う器具で、二個のレンズが入ったフレームを耳にかけて使うもの。

「俺も眼鏡をかけるような年になったか」「眼鏡を懸（か）ける」{眼鏡を外す}

もう（もう）〔副〕

① あることが完了してしまったことを表す語。

「もう秋だなあ」

② これから先はそうでないことを表す語。

「もう彼は戻って来ない」

③ 「ちょっと」「少し」などの副詞を強める語。

「もうちょっと待って下さい」

もく（木）〔名〕

木曜日の略。

もくよう（木曜）〔名〕

日曜日から始まる週の第5日。木曜日。

「木曜は暇です」

もつ（持つ）【五自他】

- ① 手に下げる。
「荷物を沢山持つ」
- ② 所有する。
「彼はビルを二つ持っている」
- ③ 資格を取っている。
「運転免許を持っている」

もっと【副】

量や程度が未だ不満足であることを表す語で、形容詞や副詞の修飾に用いられる。
「もっと塩を入れて下さい」「もっと強く引いて下さい」「もっと安いありますか?」

もり（森）【名】

- ① 多くの木が生い茂っている地域で、保護されたり、手が加わっていないもの。
「この森にはオランウータンが生息している」
 - ② [森・杜] 神社を取り囲む聖域としての木が密生している地域。
「この杜には天狗の伝説がある」
- [語法] 何らかの目的で植林された木の集団は、「防風林」、「防砂林」の様に、「林（りん）」が使われる。

や（夜）【造】

夜を意味する造語成分。
「聖夜」「除夜」

やきゅう（野球）【名】

アメリカが発祥の地である球技で、ベースボールと呼ばれるもの。
「イギリスでは野球はほとんど行われていない」

やさい（野菜）【名】

土地に生育する植物で、そのままで、或は調理をして、副食として供するもの。
「トマトは野菜だが、アボガドは果物だ」

やさしい（易しい）【形】

- ① 面倒でない。
「この機械は操作がやさしい」
- ② 労力や複雑な思考を必要としない。
「この問題はやさしい」

やすい (安い) [形]

- ① 金銭評価額が小さい。
「中国産は安い」
- ② 費用や経費が少なくて済む。
「飛行機の方が新幹線より安い」

やすみ (休み) [名]

- ① お盆の頃、正月の前後に会社が定めた仕事の無い日。
「明日からお盆休みです」
- ② 職場や学校で定めた仕事や授業のない日。
「明日は創立記念日で休みです」「今度の日曜日は休みです」

やすむ (休む) [五自他]

勤務として、或いは当面行っていることから離れる。
「明日休んでもいいですか？」

やっつ (八つ) [名]

- ① 8個の碎けた表現。
「この林檎八つ下さい」
- ② (幼児語) 8歳のこと。
「お譲ちゃんお幾つ」「八つ」

やま (山) [名]

自然の力が原因で、周囲の土地より盛り上がっている地形を指している。
「キナバル山は毎年 5 mm ずつ成長している」
[参考] 大阪市の天保山の様に海拔 4.53m でも山というので、高さは余り関係ない。富士山 (ふじさん), 御岳山 (みたけさん), 磐梯山 (ばんだいさん) 羊蹄山 (ようていざん), 天王山 (てんのうざん), 浅間山 (あさまやま) のように、造語成分としても使われる。キナバル山のような外国の山では、「やま」と読むことが多い。

ゆうがた (夕方) [名]

日が落ちてから夜になるまでの間の時。
「夕方にわか雨があった」

ゆうびんきょく (郵便局) [名]

荷物、葉書、封書、為替の配達や、貯金、保険を業務とする機関。
「郵便局からお金を送る」

ゆき (雪) [名]

大気中の水蒸気が低温で氷結して、落下してくるもの。

「今年の冬は雪が多い」「わー、雪だ」

ゆっくり [副]

動作や行動が穏やかで急でない様。

「ゆっくり歩く」「ゆっくり話す」

よ（夜） [名]

太陽が没してから再び太陽が上るまでの時間。よる（夜）。

「夜が明ける」「夜が更ける」

[語法] [月夜], 「夜遊び」, 「夜明け」の様に, 造語成分となることもある。

ようか（八日） [名]

① 月の第八の日。

「八日は日曜です」

② 期間としての八日。

「そこに八日滞在していました」

ようちえん（幼稚園） [名]

小学校入学以前の子供を教育する施設。

「あの子も来年は幼稚園だな」

ようふく（洋服） [名]

ズボンと対になっている上着或いはその両方。

「洋服を新調する」

よく（よく） [副]

① うまく。

「よくできたわね」

② 困難な状況を乗り越えて。

「よく優勝できたね」

③ 頻繁に。

「学生の頃よく通ったものです」

よこ（横） [名]

① 寝た状態。

「横になって下さい」

② 正面ではない側面。

「横から見るとかなり出っ張っている」

③ 正面或いは上から眺めて水平方向の辺。

「横は40センチです」

よっか (四日) [名]

- ① 月の第四の日。
「四日は日曜です」
- ② 期間としての四日。
「彼はここに四日滞在していました」

よっつ (四つ) [名]

- ① 四個の代わりとして。
「おはぎを四つ下さい」
- ② 四歳の意で子供が使う表現。
「僕幾つ」「四つ」

よむ (読む) [五他]

- ① 文字の視覚刺激に意味解釈を施すプロセス。
「小説を読む」
- ② 相手の態度からその人の心理を推し量る。
「彼は上司の心を読むのがうまい」
- ③ 口の動きから話している言葉を推し量る。
「唇を読む」
- ④ 書かれたものを音として再現する。
「お経を読む」

よる (夜) [名詞]

太陽が没してから再び太陽が上るまでの時間。
「秋は夜が長い」

よわい (弱い) [形]

- ① 能力や体力がない。
「弱い者をいじめてはいけない」
- ② 苦手な様。
「僕は数学が苦手なんです」
- ③ 抵抗力がない。耐える力がない。
「僕は暑さに弱いんです」

よん (四) [名]

二の二倍。
「二足す二は四」

よんじゅう (四十) [名]

- ① 十の四倍。
「五掛ける八は四十」
- ② 四十歳のこと。
「四十にもなってまだ分別がつかないのか、君は」

らいしゅう (来週) [名]

今週の次に来る週。
「来週でしたら都合が良いのですが」

らいねん (来年) [名]

今年の次に来る年。
「来年はぜひ大学に合格したいものだ」

ラジオ (radio) [名]

- ① 電波によって音声番組を送り出すシステム。
「ラジオの番組表」
- ② 上記①の受信装置。
「ラジオで台風情報を聞く」
[語法] 「放射」、「無線」の意を表す合成語を作る。「ラジオアイソトープ（放射性同位元素）」「ラジオビーコン（無線標識）」

りんご (林檎) [名]

バラ科の落葉高木、およびその果実。
「りんごの様に赤い子供のほほ」
[参考] 日本では、紅玉、ふじ、むつ等の品種が有名である。

れんしゅう (練習) [名]

- ① 演技の完成を目指して繰り返しそれを行うこと。
「ピアノの発表会に備えて練習中です」
- ② 競技や大会に備えて技や技術の完成を計ること。
「練習不足で彼は柔道の試合に敗れました」

ろくじゅう (六十) [名]

- ① 十の六倍。
「39足す21は60」
- ② 六十歳のこと。
「私の母はもうすぐ六十です」

わかる [五自]

- ① 人の言っている言葉の意味が了解できる。

「おっしゃっていることが分かりませんが」

- ② 解決方法や答えを思いつく。

「わかった、こうやればいいんだ」

- ③ 人の指示に従う意を表す。

「わかった、すぐ行く」

わすれる（忘れる）【下一他】

- ① 以前の事柄が記憶から脱落する。

「私はその女性の名前を忘れてしました」

- ② うっかりして当然すべきことをしない。

「彼にお札を言うのを忘れてしまった」

- ③ 持ってくるべきものを置いてきてしまう。

「いけない、定期券を忘れてしまった」

わたくし（私）【代】

話し手或いは書き手が自分自身を指して言うあらたまつた表現。

「私はこの度大阪に転勤することになりました」

わたし（私）【代】

話し手或いは書き手が自分自身を指して言う言葉。

「そのお菓子私にも頂戴」

わたしたち（私達）【名】

- ① 自分と相手の両方を指して言う言葉。

「私たちは自分の国に誇りを持たなければなりません」

- ② 自分の側に属する人全体をさして言う言葉。

「私たちは日本から参りました」

わらう（笑う）【五自他】

- ① 楽しく感じたり、心地よく感じた時に付隨して起こる顔面の表情の変化。

「その赤ちゃんはよく笑う」

- ② 面白く感じた時に付隨して顔面の表情が変化すること。

「このコミックは笑えるよ」

- ③ 他人の行動や様子を馬鹿にする。

「人が困っているのを見て笑うもんじやありません」

わるい（悪い）【形】

- ① 世間の常識や良識に反する。

「先に手を出した君が悪いよ」

- ② 性格が好ましくない。

「あいつは悪い奴だから気を付けろよ」

③ 品質やレベルが低い。

「あの店はサービスが悪い」

④ 失礼なことをする。

「彼に挨拶をせずに悪いことをしてしまった」

日本語基本語辞典－初級 500 語－

平成 21 年 9 月 18 日

編 集 独立行政法人国立国語研究所日本語教育基盤情報センター

島村 直己

発行者 東京都立川市緑区 10-2

独立行政法人国立国語研究所日本語教育基盤情報センター

柳澤 好昭

印刷所 株式会社外為印刷